評 その梅は寒梅(以下三首共)であり、その色は白であることは勿論、春の先驅のやうな暖みある輕い雪が紛々として霏々として枝に梢に花衆(はなざ)に亂れ降る爲めに白梅の白、白雪の白、相交つて梅か雪か、けぢめもわからない美の快き亂舞は實にこの歌の通りであらう。唯少し遺憾なのは、さなきだに雪は大きく梅は小さいものを、此は更に技巧の上から雪を偉大化し梅を縮小化した爲めに、雪のすばらしさは背づかれるが、梅の方は小さく〳〵あるかなきかに縮かまつて見えることである。寒梅そのものを主材とするには今少し人工天工を奪ふ用意がほしい。

けれども此は昔から賞美の句で卷頭序の赤人が、「我せこに見せんと思ひし梅の花」と列べて寧ろそれ以上の佳調といはれ、さてこそ「人丸」と推定せられたものである。が愚考は人麿と推定しかけたのは公任以後のことで、それ以前に於てはよみ人しらずとなつて居たものだから全く作者不明で、萬葉時代の歌人ならば風調自然の影響で無名作者と雖も咏み得たではなからうか？ 又赤人が同じ詩囊を色々に推敲して「我せこ云々」とも歌ひ「梅の花それとも見えず」とも歌つたもので、此は兄彼は妹といつて同一歌系であるかもしれない。で結局本文通りよみ人しらずで宜しい。萬葉時代の風潮といつたのは、あの頃の歌には類咏が可なり澤山あるからである。

卷八春雜歌一四二六赤人の「我せこに云々」

卷九冬雜歌一六四七「梅の花枝にかちると」

卷十一冬相聞寄レ雪二三四四

梅の花それとも見えずふる雪のいちじろけむなまづかひやらば

新撰萬葉下に

冬來れば梅に雪こそ降りまがへ何れの枝を花と折らまし

等はその顯著なものである。

梅の花に雪のふれるをよめる

三三五 花の色は雪にまじりてみえずともかをだに匂へ人の知るべく　小野たかむらの朝臣

考 詞書・作者　元「また梅の木に雪の降りかゝりたるをみて○○○　○○筆○○」

初句　新撰「梅の花」

二句　元・筋「雪に紛ぬて」　六帖一雪「雪は交りて」

三句　六帖一「香をだにぬすめ」

四句　六帖一「香だにぬすめ」

評 花の色は　白梅の花の色は(白いので)　雪にまじりて　白雪に交つて　かをだに匂へ　香だけなりと匂はせよ。作者の梅に對する憧憬をこめたいひ方　人の知べく　人は自分を中心にしてそれを擴げたもの、汝を見めでようとする人にそれと見わけがつくやうに。

語 白梅よ。汝が花の色は白雪と交つて見えなくとも(それは仕方がないとしてせめては)香だけなりとも匂はせよ。(汝をもてはやす)人の(かいで)それを見別けられるやうにサ。

評 春下九一と同型、白梅の薫り高いこと、作者がためつすがめつ梅に心を碎いてゐる有樣色と香交りと匂ひ(紛亂と顯著)と樣の對照的技巧などが特徴、新撰和歌の初句「梅の花」はこの對照を弱めるから可けないし、その餘の修辭皆此より劣る。

雪のうちの梅の花をよめる

冬　三三五・三三六

三三六　梅のかのふりおける雪にまがひせばたれかことゝ分て折らまし

考　詞書・作者　元「雪の中の梅○花を○○○○貫之」
三句　元・筑・相・六帖一雪「移りせば」
四句　六帖一「誰かは物を」

釋　梅のかの　アノ梅　高い薫りか（若し）　ふりおける　降り積もつて居る雪、九九七にも此に似た句がある。　まがひせば　紛れでもしようものなら　こゝ〳〵　事毎と當て、梅は梅雪は雪とけぢめをつけて別々に、殊々・事々・特殊・異々は採らず、この語釋は契沖のが委しいから引いておく。

こゝ〳〵は上の秋部に秋の露いろ〳〵ことにおけばこそといふを、菅萬には第二句いろこと〳〵にとありて色殊殊丹と書せ給へり、俗に面々にといふ心也。

又貫之集に

櫻花ちらぬ松にもならはなん色こと〳〵に見つゝ世を經む是もちらぬ事を櫻も松にならへ。然らば松の色と櫻の色とをならべて面々に見て、世のかぎりを經んとなれば、今も梅か香のふりつみおきたる雪にうつりてまがひせば、誰か雪は雪、梅は梅とわきて折ことを得むと也。

講　（若も）梅が香が（その色と同じやうに）降り積つた雪に紛れようものなら、誰が一つを別々に、花は花雪は雪と區別をして折らうぞ。誰も區別をなし得なからう）

評　唯清薫馥郁の特美を有つて嘗て晩冬殘餘の積雪に紛れずといふので、要は寒梅の薫り高きを歌ふにある。春の部四〇の月に對して梅を區別したものと寸分違はぬ境である。又同四一とも相似の着想である。だから想に於ては固定的な型を採つて用語で新裝したものである。

ゆきのふりけるを見てよめる

三三七　雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅と分て折らまし　紀とものり

考　詞書　友則集「雪のふれるを見てよめる」　作者・元「雪の降るを見て○○○友則」
六帖一雪・新撰・卅六　同。

釋　雪ふれば　雪が降つたので、その結果を二三句にいふ。　木毎に花　どの木もこの木も時ならぬ花、そして木毎は字喩で木籠に毎は梅だから、梅の花が咲いたと暗喩したもの。

講　雪がふるとどの木も〳〵花が咲いて（まるで白梅のやうに見えるので）何れを梅（何れを）雪と見分けて折らうぞ（道理で木毎の花とは文字の方でも梅の花と同じだから）

評　機智・尖巧驚くべきものだが、詩趣は案外索然たるもの。類咏として

六帖に

いづれをかわきて折らまし梅の花枝もとゝにふれるしら雪

とあるのは梅と雪と中心何れにあるか曖昧な嫌がある。又新撰萬葉に

冬くれば梅に雪こそ降りまがへいづれの枝を花とまをさむ

は下句輕快だが初句現實感から遊離した嫌があつて、矢張こゝの歌が等類の咏の中では技巧に數歩の長がある。

物へまかりける人を待てしはすのつごもりによめる（清のひ）

三三八　わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず　みつね

考　詞書　元「よめる」の三字なし。
五句　元「おとづれもせぬ」
六帖六冬の草　同。

補　しはす　師走、陰暦十二月の異名。わがまたぬ　わたしが待ちもしない。年は來ぬれど　新年は最早つひ隣までやつて來たけれども　冬草の「かれにし」の序詞丁度季節が冬枯だから、寂しく心細い句となつてゐる。かれにし　「枯れにし」と秀句の「離れにし」で久しく音とだえして訪づれて來ない。

講　或處へ行つた人の來訪を待つて十二月の晦によんだ。（この）私の待つても居ない新年は早やつひ近くまでやつて來たけれども冬草の枯れるといふやうに（ふつに）離れ方になつた人は（一向）音づれもしない。

評　待人は來らず待たぬ年は來るといふ對照の上に出來た歌で、つまり「歳暮待人」とも題すべきもの。歌としてはさほど餘情もないが、消息として之をその當人に言ひ送つたものと觀れば、相手たるもの倉皇身づから訪づれるか少くとも何とか一言辯解なかるべからざる處でさうした社交的辭禮として面白い。

としのはてによめる

三三九　あら玉の年のをはりになるごとに雪も我身もふりまさりつゝ　在原もとかた

考　詞書　元「歳〇終によめる」
三句　六帖一師走「成る時は」
補　あらたまの　年の枕詞　ふり増りつゝ　雪も降りまさり、我身も古りまさる。この下「といふ感に堪へない」など補ふべき處だ。

講　年末が來る毎に雪の降りまさると共に我身も古りまさるといふ感じの今更のやうに得堪へぬものがある。

評　一日を過ぎれば一日の老いあり、一月を暮らせば一月の老衰來る。是れ劫初以來生きとし生ける者の宿命で何も歳末に限つたわけではない。けれども人間は一つの劃期的な場合に我こしかたを觀る氣分になる。そこで夜には一日を顧み土曜には一週を顧み、晦日には一ケ月を顧み、歳暮には過ぐる一年を顧み、一年に關聯して已往幾十年に歩んできた我が道程をも顧みる。「噫我老いぬ」の歎は定まつてその終に出て來る。だから事實は念々刻々の老來だが、之を顧みて咨嗟するのは「歳の終」といふのが實際であらう。（或は自分のずつと以前の知己に邂逅しても起きるがそれは暫らく措く）お負けに歳暮特有の景致として雪の降りまさるを配し、簡結に表すために秀句に仕立てた技巧も優れて居る。

唯飽かず思ふのは作者特殊の境遇がはつきり斷つてもないし、作者獨自の歳暮感といつた風の個想の閃きが見られないことで、隨て魂の奥底よりのためいきとは受取れない。後來藤原俊成は八十八歳の暮を詠じて

けふ毎にけふや限りとおもへども又も今年にあひにけるかな

といつた。此などは如何にも老人らしい哀樂を混融して趣深いものがある。よい年をしてゐるので、一日毎に「もう年の暮も今年限りであらうと思つたけれども、幸命長らへて又も今年のこの大晦日にあつたことよ」といふ、そこには「まあよかつた」とホツとするその束の間の情趣の細い線の尾について「だが來年の今に遇ふ事は恐らくはむつかしからう」といふ淋しさがこびりついて、次第にその方が太くなつて果ては「だから今日といふこの恐らくは最後であらうところの歳の暮をしんみり味へてくらさう」となる。所謂生命の詩とも謂ふべきものがあつて、こゝの元方のに比べると確かに俊成のに深みがある。けれども此から脱化したと思はれる新勅撰十六雜一の一〇五四入道前太政大臣（藤原公經）の

落花をよみ侍りける
花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆく物はわが身なりけり

といふに比べてはこの方感味が多い。（公經の歌は詞書とも一致しないし、始めに「花」とあるから花の歌かと見ると「さそふ」で

は何かが誘ふなと思ふとそれは豫想通り「あらし」では嵐の歌かと見る「嵐の庭」ハハア庭が主題かと見ると又「の」といふ、をかしいぞと下を見ると「雪」では「嵐の庭の雪」即ち「落花」か、それで詞書が「落花」とあるのだなと、こゝでは大分尤もらしく感ぜさせるが下は「ならで」とあつてそれではないといふこのやうに持つて廻つて掲句の果ては我身のふりゆくことを歎いた下の句で落ちつく、と様に主想の曖昧な歌である）にも拘らず後世では寧ろ此方が人口に膾炙して居るのは　それが小倉百人一首にとられた故であらう。

尙これ以下三首は歳暮感懷の歌であるが、歳暮といふと烏兎匆々とか、徒らにこの一年を過したとか、空虛の一年もあと幾日とか大抵お極りの想が多い。近頃の學生の作文も矢張さういつたものが多い。さう何も謙遜しないで自己の實際の生活感を表すがよからう。血と涙で贏ち得た高校入試のパスをすら顧みて、空虛とは何のことかどうも解釋に苦しむ

寛政御時きさいの宮の歌合の歌

三四〇　雪降て年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松もみえけれ　よみびとしらず

考　詞書　元「寛平御時、中宮の歌合に○」
二句　元・筋・相・新萬上「年の暮れゆく」
四句　新萬上・風「つひに緑の」
結句　元・筋「松は見えけれ」
宗于集「中宮の歌合に」の一首目六帖一年の暮・寛平歌合冬左三　同。

通　つひにもみぢぬ　もみぢなゞ行四段動詞としてその第二活連用形から打消の「ぬ」につゞけたもの、とう〳〵紅葉せないといふ意で、この一首中最も力量に富む名句である。それは緊密に上句に接合して居ると共に松の特想を表して居る。霰・霜・時雨と色々の試練を經て雪が降るに至つて「つひに」ともつゞき春・夏・秋・冬と經過して「歳の暮れぬる時にこそつひに……」ともつゞく。

通　雪が降つて歳の暮になつてこそ(あの)松(といふもの)は(いつになつても何が降つても)おしまひまで紅葉にも黄葉にも變らない(四季翠緑の操を保つ)木であることがわかるなあ。

評　論語子罕篇に「歳寒然後知松柏之後凋」とあり、莊子に此を引いて「孔子曰。天寒既至霜雪既降是以知松柏之茂也」又白氏文集にはそれから脱化したと思はれる「歳暮滿山雪。松色欝青々」ともある。今此等の句を和歌譯したるもの。抄にも「貞松彫歳寒忠臣見國危」といふ心なり」とある。霜を凌ぎ風に競ふ松の貞烈を相當に歌ひこなして讀下剛健の意志を想はせるものがあるが、思惟着想の形式が支那の模倣で傳統的なのが飽かぬ心地がする。

としのはてによめる

三四一　昨日といひけふとくらしてあすか川ながれて早き月日なりけり　はるみちのつらき

考　作者　元「○○列樹」
二句　六帖一年の暮「今日と云ひつゝ」
新撰　同

通　あすか川　二八四に一寸説いた。大和國高市郡に在つて源は二つ。一つは高市村大字畑より發し、稻淵を經て稻淵川といひ、一つは十市郡多武峯から出て細川を過つて細川又は細谷川と稱し、この二つが高市村大字岡でおち合つて飛鳥川と云ひ、北に流れて大河(大和河)に合ふ。附近舊蹟に富み、この川も亦萬葉時代から盛に歌に咏まれて居る。ながれて　「過して」とか「暮らして」とか謂ふ處をば飛鳥川の緣語で「流れて」といふ。

譯 昨日と暮らし、今日と過ごしとうとう年のくれになつてしまつた）あすも多分は同様であらう、その「あす」の同音の飛鳥川の流れるやうに疾く流れ去るものは（實に）この月日であるわい。

評 一首の喫子は飛鳥川を取材した點にある。「飛鳥川」この一語が實に千鈞である。上に對しては「飛鳥」がきゝ下に對しては川がきく。「昨日とすぎ今日とくらして」といつて次に据ゑるものはどうしても明日の秀句の「飛鳥川」でなくてはならない。「鈴鹿川・名取川・大井河・桂河」など五音の河はいくらもあるが、「あす」を頭音に含む河は唯一この飛鳥川あるのみである。又下の「ながれて早き」といふに續ける爲めにはどうしても「川」でなくてはならない「飛鳥山」「飛鳥村」「飛鳥里」「飛鳥丘」など五音の飛鳥を冠するものが幾らあらうとも「川」以外「流れて」につゞくべき語は無い。でこの飛鳥川を喫子にしてうまく上下の語をつないだのがこの歌の優越點の一つである。

次にはこの一首三句までを一息に讀み下すとその音のリヅムその物何となく倉皇として來り、又倉皇として去る光陰の足取りを音貌し得て居る。つまり鳥兎匆々の音調化が巧く出來て居る　此が優越點の一つ。

最後にこの歌の着想は不易の情味から來て居る。昔から今まで、内外人の等しく歎くものは矢張この感である。

終業式の歌詞にも

昨日とくらし今日と過ぎ。今年もいつか冬休み。實にもいひけり歳月は。人待たずてふ言の葉は。

ともある。古來内外幾多の詩人文人が千言萬語を費して歎いた鳥兎匆々の咨嗟を手短かに印象深く歌ひ得て居る。これが優越點の一つ。

後に源實朝が

春と過ぎ夏と暮らして秋風の吹上の濱に冬は來にけり

と咏んだのも面白いが、「是非この一首に四季を咏み込みたい」といふ意圖が見え透いて、こゝの列樹の自らなる流麗さには數籌を輸するものがある。

歌奉れと仰せられし時によみてたてまつれる　紀つらゆき

三四二 行く年のをしくもあるかなます鏡見るかげさへに暮ぬとおもへば

考 詞書・作者　元「歌奉れとおほせられけるに○○○○○○○　○貫之」

新撰・六帖一年の暮　同。

語 ます鏡　眞澄鏡（たすみかがみ）すみきつた鏡、見る影さへ　鏡に寫して見る自分の顏容（かたち）までも（年の暮れと共に）

意 あゝくれ行く年の惜しいかな（それは單に年が暮れるばかりか　眞澄の鏡に映して見る我影までも一緒に暮れ衰へてしまふことと思ふから（それで返々も惜しまれてならぬよ）

評 漢詩に

故郷今夜思二千里一　霜鬢明朝又一年　高適

高歌一曲掩二明鏡一　昨日少年今白頭　許渾

などあると同巧なるもの、より老いて行く人のより若い自己に對する思慕と執着が骨子である。但「影が暮れる」といふこと緣語は聞えるが、影の移るといふ語が妥當を缺くし、行く年が歩を止めたら老の影も茫きに止まると樣な無理な着想となつて居る。

第七賀歌序説

早く懐風藻に算賀の詩が二首ある。

五言。賀二五八年一（正五位上刀利宣令二首年五十九とある二首目）

縱賞青春日　相期白髮年　清生百萬聖　岳土半千賢
下レ宴當時宅　披レ雲廣樂天　玆時盡清素　何用子雲玄

五言。賀二五八年一宴（從五位上上總守伊支連古麻呂一首）

萬秋長二貴戚一　五八表二遐年一　眞率無二前後一　鳴求一愚賢一
令節調二黃地一　寒風繼二碧天一　已應二餘斯澤一　何須顧二太玄一

此に依ると（五八の年は四十歳のことで五十八歳のことではない）算賀の催しは已に上代からあつたことがわかるが之を算賀と謂つて初老の四十から五十六十と十年毎に祝ふことは奈良朝末期（聖武天皇頃）から始まり、その行事次第の秩序立つたことは、天長二年十一月の淳和上皇の御四十の賀や嘉祥二年三月の仁明天皇の御四十賀の頃からの事だといふ。爾來此風上下に及び、本人の近親相集つて衣服調度何くれと寄贈して祝宴を催す。その品には荒風を防ぐ寄せとして屏風、食物にむせない爲めにとて鳩の杖などが定であつた。そしてその席上若くは算賀に趣向をとつて咏んだものが、こゝの賀である。（算賀の事は眞丈雜記一ノ下などで見るが便利である）此風後世には厄年の祓除と長壽の年賀とを併せて女の三十三男の四十二、六十一の還暦、七十二の古稀、七十七の喜字、八十八の米字などの名で祝つて居る。

賀歌は右いふ通り專ら算賀の歌をさしたやうだが、併し「賀歌」といふからには他一般の祝賀の歌も入れた方がよく

はなからうか、已に序文に「むつにはいはひうた」として「このとのはうべもとみけり云々」と例歌まであげたのだから「いはひ」を神をいはふと限定しないで。廣く凡ての祝賀に擴張して序と部立との統一をはかつた方がよくはないか否現に此部の歌の最後の三六四などは算賀ではなくて皇子御降誕を祝し奉つたものである。（それと今一つ三五七から三六三までは算賀の屏風繪の歌だから多くは單なる叙景的な贊歌で賀意からは遊離して居る）そこで次々勅撰集の賀の歌を見て行くと、その題材は次第に擴張せられて

後撰には

元服（一三七二）　裳着（一三七四）　年星おこなふ（一三七七）　献上品にそへて（一三七九）　竹をうゑそめて（一三八三）　碁筍に（一三八四）　單なる消息に（一三一・六・一三八六）

拾遺には

齋宮の御下り（二六三）　神の御榮え（二六四）　大嘗會（二六五）　御産養（二六六・二六七・二六八・二六九・二七〇）　花宴（二八六・二八七・二九四）　子の日（二八九・二九〇）　屏風（二九一・三〇〇）　松蟲に寄せて（二九五）　前栽合（二九六）　御文奉るとて（二九七）　鏡を鑄させて（二九八）　單なる祝福（二九九）

後拾遺には

産衣（四三八）　御五十日（四四〇）　御猶子となさせ給ひて（四四一）　鏡を賜りて（四四二）　裳着（四四七）　子孫繁昌（四四八）　御代の謳歌（四四九・四五〇）　卅講の後に（四五一）　松（四五二・四五三）　殿造り（四五四）　邸宅に寄せて（四五五・四五六）　臨時の祭（丹波の國の）の使（四五七）　后立ち（四六〇）

などをも取容れてある。

題しらず　よみびとしらず

三四三　我君は千世にやちよにさゞれ石のいはほと成りて苔のむすまで

考　部立　元「賀歌」の代りに「祈」とある。
詞書　元　なし。
初句　朋・國歌「君が代は」
二句　元・筋・顯・六帖四視・密勘・道濟十體　神妙體・奥儀抄　ちよにましませ」
三句　元本「さゞ〇れしの」
五句　清「こけのむすまて」
新撰　同。

評　我君は　「我」は代名詞の親稱所有格「我が國」「我が校」「我が豐太閤」など「我が」で丁度英の "our" に當る。我が親愛なる御身は、こゝの君は對稱の人代名詞である。それを「我が大君」と樣に「天皇陛下」の意に用ひることは後撰集以後の風である。朋咏に「君が代は」と變へたのは撰者(多分は公任だといはれて居る)が「天皇陛下」と誤解して書き變へたものであらうといふ。歌集に「わが君は」とか「君が代は」とかを初句においた歌が五十首内外あるが、その中には對稱もあり「天皇陛下」をお指し申したのもあり一々その歌境について考察する必要がある。千世にやちよに　「千代にや、千代に」と千代の反覆句にしない。千代に、いや千代にといふ義、後世「や」に數詞をあてて「千代に、八千代に」とする「やちよ」は元は八千代の意ではなく彌幾千代にの意である。さゞれ石　小石をいふ。「さゝ」は矮小の意。「さゝやく・さゞらぐ・さゝやか」などの「さゝ」と同語「れ」は音調を滑らかにする接尾語、さゞれ石には礫石と宛てたのもある。鑛物學では直徑幾粍以下の小石を礫といひ、それ以下これ〳〵の大きさを土壤といふと定まつて居る。いはほ　石の大きなもの卽ち石秀むす　「蒸す」と宛てたのは宜くない「生す」で高產靈・神產靈などの產と同語系で、生えること。

講　我が親愛なる君は千代にいや幾千代にさゞれ石が集まつて巖となり、その巖の上に苔のむすまでも(榮えませかし)

評　考にある通り二句は「千世にましませ」とあるものが多數だから原形は多分はさうでもあつたらう。さすれば形式は明瞭である。けれどもこゝに「ましませ」と限らなくても最後に「榮えませ」の餘情を言外に包はせた方が、すつと古淡でもあり詩趣もある。「千代にましませ」としては何となく、挨拶上手な人の整つて一から十まで述べ立てるのを聽くやうで味が無く、却て口籠りながら嬉しさを身振素振で補つた挨拶の方がゆかしいのと同樣である。さてこの「千世に八千世に」は如何にも口調が宜しいが、凡て抽象的な數詞であるから歌としては印象が弱いので、次には何か具體的な永久物を引合せにする必要がある。そこでさゞれ石集まつて巖となるまでといふ。小石が大石になることは、地質學上確かに有り得るといふが、さうした科學の知識のない當時にあつては恐らくそれは不可能な事と想定して謂つたものであらう。而かもこれをも以て猶言ひ足らずとし、更にそのさゞれ石にさびを生じて石の面一體に青苔を敷くまでもといふ。諸君もし邸宅を新築するか中庭でも裏庭でも新たに泉石を敷くかの經驗を有つてゐられるならば、よく解らうと思ふが、吾々が何でもなく考へるあの地衣類植物(苔)は一寸やそつとで生すものではないのである。で、具體的の永久物を漸層法的に二段に疊んで、いかにも幾久しい榮えを庶幾することを巧みに表してある。單に數的に大きなことをいふなら成住壞空の劫初から劫末までとでもいへば遙に大數になるが、さうした概念的な表現ではまざ〳〵と永久感を生ぜしめる力がない。若も

我が君は千代に八千代に幾久にいや幾久に榮えませこそ

などいつてはどうか、作者のいはんと欲する所は遺憾なく云ひ得てゐるかも知れないが、一篇凡て觀念の塊であり概念

の組成であつて面白くないものにならう。で、余は思ふこの歌上の句に於ては調を以て優り、下の句に於ては具體的永遠物よりなるクライマックスの構想を以て優り、古淡にして餘情あり、辭令適宜にして阿諛輕薄の失なく賀歌として上乘なるものであると。

本集假名序に「さゞれ石のいはほとなるよろこび」といひ、眞名序に「砂長爲巖之頌」とあるも此を引いたものなり、拾遺五・二七七

清愼公五十賀し侍りける時の屏風に　　元輔

君が代を何に譬へむさゞれ石の巖となるまで苔のむすまで

同十八雜下一一六三に

東宮のいしなどりの石めしければ三十一を包みて一つにひと文字をかきてまゐらせける　　よみ人しらず

苦むさゞれ拾ひもかへむさゞれ石の數なみなとる齡幾世ぞ

を始め、後世幾多の踏襲を見る。

さて後世では朗咏の「君が代は」の形が弘布し、明治に入つて各條約國に國歌のあるところから我も新たに國風の國歌を制定するの必要を認めこの歌を歌詞と定め、傭外國人フエントン氏(軍樂教師)の曲附けに基づいて林廣守氏調曲し之を全國に下附して三大節始め國家の祝事の都度一般國民をして唱和せしめることとせられ一個無名の作家の詩は斯して、永久國家統一に寄與することとなつた。是實に無上の光榮と謂ふべきである。處で國歌としての君が代はその詩形短小にしてその音亦悲哀の調を帶び、堂々たる大國民の意氣と誇りを高唱するには不都合だといふ。成程英のゴットサヴザキングや米のヘイルコロムビヤ、獨のラインの守り、佛のマルセイユの曲と一々比較して見るとかうした批評も強ち無理ではない。又この歌の韻配合をみると

イイアオア　イオイアイオイ　アアエイイオ　イアオオアイエ　オエオウウアエ

のやうに

ア列音八　イ列音十　ウ列音二　エ列音四　オ列音八

となつて閉口音イ列の音が最多を占めて居るから、高調な調とは謂ひ難いかも知れぬ。けれども由來かうしたものは單純な理窟で片附くものではない。我國歌には二千數百年來の傳統精神が背景になつてをる。已に日清・北清・日露・日獨と各交戰勝利の都度我が國歌は我國家をあげて津々浦々に至るまで、聲高く合唱せられその都度これを權威づけて來たのであるから、今日吾々がこの歌を奉唱すればそこには過去數千年間の精神と、明治以降の國家の慶事に際しての國民意識とが復活して、朗々の間一種超理論的な皇室中心的讃美歌の情味を覺える。だから斯種のものを單なる歌論を以て律することは出來ないと思ふ。又近頃此を英譯して「メイ・アワー、グレシアウス・エムペロールレン」など歌ふのを聽くが英語を解する外人に國歌を紹介するならばいざ知らず、我國民として歌ふならば矢張我國文の語で唱ふべきであると思ふ。

(尙櫻井忠溫氏の「肉彈」一八陣頭の「君が代」には攻城野戰のさ中に起るこの吹奏に全軍勇を鼓して突擊した光況が如實に寫されてあるし、今年は五十年記念の催しもあり、最近「國歌君が代講話」といふ單行本も出た。)

三四四　わたつ海の濱の眞砂をかぞへつゝ君が千とせのありかずにせん

考　初句　元(古典本)「わたつみの」
　四句　元「君がへむ世の」
　清・顯「君が命の」
賀　三四三・三四四

新撰「君がちとせの」

考 わたつ海の　大海原の、「わたつみの」の方音調も字餘りでなく、語義にも適つて居る。もと諸册二尊の御手に海を領じます綿津見命といふのがあるのが起りである。眞砂「まいさご」の約とも「ますなご」の約ともいふ。美しい小砂といふ程の意　君が千とせの云々　「千とせ」は數詞ではなく永久の轉義と見る君が永久榮えますその數とも見ませうといふのである。眞砂一粒につき君が壽命を千年と樣に計へようと解いたもの（契沖）もあるが、少し繁鎖だと思ふ。「ありかず」の「あり」は音調上添へたもので重い意味はない。

講 大海原の濱の美しい小砂をかぞへつゝ御身に幾久しく榮えさせられる長さを示す數とも見ませう。

評 賀の要件は美しくめでたく祝ふといふにあるのだから、美的に福壽を讃へたこの歌の如きは當時恐らくもてはやされたものであらう。萬葉四相聞五九六に

八百日行く濱のまなごもあが戀に豈にまさらめや沖つ島守

と戀のしげきを濱のまさごに譬へたものが此種の詞形の早いもので、貫之集にも

たが年の數とかはよむゆきかひて千鳥鳴なる濱の眞砂を

とあるのも一寸似てをる。（俗說に石川五右衞門が處刑前の辭世といふのに

石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盜賊の種は絕えせじ

などいふは假構であらう。若し此場合ならば

石川や瀨見のをがはは絕ゆるとも世に盜賊の種は絕えせじ

とあるべきだ）

又一說に佛典の「無數恒河沙」はこの頃よくいはれた句だから、それから思ひついたともいふ。恒河は印度ガンヂス河でその砂は微塵數なので、古來印度人は無限大の數を喩へて恒河沙といつた。無數恒河沙といふ句は何が本か知らぬが、國文では古今著聞集釋敎の部に出て居る。華嚴經には「現在十方佛、其數如恒沙」とある。佛法殊に堂塔の建立結緣の供養の盛な玉朝のこととて或はこんなものから暗示を得たかも知れぬが、猶和歌史の上では萬葉の「八百日行く」から出たと觀る方が宜くはなからうか。

三四五　しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞなく

考 三句　伊勢集「居る千鳥」
顯・打聽「なく千鳥」
四句　正義「君か千代かな」
伊勢集「君がよはひば」
清「きみかみちよを」顯・密勘「君かみちよを」
嘉本（顯註）「君カミヨチヨ」
六帖四親・新撰　同。

講 しほの山　所在につき諸說がある。

一、甲斐　能因歌枕　二、越中　契沖

三、能登・越中の境　眞淵　四、普通名詞　金子氏

一についていふと、今甲府から東北三里許の釜無川沿岸の小邱に「さしで」といふ所があつてそれから北方約二里の處に鹽山といふのがある。（こゝは溫泉地で故岩野泡鳴氏の作品にもこゝへ轉地療養に來て創作をする處がある。附近から來た學生に聞くと、湯その

ものは非常に優れて居るが、設備が不充分な爲めに餘り發展してないとのことであつたがそれも今から數年前のことだから、今日では相當客足を引いて居るかも知れぬ）土地の傳說によるとこの國一大湖沼を爲して居たのを行基菩薩の發願によつて鰍澤から駿河の清水港の附近に開鑿し所謂富士河を通じてから水ばけがよくなつたので、汐の山さしでの磯は往昔湖沼當時の名殘をとゞめた地名であるといふ。いはれをきけば御尤もと謂ひたいが、それはこの歌が傳誦せられ、汐の山の候補地が問題になつたので、飛んだ閑人のおせつかいから出た附會說かも知れない。

次に越中にあるといふのは平家物語第七「燧合戰の事」に「義仲が軍の吉例なればとて、五萬餘騎を七手に分つ。まづ「叔父の十郎藏人行家、一萬餘騎で志保の山へぞ向ひける」同「倶利伽羅おとしの事」に「木曾殿は志保の山うち越えて能登の小田中新王の塚の前にぞ陣を取る」ともある。でこれから推すと成程能登・越中の境といふことになる。

三は延喜式と萬葉の歌を典據としたもので、

延喜式卷十　神祇十

能登國四十三座　大一座（小四十二座）
羽咋郡十四座　大一座（小十三座）
相見神社　志乎神社

とあり

萬葉十七の四〇二五に

赴二參氣比神宮一行二海邊一之時作歌一首

之乎路からたどこえくれば波久比能海朝なぎしたり船かぢもがも

とあり、尙四首を並べた奥に

右、件謌詞者、依二春苗擧一、巡二行諸郡一當時所二屬目一　作レ之　大伴宿彌家持

とあつて家持の作と推定せられる。

そして金子氏は二三を從ふべきものの如しと肯定的に評して尙思ふに「さし出の磯はさし出た磯崎の義だから、何處でもいはれる語である」と謂はれた。

按ずるに「志保の山」は上代に聞えた地名とも思はれないし、之乎神社は假名遣ひなり、普通名詞としてどこでも海岸で汐風の齎らした砂山は汐の山で、さし出て居る岬は「さしでの磯」であるとしてはさほどの視歌にして唯どこにもあり。普通名詞を咏むといふことも肯はれない。で、所在は不明だが何處かの固有名詞であると推定する。（八七一に小鹽山があるからこれも大原の小鹽山で千鳥は賀茂川の川千鳥かとも懇ひ、しほの山しがの山字形の相似で轉じて元は志賀の山で琵琶湖かとも想ひ近幾地方で古書に見えた鹽の山、さしでの磯の地名をもあさつて見たが、臆測程度の案より浮ばない）すむ　そこを生活の根據にして居ること殆ど今の民法できめた住居の意と同じである。これを一本「なく」としたものがあつたといふがそれは早期の一本の形で、敎長卿註の出來た時分は最早「すむ」が一般流布本の形であつたらしい。右敎長卿註には下の句の「なく」と同字重なつて歌の病となるのを避けたものだとの辨がある。或はさうかも知れないが歌調をば態々脚韻に仕立てることは寧ろ近代的歌謠の好んだ體でこゝを「なく」としてはあまりに今めいて古めかしさが失せると思ふ　千鳥　又乳鳥とも智鳥とも一字で行篇に鳥を書いたり、行の字の中間に鳥を挿んだ字を書いたりする。江海の邊に棲んで澤山群が爲してゐるから千鳥といふともその啼く聲が「チツチ〳〵」と響くから千鳥といふとも語源は不明、輪廓は鷗に似大きさは鶴鴿より稍大、頭は蒼黑く、頰は白く、眼の後に黑い條がある。その他

背、嘴、背黑、翅黑、腹白、尾短く、胸黑く、脛黃色にして細長く、

姿態可憐にして古來歌に文に詩に畵に多く取材せられ村千鳥・浦千鳥・磯千鳥・川千鳥・夕波千鳥・島千鳥・濱千鳥・小夜千鳥、などは文學的な呼び名だが、博物學的に見ても約四十種許の種類があるといふ。君が御代なば　君は矢張「御身が」といふ對稱、御身の榮えさせらるべき御代をば、こゝを「千代をば」とか「三千代を」とかしたものは結句の「やちよ」の「や」を數詞の「八」と心得たもので、「君が千代をば八千代とぞなく」これは八倍「君が三千代を八千代とぞなく」これは三分の八倍となるが、さうこまかく對照しては繁鎖にな

るから原文の儘を採る。やちよとそなく　幾久しくと音にないてアレあの樣にチョ〳〵と謂つてゐますといふ程の意。千鳥の聲はチツチツとかチョ〳〵とかいふ、どうして「やちよ」と「や」をつけると非難したものや「いやさうではないチョ〳〵と幾度も啼くから彌チョといつたものだ」とかいふのはくだ〳〵しい。

語 鹽の山やさしでの磯に棲んでゐまする千鳥までもあなたの御榮えは（千代に）や千代（の末までもと樣に、アレ）チョチョと啼いて居りまする。（さて〳〵おめでたいきざしでございます

評 一首の繫りは單に千鳥の「ちよ」の啼聲を相手の千代の榮えにもじつて秀句にしたといふ一點にある。それしきの事なら狂歌に「鶯がホウ法華經を讀む」といひ、心學道話が「雀はチウ〳〵鳥はカウ〳〵鳥でさへも忠孝の道は心得て居る」といつた程の洒落で、格別多とするに足りないとも謂ひ得よう。けれども賀の歌といふものは大抵何か祝の品物につけて謳つたり、祝宴の催しの卽興をつけたりするものだから、これもこの歌に相應する屏風繪でも祝つてあつて、それに贊したものとすれば典雅優麗よく畫趣にもそひ、一語の不吉文字も入らず、當の本人は勿論舉族喜悅の眉を開く祝歌である。況んや箏の名曲（千鳥の曲）によつて民衆化した今日では多くの子女の愛らしい、朱唇によつて幾千回幾萬回唱はれることであらう。

三四六　わが齡君がやちよにとりそへてとどめおきてば思出にせよ

考 二句　元「君がやそぢに」
清「きみがやちよに」
四句　元・筋切傍書・顯・崇德院御本（顯昭云）「とどめおきては」
五句　頓「思ひいでにせよ」
三「思ひいてにせよ」イ本　古典本「思ひ出に爲ん」

語 わが齡　生命あるものの經過した年所、生き者のとつた年、諸註自分は長命をして多くの齡を重れたその多くの齡をば……と樣に說く。愚考我が今後生きのびる分と解きたい。（尙評のところ參照）君が八千世に　君が幾久しく榮えさせられるその上に、こゝを「やそぢ」としたものの方が寧ろ古い形で、その方が宜いと思ふ。こゝはつまりさる親しき先輩の八十の賀を祝つたものであらう、八十即ち「やそぢ」である。古註にやそぢは八萬である「八十千」で十千の八倍だからとは肯はれない。とりそへて　御身の八十の御長命の上に拙者の今後とる年を加へて　とどめおきては　とどめておかう、さすれば、この句四六にもあつた。思出にせよ　後で私を思ひ出して下さる忍び草ともして賜はれ。契沖はこの歌を臣下の算賀に大君より御祝を戴き、君恩の儚渥に感激して我と自ら我に命令して「思出にせよ、是非さうしよう」と自己決意の固いことを示したと解いたが、此も首肯し難い。

講 （鄙言による）

拙者が此ながいきしてゐまするよはひをあなたさまへさしあげませふによつて、これから末ながういくちよもござるあなたのよわいの上に、又拙者がこれまでの長い命をおとりそへなされて、あなた方におとゞめ置なされて後々までも拙者が事を思し召出されて下さりませ。

評 右鄙言の解が通說と看做されるが、思ひ出といふ者は對未來のものであり、已に自分が生きてしまつた分を人に讓るといふことも聞えない。この歌意によつて按ずるに、作者はまだ初老にも達しない靑壯年の人か少くとも八十には大分距離のある年齡の人で、私の將來生きる分をあなたにお讓りしますから、私の死後長命をなされてせめては「あいつが生前にこんなことをいつたけが」とでも思出して下さい。といつたものだと思ふ。相手を歡ばす爲めに自分の壽命を縮めるといふことたとひ詞だけにしても「死」の不吉が餘韻となつてどうかとも思はれるが、後年重盛が死を熊野の神に祈つたやうな、深く思ひ入つたものでなく、極めて輕く「わたしのやうなやくざ者は死んだ方が結句埒があいて宜いのですから……」といつた調子ととれば大した難もない。詞花集九雜上三三〇に

冷泉院へたかんな奉らせ給ふとてよませ給ひける　花山院御製

世中にふるかひもなき竹の子はわがへむとしを奉るなり

同三三一、御かへし　冷泉院御製

年へぬる竹の齢をかへしてもこのよを長くなさむとぞ思ふ

とあつて、我齢を人に譲るといふことさのみ突飛な着想ではない。

仁和の御時。僧正遍昭（清慎）に七十賀給ける時の御歌

三四七　かくしつゝとにも角にもながらへて君がやちよに逢よしもがな

考　詞書・作者　元「遍照僧正に七十賀せさせたまふとて　仁和帝（この三字筋切も）」

古典本「……の七十の賀……光孝天皇」

四句　元「君が八十ちに」

清「きみかやちよに」

釋　仁和の御時　光孝天皇の御代、仁和は一五四五年二月二十一日から一五四九年四月廿六日まで（廿七日寛平と改元）迄五年餘つゞいた年號。僧正遍昭　序文の註參照。光孝天皇は、この僧正を尊敬し佛教について師事せられたものと見える。七十の賀給ひける時天皇や上皇から臣下の賀宴を賜ふことは名譽の極とも謂ふべく　にこの榮を荷うた藤原俊成なども非常に感激した記事がある。三代實錄第四十八に「仁和元年十二月十八日戊辰延三僧正法印大和尚位遍昭一於二仁壽殿一申二曲宴一。遍昭今年始滿二七十一。天皇屢賀徹夜談笑。太政大臣左右大臣預二席焉一」と此時の記事である。　これで見ると後世とは違つて十二月滿齡を待つて催されたものだといふこともわかる。御歌　光孝天皇の御製といふこと。こゝに「仁和帝」とか「光孝天皇」とかゝれた本は宜くないと思ふ。本集中他の天皇、皇妃の御歌の詞書皆本文のやうになつて居る。かくしつゝ　此やうにしもつて、此やうとは唯その賀宴を張られたことだけでなく、斯くして君臣水魚の過をつゞけ親しく佛教の導きにあひ、事ある時には吉凶共に相よろこび、祖憂ひしつゝの意　とにも角にも云々　どうにかかうにか朕が命ながらへて　君がやちよに云々　御身がいつ〳〵までも矍鑠たるめでたさを見る術もないものかなあ（是非に見たいものだ）

釋　仁和の御代僧正遍昭に七十の賀を賜はつた時のみかどの御製。

このやうに　御身とは君臣であり師弟であり旁〻親密な交りをつゞけつゝ、どうにかして朕が壽命もながらへて、御身の幾久しき榮えに逢ひたい、何とかさういふてだてがあつてほしいものだ。

評　相手の遍昭の長命はいはずと知れた當り前といふ御口吻はやがて彼に賜はつた壽ぎの御詞である。けれども一首の主想御自身の健康長壽を希望あらせられるのは、何となくエゴイスチツクに響くなどとるのは早計である。此とても相手との交渉にかけて望ませられたもので、さうまで深く御思ひ下さる聖旨に對して人一倍に多涙多感であつた遍昭なるもの必ずや感佩泣拜の禮意を捧げたことであらう。「何となく氣息喘々の弱音にも聽きとれイ列エ列の音の多いのもやがてこの帝の崩御を示したものだ」などとるのは餘りに失禮ではなからうか。如何にも天皇はこの賀筵の後二年程して仁和三年八月二十六日御五十八歳を以て崩御あらせられては居るが、それがこの頃から已に御致死のいたづきの御身であつたとは拜察されない。まして三代實錄には徹夜談笑し給ふとあるではないか。

四句「君が八十に」とあるのはあまり限定的で面白くない。けれども前同樣こゝが七十の祝賀だから御身が八十にも是非あひたい。すれば今日より數層倍賑々しく賀宴を張らう、是非それまでは達者でゐてくれよ。朕も亦同樣その爲め精々健康に注意しようからとの御思召であつたかも知れぬ。にも拘らず「八千代に」の方が一般に流布したのは、この句音調の美もあり、原數詞としても可なりの大數でもあり、原義は非限定的な大數を意味してゐるからでもあらう。そこで今日でも「八千代」を名のるものは軍艦・煙草・生命保險・銘酒と色々あり閨秀作家の名にもあり、といつた始末で

「永久」を意味する語句の多くは「八千代」に吸收されてしまつたものではなからうか。

仁和のみかどみこにおはしましける時に御をばのやそぢの賀に、しろがねをつゑにつくれりけるをみて、かの御をばにかはりてよめる　僧正遍昭

三四八　ちはやふる神のきりけんつくからにちとせのさかもこえぬべらなり

考　詞書・作者　遍昭集「同じ帝の御をばの八十賀に白銀を杖に作りて奉り給ひし時このをばに代りて」

元「仁和帝の、親王におばしましける時〇〇おばの八十の御賀に、しろがれの御杖せさせたまひけるに　〇〇〇おばにかはりて〇〇〇　僧正遍照」

三「下のよめるの三字なし」

古典本「……御祖母の……御祖母に　りて」

二句　清・元・六帖四杖・遍昭集「神やきりけむ」

釋　仁和のみかど　仁和年間のみかど卽ち光孝天皇　みこに云々　此天皇がまだ時康親王と申し奉つてゐた時、　御をば　天皇の御母君藤原澤子、澤子の御妹「乙春」をいふ。乙春は藤原長良に嫁して基經を産んだ。基經と光孝天皇とは御從兄弟の間柄で殊に御親密であつたことが大鏡に出て居る。御祖母とあるものをとれば澤子の御姑昭正一位藤原數子（卽ち總繼の母であり魚名の室である）が、「をば」と「おば」とは假名も違ふし、時代も大分違ふ。つゑ　算賀の祝の品には荒い風を防ぐといふ寄せて屏風を祝つたり、老人の歩行を扶けるといふ意で杖を贈つたりする　尤杖を朝廷から臣下に賜はる風は早く漢土にもある。（禮記・後漢書禮義志）が、これは強ち支那傳來の風俗ではなからう。千早ぶる　神の枕詞。神のきりけむ　神がつくつたのであらう。杖を作るには竹や木を切るところからやがて「きる」といふ。丁度鞦を編むのに藁を打つので鞦を打つといつた風の詞である。「神やきりけむ」とア列音にした方音調快活で祝歌にふさはしいと金子氏の評だが、その通りでもあり、古い流布の形は矢張「や」であつたと想はれる。（加之「や」とある方寧ろ遍昭の口吻であらう）つくからに　杖をつくとはやがて「からに」は原因の助辭だから「つくが故に」ともなり又「つく時は」などと變へても宜いが、杖そのものの功驗の顯著さを示すには矢張「からに」としたが宜い。（後の「見るから愛らしい」とか「咲くからに見るからに花の散るからに」などの用例に鑑みてもわかる）千年の坂も　年をとることを、越す」とも「越ゆ」ともいふから此を坂道に譬へて千年の坂といふ。古註に「數」の意か？　と謂つて拾遺の

もゝさかにやそさかそへて賜ひてし乳房の酬い今日ぞ我がする

を引いたものがあるが、この「さか」は「さく」（石）の轉で、佛典、心地觀經に子は母の乳を百八十斛吸うて人と成るとあるので、反哺の孝志を咏まれたもので別である。こんな引合に出すのも潛越だが、余がまだ拾八九歳の頃某小學校訓導として村落の人々と交りつつ職を奉じてゐた頃、村の或舊家の母堂六十の賀に招かれた。さて祝歌をと乞はれて、同席にはその頃京都の第一高女國文專攻科に行つて、あの有名な猪熊夏樹翁の指導を受けて居られた孫嬢の秀咏もあるのに、厚かましくも腰折つて

わけのぼる六十の坂もやす〳〵と高嶺の松に千代よばふなり

とよんだことがある。（今から思ふと笑苦笑物である　又大正十六年一月元旦の賀狀を豫て刷つておきながら、大正天皇崩御につき御遠慮申して反故にしてしまつたが、その時添へた述懷は

はたとせをひたに辿れど頂はまだ〳〵遠し國つ文坂

といふので、拙いながらも　この修辭を嘲うたものだ。

偖てこゝで「も」とあるのは、越すに難げなる千年の坂すらもと云ふので一段と銀杖を持上げたいひ方である。越えぬべらなり　越えられさうでありまするわい。

釋　光孝天皇が、まだ時康の親王と申してゐた頃御をば君八十の算賀に、銀を杖に作つたのを見て、かのをば君に代つてよんだ。（この杖はたゞの品とは違ひ）千早ふる神の御手に作られたものでありませう。これさへつけばおかげは覿面（百や二百は何のその越すに苦しい）千年の坂でさへも（やす〳〵）と越えられさうであります。（くれ〴〵も御身の御好意を感

謝いたします）

【評】贈られた品物に割増の折紙をつけることは即ち古今一體の社交上の禮で、當時何事もめでたいことを神のわざ佛のわざとほめる風があるところから、初二句の思ひつきも面白い。加之、當時一般に謠はれた神樂歌・採物・杖にも

末

この杖は、いづこの杖ぞ、天にます、豐なか姫の、かみのつゑなり、かみのつゑなり。

末

あふさかを、けさこえくれば、やまびとの、ちとせつけとて、くれし杖なり、くれし杖なり。

と、杖を神仙の故に歸して讃美したものがあるから、それ等に立意したものと思はれる。凡そこの種の代作は先方にも此方にも悅ばれる作意でなくてはならぬが、この歌はその點から見ても申分がない。輕妙であり快暢でもありそして社交的に見て如才のない好詠である。

ほりかはのおほいまうちぎみの四十賀九條の家にてしける時よめる（うた）　在原業平朝臣

三四九　櫻花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まがふがに

【考】詞書・作者　勢語九六「昔堀河太政大臣と申すいまそかりけり四十の賀九條の家にてせられける日中將なりける翁」

清「在原ゆきひら朝臣」

元「栽河のおほいまふち君の四十の賀九條の家にてしける日〇〇〇在原行平」

二句　元・相「ちりかひまがへ」

四五句　元「なる道の三字なし……まどふがに」

五句　相「みちまがふまで」

【考】ほりかはのおほいまうちぎみ　堀河太政大臣藤原基經をいふ。基經の邸堀河にあつたから世間でさういつたもの、大鏡に基經の處に「御家は堀川院と閑院とにすませ給ひしを、堀河院なば、さるべき事のなり、はれ〳〵しきれうにせさせ給ひ……堀河院は地形のいといみじきなり　…」とあつて拾芥抄に「堀川院二條南、堀川東、南北二町昭宣公家」とある。九條の家　基經の家は九條にはない。前の閑院といふのも三條の南西洞院の西にある。處でこの賀筵といふものは本人の宅を離れてその近親の一族の邸宅などで催されるものである。然るに後年基經の孫師輔は九條に住んで世に九條殿といつた。（拾芥抄に「九條殿、九條坊門南、町尻東とある）のによると、早くから此邊に近親が居たものと想はれる。櫻花　この宴は貞觀十七年の春催されたので折から咲き盛る櫻に呼びかけたもの　ちりかひくもれ　散り交ひ曇れ、亂れ散つてあたりを曇らせよ、通常ばちつとでも久しく咲いてゐれと囑するのに對しては一種の警句となつてゐるそしてその譯を以下に歌つて居る。おいらく　「老ゆる」の「る」を延べて「老ゆらく」としたものを更に轉じたもの「老い」といふことで、こゝではその「老い」をば人に譬へたもの　來むといふなる　やがてやつて來るといふあの……四十を初老といふこと支那の稱呼でそれを取入れて我邦でも已に懷風藻の中に「五八の宴を賀す」と題した詩が散見して居る。まがふがに　紛れるための料に。

【評】堀河太政大臣の四十の賀を九條の家でした時によんだもの。（ガイ）櫻の花よ（今日ばかりは大いに）亂れ散つて（あたりを）曇らせてくれよ。（この我が尊敬する基經公の爲めにあの「嫌な」）「老い」といふ奴さんが來ようとかいふその道もまぎれてしまふ爲によ。

【評】始めに警句を提げて終りに契合感で收めることはこの作者の常套手段である。これを兄行平の作とするのは誤であらう。のみならず業平の基經に寄せた敬慕の情は伊勢物語の百段

咲く花のしたにかくるゝ人多みありしにまさる藤のかげかも

など咏んだのに思ひ合せてもそれと肯づかれる。だが併しめでたかるべき賀歌に「ちりかひくもれ」といふ語感は少し

どうかと思はれる。老いの擬人は當時にあつては一つの趣向となつたものと見えて八九四にも似たのがある。「かに」は「賀に」に響いてめでたいなどいふ説（密勘）は受けとれない。

さだときのみこのをばの、よそぢの賀を大井にてしける日よめる

三五〇　かめのをの山のいはねをとめておつる瀧の白玉千世かずかも　きのこれをか

考　詞書　元「……四十の賀○……しける日○○○」

初句　餘材抄「龜の緒の」

四句　筋「瀧の白いと」

六帖四視・新撰　同。

補　さだときのみこ　貞辰親王、清和天皇の女御に賴子と佳珠子とあつてどちらも藤原基經の御女であつて、佳珠子のお腹に御生れになつたのがこの親王であるから、御をば君は即ち賴子の君である。大井　嵐山附近の大井川岸の里。きのこれをか　紀維岳（又維凞とも）無官の六位とあるだけで傳記不明。かめのをの山　龜山のことを龜の御山といつたとあるからその「御」を「緒」に轉じて龜緒山と支那風に云ひ更にその訓をつける時龜の尾山と轉じたものではあるまいか？　山は今御陵地になつて、嵯峨驛から嵐山に行く中途渡月橋の手前にある。山の形龜の尾を出したやうなので名づけるといふのは俗説で、龜が甲をほしたやうな形である處からつけた名であらう　本朝文粹卷十三　祭二龜山神一文前中書王　とあつて此は天延三年八月十三日に催されたとあるが此文の中に「伏見二此山之形一以レ龜爲レ體」とある。又同じ親王の蒐裘賦が同書の卷一に出てその終の方に「吾將レ入二龜緒之巖隈一歸二蒐裘一而去レ來。」とある。その龜緒の緒は峯尾の尾であつて尻尾の尾ではなからう。いはれ　「れ」は接尾語　とめて　「磐根にそひておつるないふ」と契沖の解でよろしいが、こゝは瀧そのものに心ありてわざ〳〵えらび求めて落ちるかのやうにあやなしたいひ方である。瀧のしら玉瀧水のしぶきの玉　千世のかずかも　「かも」を一語と見ないで「か」は疑問「も」は味歎と解く。我賴子の女御の御榮え遊ばす千年の數を示したものでありませうか、あゝ（返すがへすも御めでたい次第でございます）

講　なし。

評　處もあらうに長壽に緣ある龜を名に負ふ龜のを山の、物もあらうに、ときはかきはにめでたがられる岩根を、殊更に求めて落ちる瀧の白玉は我が賴子の君の四十を壽ぐうたげを御催しになる今月今日、水も心あつて、君が御榮えを象徴して流下するものと解せられまするとゝいつたもので處に繫け、物に繫け實に遺憾なき祝賀振である。季吟が「いづくの瀧のしら玉にても千世の數とよむべけれど、是は大井にての賀なればたよりある上に龜山といふ名もかたゞくよせあれば歌はかやうによめるよろしとする也。」

と云つたのは適評である。

龜の富貴長壽に寄せあることは大戴禮・爾雅などを始め知漢の書に澤山記載されて居る。前掲龜山神を祭る文の句の續きにも「夫龜玄武之靈、司水之神也。甲蟲三百六十之屬、在二北方一。靈龜爲二之長一、或背負二蓬宮一、不レ知二幾千里一、或身遊二蓮葉一、不レ知二幾萬年一、神靈之至誠無量者也」とある。

さだやすのみこの（清ときやすのきみに御賀九十の賀）きさいの宮の五十（清もと）の賀たてまつりける御屏風に、さくらの花のちるしたに、人の花見たるかたかけるをよめる　藤原おきかぜ

三五一　徒にすぐる月日はおもほえで花みてくらす春ぞすくなき

考　詞書　興風集「貞保の親王の后の五十賀奉り給ひけるに御屏風の繪に櫻の花見たる所」

元「貞保の親王の、后の○○御五十の賀たてまつりける時、三尺の○屏風の繪に、櫻の花の散るもとに、人の花見た

る所に○○○○○○○」

二句　三「過す月日は」

三句　元・興風集・筋「おほかれど」

期「おほけれど」　顕・餘材抄「おもほえて」

評　さだやすのみこ　貞保親王即ち清和天皇第五の皇子御母は　きさいの宮　即ち二條后藤原高子、五十の賀たてまつりける　此親王が母君五十の算賀を御備しになつた。それは寛平三年のことで、同時に伊勢の咏んだ祝の讃賛歌などが三首伊勢集にもある。徒に過ぐる月日　これといふ面白いこともなしに無意味に暮れて行く月日は　おもほえで　いくらすん〳〵たつても何とも思はれないで、「思ほえて」とあるものは確かに一日の長さは一日の長さに思はれてとの意だが今はこれを採らない（評参照）　花みてくらす春の樂しみの輙義語として、ゆつくり花でも見て暮らすといふやうな　春ぞすくなき　春こそはどうも月日が幾ちもないやうに思はれる。

講　（此といふ）樂しみもなくむだに月日を送つてゐる時は（月日のたつのを惜しいとも何とも）思はれないでゐて（さてかうして）花でも見て暮らすといふ春の月日といふものになるといくらもないもんだなあ（まことに月日といふものは生憎に出來てゐるなあ）

評　契沖は今一説をあげて「第三句はおもほえてとよむべし。其心は常に過る月日はおほかるやうに覺ゆれど、花みる春の心は月日のすくなきやうに疊ゆといへり……」といつて讀者の心に任せるが、自分はこの方が宜いと思ふ、」と謂つてをる。けれども屏風繪の歌といふものは大抵その畫中の人物の主觀を我主觀として詠むのであるから、今櫻の花の散る下に立つてゐる人の心となつて「咲くと見し間に早や散りにけり」と様にあわたゞしくも落花するのを惜しんで、さても花見る春の短き事よ、外の季節の月日とても同じことであらうが、それは格別短いとも何とも思はれないで、只この春がサ……とりわけ花見る春がサ……インヤーこの櫻の花を心ゆくまで見めでようといふ春に限つて、短かく感ぜらるゝよとしてこそ趣がある。實にも佳辰は過ぎ易く寂寞は經難く、いやな旅路は一里も千里、戀の逢瀬は千夜も一夜とやうに覺えるのは人々時間に對する通有の錯覺であるから、この歌の感味は空想ではなく實感である。彼の大江千里が句題和歌に（新勅撰にもある）「歳時春日少」といふ題で

年月にまさる時なしとおもへばや春しもつれにすくなからん

といつたのは同一趣致ではあるが、稍理りすぎた嫌がある。此はさる理窟は抜きにして氣分の上から渾然たる惜春の賦を奏でたもので、語の節奏も優れて居る。

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける　きのつらゆき

三五二　春くればやどにまづさく梅の花君が千とせのかざしとぞ見る

考　詞書・作者　元「本康の親王の七十の賀の歌、うしろの屏風に○○○かきける○貫之」

六帖四かざし　同。

講　もとやすのみこ　本康親王仁明天皇第五の皇子母は從四位上滋野淵子（參議貞主女）とも從四位上紀種子（名虎女）ともいふ。延喜元年薨去。世に八條宮と申す。うしろの屏風　賀莚の後にひき廻す屏風　かきける　屏風に書く役は歌も書も上手な人が選ばれる。貫之の歌はいふまでもなく優れてゐるが書もまた巧みで、日本書道史の上に特筆される程の名人で下の泉大將の四十賀にも歌書を召されてゐる。春くれば　春になると、下に「逸早く」など補ふ。まづさく　魁けて咲く、遲咲などは緣起の吉いものではない、立春匆々初一發に咲くといふ景氣の活々した處が祝の句になつて宜い。君が千とせの　我本康の親王が榮えさせられる幾久しき間のかざしとぞみる　御かざし髪挿の義で冠の巾子の際に自然の草花・木花や造花を挿んで事ある時の、男子の裝飾とした上代の風俗であること已に述べた通り、「みる」は……と樣に想はれまする。

講　春が來ると（逸早く我が）宿に魁けて咲く梅の花は見るから瑞氣が充ち溢れてゐるので）我が親王様の榮えます幾久し

い間御飾りになる挿頭の花と想ひまする。

評　これもその屏風繪は梅咲く宿の下蔭に人の見てゐる圖樣であつたと想はれる。そこでその宿のあるじの心持と、作者が本康親王にお寄せ申す祝意とをこきまぜてこの形にしたもの。殊に梅の花はよく挿頭に用ひられたものであり、親王の御坐席の後ろにこの繪この歌を祝つて悅びのうたげを催されるとなつては、繪よし歌よし字よし物よし人々の機嫌もよしとなつて折合へる味み振である。賀の歌には意味の深刻なものは一つもない。唯々その場のめでたい空氣を破さないやうに――能ふべくんばその空氣が、歌を中心にして今一段と濃厚になるやうに立意するのがめでたいとせられたらしい當時、この一首が如何に御本人の親王を悅ばせ一座の人々を感歎させたことであらう。

三五三　いにしへにありきあらずはしらねどもちとせのためし君にはじめん　　素性法師

考　詞書　素性集「もとやすの親王五十賀し侍りける後ろの屏風に」。

作者　元「素性○○」

初句　六帖四視「古も」

嘉「いにしへの」

新撰　同。

釋　いにしへ　往にし方へ、昔　ありきあらずは　ありきあらざりきはとすべきを句調上過去と現在とを結んで「ありきあらず」としそれを名詞句として體言助詞の「は」につゞけたもの。ちとせのためし　千年榮えるといふ例、紀に「本」をためしと訓んだとあるが先蹤とか實例といつた意味の語である。現代語に「レコードをつくる」などレコードといふに當る。君にはじめん　親王をお手始めといたしませう。

評　歌境は同じ場合で、屏風繪の歌でなく、歌だけを書いたもの、昔あつたか、なかつたか、それは知らないけれども(そんなことは措いて問ふ處に非す)千年榮えるといふめでたいためしは我本康親王樣を御手始めに致しませう。

評　此はまたひたぶるに親王を壽いだ殁理趣の狂熱が一首を佳調づけて居る。「ナニそんな先例がないといふのか、先例もへチマもあつたもんか、この親王樣が先例の御本家だぞ」といつた思ひ入り樣これも滿座の拍手を浴びたことであらう。古今集を理窟で固めた歌ばかりなどと一言に評し去るべきではない。理窟を一通り並べておいてかう熱叫した歌ひ方はなか〳〵情趣が深い。

三五四　ふしておもひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらん我君のため

考　詞書　素性集「法皇寺めぐりし給ふ御伴にて」

二句　清「おきてかすふる」

三句　素性集・新撰「萬づ世を」

六帖四視　同

釋　ふしておもひ　臥しても思ひ起きても思ふ。「かぞふる」は「思ふ」と同じ意なのを語の變化を工夫したもの、疑てもさめても思ふ。行住座臥そのことを心にかける。漢語に二六時中といふがあるに相當する(これを近頃の人は四六時中といふ。今昔一晝夜の時間の割方の相違を考へずに使つたものである。その意味を知つていふなら現代では四　時中の方が合理的である)何を思ふかそれは次の萬世をである。誰の萬世か？　いふまでもなく我が親王の萬世の御榮えをである。神ぞしるらん云々　人力の之を如何ともすることは出來なからうとも神樣こそはきき屆けてかなへて下さるであらう。「しる」とは統治するの意、こゝではそのことを聞

屆けて鶯梅よくすること。

聞 （私が）我が親王様の爲めに寢てもさめても、萬世かけて榮えさせられるやうにと（切に）祈つてゐることは（人間業ではかなえることも出來なからうとも）神こそは御聞屆け下さることでありませう。

評 「隨つてとはの榮えの新記錄をば我親王様に於て御つくりになることは確かなものです」と前の歌までも廻護して一種聯作の體を爲して居る。但句の排列あまりに倒置句錯落句が多い爲めに、四五の兩句が遠くの親類よりも近くの他人といふ格で、單に隣接してゐる關係で密着して、君・作者・神といふ三角關係に於て肝腎一首の喫子になる作者はとりのけられて君と神とばかり結合する嫌がある。

一首を讀み下してよく味はへれば成程と聞えるものの一寸見には誤解され易い。景樹の左の評も略これに近い。

本來、わが君の爲め、ふして思ひ、おきて數ふると續くべきを、調に任せてわが君の爲めを、結句に置けるより、君の爲めに神ぞ知るらむの意な倒裝したる語勢となりて、君の爲めの詞、全く神の方にのみ重く係りて、君の爲めに起臥願ふの意は却て疎くなれり。それも立離れたる心ならねば、さる方にかくも調べおろせるなり。

それと今一つ「しるらん」といふ語、これは下にもあつて、この頃の語典の素養ある人ならばさる誤解もなからうが、でなく一般讀者の早合點で「神様こそは知つてゐて下さらう」と聞える。するとその餘情は何か他から誤解を受けて自分の誠實を表明強調して「人は知らずとも神様が御照覽だ」となつて、これでは一座の人々に對して不快に響かうとも想はれる。現に歸言の解などは此に類するのだ。これは歌の缺點ではなく、この歌を讀むについての注意までに添へたのである。

藤原三善が六十賀によみける

在原しげはる

三五五　つるかめもちとせののちはしらなくにあかぬ心にまかせはててん

このうたはある人在原のときはるがともいふ

考 詞書　元「藤原のよしみが六十の賀に○○○○」

左註　元　なし。

六帖四祝　同。

補 藤原三善　傳不詳。在原しげはる　滋春、業平の二男で一に在次の君（在二の君）といふ　母は染殿内侍（右大臣藤原良相の女　福壽のためしによく引かれる鶴や龜でも、ちとせののちは云々

父に似て歌をよくし本集並に新勅撰に採られて居る。つるかめも

そのちとせ榮えた後はどうなるかわからないによつて、「知らなく」は「知らぬ」の延言、「に」は原因を示す助詞、次に「御身が永久の御榮えは」と補ふ。あかぬ心に云々　いくら長命せられても飽く期なき吾が心にまかせきりにしてしまひませう。

聞 （めでたいためしの）鶴でも龜でも千とせ榮えたその後はどうかわからないによつて（鶴のやうにとか龜のやうにとか譬へることはよして）あなたがいつまで生きながらへ榮えられても、飽くを知らないこのわたしの心に任せきりにしませう。

評 三五四などと同想だが「あかぬ心」といつたやうな抽象物を歌つた爲めに、意味そのものは熱心な祝意な割にその情趣が活躍しない「宿にまづさく梅の花」と樣に、矢張何等かの具象に繫いで歌ふべきであらう。

左註に「時春」とあるが傳は未詳であるから何とも斷定し兼ねる。但し滋春・時春共に物故した後などで、所傳の中先づは有名な方を作者と推定したものであらう。

拾遺五賀の二八三に

襷中納言敦忠母の賀し侍りけるに　源公忠朝臣

賀　三五五・三五六

萬代も猶こそあかれ君がため思ふこゝろの限りなければ

とあるのは、これと酷似してゐて、その缺點も亦相似て居る。

よしみねのつねなりがよそちのがにむすめにかはりてよみ侍ける　そせい法し

三五六　萬代をまつにぞ君をいはひつる千とせのかげにすまんとおもへば

考　詞書　素性集「良岑のつねより四十賀し侍りけるに遣しける」

清「……むすめにあつらへられて」

作者　元「良岑のつねなりが四十の賀しけるに○○○○かはりてよめる　素性○○」

六帖四視「賀之」

初句　六帖「萬づ代の」

二句　元「まつにぞ君は」　六帖「待つにぞ年を」

三句　元「いつりつる」　嘉「いはひつゝ」　六帖「祈つる」

通　よしみねのつねなり　良岑經世傳記不明だが三代實錄に「貞觀十七年五月十九日庚子、從四位下行丹波守良岑朝臣經世卒」とある。良岑姓を名のつてゐるのを見ると素性の同族であらう。むすめ　經世の女。萬代を　父君の萬代の榮えを。まつにぞ　「待つ」に「松」をかけたもの　いはひつる　「齋ひ」は忌つきなどと同じく神を祭ること、それが轉じて「切に祈る」意となり又單に「祝福する」意ともなる。こゝも祝福の心「つる」は「鶴」の秀句　千とせのかげに　松のちとせの緣の下蔭に(鶴が)父君の永久の御榮えの御庇に(娘の私が)　すまんとおもへば　樂しく住まはうと思ひますれば。

通　(父君が)萬代(の御榮えを)待つので松(の飾りものを差上げて)を御祝ひ申しまする。(その松に巢くふて居る鶴が千歳の松の下かげに住むごとくに)私も父君永久御繁榮のお蔭を蒙つて安氣に幸福に暮らしたいと思ひますので。

評　老人氣質や老父氣質とでも謂はうか、いつまでも我子をあかん坊と心得、我子から立てられることを悅ぶのが親の情である處から、その意に迎合して咏むことは少からず相手を歡ばせる美的な技巧となつて居る。鶴の巢ごもりとか松上の鶴とかいふ樣な飾り物を贈つてこの歌をつけたものと想ふが、實によく父子の情美を表して居る。我邦の家族制度が生んだ詩美とでも謂はうか。

但、この歌始め「萬代を」と出たのだから四句の數詞はどうしても萬代と同等若くはそれ以上でなくては蛇尾に終る處だのに「千とせ」としたので、惡い意味の數詞の食傷に墮して居る。

歌境も立意も違ふけれども九條師輔が新年の朝拜に參內するのに、魚袋が破損してゐて困つて居たのを父貞信公忠平が松の折枝に金魚袋をつけて「此を代りに」といつて贈つたので、師輔はこの時の父の好意が非常に嬉しかつたと見えて、態々貫之に賴んで禮歌を贈つた。

吹く風に氷とけたる池の魚は千代まで松のかげに遊ばん

といふので、大鏡にも貫之集にも特筆されて居て　此も親子の情美を含んだ歌話であつて、こゝの素性のが松を父鶴を娘に譬へたのに對して、貫之のは松を父魚を子に譬へたものである。

内侍のかみの右大將藤原師臣の四十賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりける歌

三五七　かすが野にわかなつみつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらん

考　詞書　清「……藤原の朝臣の……○さのゑ……」

賀　三五六・三五七

作者　元永本「内侍のかみの七十賀、子の右大將藤原朝臣の四十賀し侍る時、四季の繪かきたるうしろの屏風の歌
　　春　　素性法師」
頓「内侍のかみの七十賀、子の右大將藤原朝臣の四十賀しける時に、四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた
　　春　　素性法師」
として右側の傍注に「滿子内大臣高藤二女奉養延喜聖主延喜十七年從二位　大納言右大將定國延喜十八年同年七月薨四十」とある。
初句　元・筋「かすが野の」
四句　大和物語・新撰和歌・六帖四視・素性「祈る」
　　新撰　同。

考　内侍のかみ　尚侍女官の最高だが此頃では天皇の御配偶にもなられるのが普通であつた。　こゝは藤原滿子といつて高藤の二女で、醍醐天皇に仕へた。右大將藤原朝臣　滿子の兄定國のこと、一に泉大將といひ、高藤の三男である。その四十賀は延喜十四年二月十八日（躬恒集詞書）とも延喜五年二月（貫之集詞書）ともいふ。四季のゑかける云々　醍醐天皇の御意匠で四季の屏風を畫かせられたもの、四季の屏風とは四帖を一揃ひとして各帖に一季づつの景色を描いたものをいふ。大規模の祝賀にこの屏風をひきまはすことが當時の上流趣味であつたと見えて、源氏若菜上にも出て居る。かきたりける歌　例によつて歌書共に堪能な人が選ばれたものと見える。それは諸書の考證によると次の通りである。

春　三五七　素性
　　三五八　躬恒
夏　三五九　友則
秋　三六〇　躬恒
　　三六一　忠岑
　　三六二　忠岑
冬　三六三　貫之

で以上の詞書は以下三六三までの七首の總序であつてこゝの歌としては別に「春」とあるべきである。考にあるやうにこの「春」を入れた古本もあることなり、眞淵が見たといふ家隆の自筆本にも「春」とあつたといふし、吾々が今日編輯の體裁から考へても此がなくては不統一である。で、契沖が「春の歌とかゝぬは四季のゑかけるといひて、後に夏秋等とかきたれば春といふにおよばねばなり」といつたのはしひごとである。加之、前掲の作者名も一々入れるのが本當であらう。

かすが野　一七參照。神　こゝは春日明神即ち藤原氏の祖神たる天兒屋根命。しるらん　御かなへ下さるであらう「しる」三五四の「しる」と同じ。

語　尚侍藤原滿子が兄君泉大將の四十賀を催した時、四季の繪を書いた後の屏風に書いた歌ども。

　　春　　素性法師

春日野で若菜つみをしつゝ我が定國公の萬代の榮えを切に祈る心は（外ならぬ此公の祖神たる春日の）神こそは御かなへ下さることであらう。

評　若がえることを名に負ふ若菜摘みで有名な春日野、春日野に近い春日の宮と畫中の主材を祝賀に結束して畫中の人物になり得た歌、巧は巧だが、若菜つみをしながら齋ふといふこと少し畫に卽しようとして用語の聯接に破綻を來したものと思ふ。

三五八　山たかみ雲井にみゆる櫻花心のゆきて折らぬ日ぞなき

考　詞書　躬恒集「えき十四年二月十八日仰によりて奉るいづみの大將の四十の賀の屏風四帖うちより調じて遣すにかく例の歌」

賀　三五七・三五八・三五九

作者　元・筋・六帖六山ざくら・躬恒集「躬恒」
道濟十體　第十　兩方の歌
六帖・新撰・金。　同

補 山たかみ　山が高いので、雲井にみゆる　高く大空に見える　心のゆきて　からだは行かれないが心だけは行つて、これに心ゆく(滿足する)をかけたものだといふ。(愚考「心ゆく」にかけることはどうかと思ふ。「心ゆく」を「心のゆく」といふこと單獨句としては用例がない。それに身直接にその地に行くことが出來ないで心だけで憧憬れるといふことは近景のそれに比して「心ゆかず」とこそ謂ふべきである。「心」は「からだ」に對へた詞から「心はゆきて」とありたい。　ならぬ日ぞなき　手折らない日とてはたゞの一日だつて無い。毎日心に手折るばかりにあこがれてゐる。

講 (あんまり)山が高いので(山の頂の櫻はまるで大空の　雲井に見えてゐる(ので傍近く寄ることはできないが)心だけは毎日々々あこがれてたゞの一日だつて花の木まで行つて手折らぬ日とてはない。

評 繪樣は春霞にこめられた高嶺の櫻――それを遠望する人物といつた風のものであつたらう。身心の二元を立てて身は行かれぬが心だけは毎日手折るといつた趣向か一箇だが、あまり秀咏とはいへない。それに屏風繪の歌は算賀と沒交渉の純叙景歌でよろしいとはいふものの、前の春日野のやうな襯染の意匠もこらせばこらし得るのだから、今少し覘賀に因ませても咏み得る處ではなからうか。

夏

三五九　めづらしき聲ならなくに時鳥こゝらのとしをあかずも有哉

考 詞書　友則集「屏風の歌、左大將の四十賀の料」

作者　元筋「躬恒」
新撰　同。　六帖友則集「友則」

補 めづらしき聲ならなくに　毎年一夏ずつと聞くので格別珍しい聲でもないのに、こゝらのとしを　許多の年を、打聽いても

講 時鳥は(いつもよく聞くので格別)珍らしい聲でもないのに、長年(きいても〳〵)飽かないものだなあ。

評 時鳥に諦聽して居る繪は畫題として描き難いもので先は夏木立や、五月雨や、庵室閑居の人などを配せられる。で、贊歌は寧ろその方から畫の美を助け歌つたらよろしからうのにそれに、これは聊か談理に墮して居る。「いつも月夜に來の飯」とか「君子の交りは汪々として淡きこと水の如し」とか、眞に優れたものは一時的な刺戟性はない代りに不易の情味があるといふことは道理としてはよく聞えるが、それを時鳥に持つて行つた處で格別時鳥の個性を歌つたことにもならねば、又こゝの屏風繪特有の色調を把捉したことにもならない。萬葉一九の四一六八

としのほにきなく物ゆゑ郭公きけばしのばくあはぬ日おほみ

續千載雜一の一六七八山田法師の

人々あつまりて櫻の花の下に居てよめる

めづらしき物かはあやな櫻花こゝらの春にあかずも有かな

など此種のものは何を歌つたにしても單なる談理の概念歌といふ以上の何物でもない。

秋

三六〇　住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつ白浪

考 詞書　拾遺一七雜秋一一一二「定國の家の屏風に」

賀　三五九・三六〇

作者　元・筋・拾遺一七「躬恒」　六帖一秋の風「素性」
二句「松に秋風」
躬恒集　同。

語 住の江　攝津國東成郡住吉の事、今住吉神社のあるあたり、元「住の江」は同國菟原郡（今武庫郡）御影の東の、東海道線住吉驛のある處をさしたもので、應神・仁德の交明神の御託宣によつて今の住吉に遷されたものだといふ。但し元住吉の方にも現に可なりの神社はあるが、東成郡の方が結構壯麗である。祭神は上筒男・中筒男・底筒男の三命で、神功皇后三韓征伐の時冥助を垂れ、皇后凱旋の歸途その御告げによつていつき祭られたのが緣起だといふ。攝津風土記（飯田武郷氏による）に「所二以稱一住吉一者　昔息長足比賣天皇世。住吉大神現出而。巡二行天下一不見二可レ住國一時。到二於沼名掠長岡一之前一（前者今神宮南邊是其地）乃謂斯實可レ住之國。遂讃稱レ之云二眞住吉住吉國一乃是定二神社一今俗略レ之直稱二須美乃叡一」とある。で地名は「住心地が吉い」といふ義で、奈良朝頃までは專ら「すみのえ」といひ王朝以後は「すみのえ」「すみよし」の中どちらかを時と場合と作者の好みとによつて用ひたものらしい。今住吉神社境内の前に霰の松原といふのがあつて、昔はその際まで海水が灣入してゐたものなのが、今日では海岸は二十幾町も西手になつてその間はずつと陸地となつて居る。地文學者の說によると日本は裏日本の方面では年々陸地が增大し、表日本の方面に於ては年々に浸蝕されつゝあるとのことだから、これは海波の作用ではなく、大和川・木津川が齎らす沖積土が堆積してその爲めに生じた滄桑の變であらう。隨てこの歌並にこの住吉を詠んだ古歌を鑑賞するものは、今日の住吉を以て律してはならない。ふくからに　吹くもんだからそれがもとで　こゑうちそふる　松風の響に更にうちそへて、「うち」は接頭語ではあるが下の白波に對して實動詞の意味をもこめてゐるとの解（契沖）もあるが、さうした繁褥な技巧は認めない方がこの一首の作意には適つて居ると思ふ。おきつ白浪　「つ」は「の」と同義の體言助詞。沖の白浪。

評 秋風が住吉の松をふくにつれて（その松風の颯々たる響きに）聲打添へて響く沖の白浪（の鳴りの高さよ）畫は住吉の松に茅渟浦回の波浪澎湃たる有樣であつたらう。祝賀の意とは離れて居るが、古來叙景の秀詠として躬恒の名聲を高めたものである。思ふにこの歌の特長は青松白波の色彩對照に優美を見せ、松風の颯々と白波の浩蕩とに天籟地籟の陸と海と相共鳴する壯美を示し、僅々三十一音の短詩形の中能く相併行し難き兩美を歌ひこなし得た點にある。而かもこの双美の原動力たるものは「秋風」にあつて、これあるによつて松風も白波も起きる譯だからこの語に萬斛の强努を張つたやうな力が見える。

後來この秀詠に比肩しようとした歌が數多くある中にも秀詠が二つある。一つは新古今十七雜中の一五九七

天暦の御時屛風の歌　壬生忠見

秋風の關吹きこゆるたびごとに聲うちそふるすまの浦波

といふので、これとても佳作ではあるが、表したは秋風白波の韻響の壯美だけである。後拾遺十八雜四、一〇六三

延久五年三月住吉にまゐらせ給ひてかへさによませたまひける　東三條院御製

として一首あつて次に同じ時の歌とおぼしく

沖つ風ふきにけらしな住吉の松のしづえをあらふしら波　民部卿經信

といふが出てゐて、これは當時にあつては大分褒められもし、作者經信自身も餘程得意であつたと見えて、十訓抄に我子俊賴と共にかの躬恒の秀詠と比較鑑賞した歌話が出て居る。が、この一首に見られるものは青松白波の對照から生ずる優美の一面を歌ひ得ただけで、到底躬恒の壘を摩するに足りない。「うそから出たまこと」といふことがあるが、屛風畫から出たこの一首は實景に臨んだ以上の出來ばえと謂つて宜からう。

三六一　千鳥なくさほの川霧たちぬらし山の木のはも色まさりゆく

賀　三六〇・三六一

考　詞書　忠岑集「泉の右大將の四十賀の屏風に」
作者　元・筋・六帖六槙・忠岑集「忠岑」
三句　筋「立つからに」
四句　元「やまのもみぢも」　六帖「嶺の梢も」　家持集「山の紅葉ば」
結句　爲「色まばりゆく　忠岑集「色かはりゆく」　清「いろかはりゆく」　家持集　同。

精　千鳥　三四五參照。千鳥を冬の景物としたのは後世振でこの歌は季節に關係なく味んだものだ。こゝは秋で、忠岑集にも秋として、この歌が出て居る。佐保　已に說いた。

講　千鳥のないてゐる佐保川には(最早)霧が立つたらしい。(アノ)山の木の葉のもみぢ色がだん〳〵濃くなつて行く(のを見ると)

評　繪は佐保川を隔てて紅葉なす山の景色であらう。「千鳥なく」は詞形からいふと畫面にあるもののやうだが、又一方から考へると此は佐保の川霧につゞけてまるで枕詞か序詞のやうな常套句ではなかつたらうか。

六帖一に躬恒の
千鳥鳴く佐保の川霧立返りつれなきえだを戀渡るかな
源順集に
千鳥なく佐保の川霧さほ山の紅葉ばかりは立なはしそ
又川霧は詞面にも想像的に味まれてゐるし畫面には表しにくいものだから、これは歌が畫を補つたものであらう。木の葉の色づくのを霧の故に歸したものは珍しいが、あまり無理な着想でもない。格別とりたてての妙處はないが、何となく古雅で大らかで、王朝初期以前の風格を備へて居る。語句に同異が多いが本文の形が優れて居る。

三六二　秋くれど色もかはらぬときは山よそのの紅葉を風ぞかしける

考　初句　清・和「秋なれど」
四句　元「ほかのもみぢを」
精　色もかはらぬ　木々の葉の色も變らない。ときは山　一四八・一五一參照

講　秋が來ても木々の葉の色にも變りのないときはの山(に對つて、矢張時候相應の裝ひをするがよからうといふので。)風が(親切にも)よその紅葉を(吹きもたらして)(貸して居る(ことよ)

評　風の好意によつて秋の新裝をしたといふこの常磐の山の繪樣を想像するに、綠美しい松木立の山に鮮紅の幾片が點綴して居るところであらう。そこで畫面に表し得ない風を想像して、此に自然美の衣裝貸をさせて紅綠映射の美に生彩を與へたものでこの一首によつて山にも木にも風にも生命を得たことになる。輕妙奇警の好即興と謂つつべきか。

冬

三六三　白雪のふりしく時はみよし野の山した風に花ぞちりける

考　詞書　拾遺四冬二五三「泉大將定國の家の屏風に」
貫之集一「延喜五年二月いづみの大將の四十賀の屏風の歌　おほせことにて之を奉る雪の降りたる所」
作者　元・筋「忠岑」
家隆本・貫之集　拾遺集「貫之」
三句　六帖一雪「あしびきの山した風」　山より下へ吹く風即ち「おろし」のこと。萬葉では下風の合字を「おろし」と訓ませてある。同じものである。

賀　三六二・三六三・三六四

譯 白雪が頻つて降ると三吉野の山おろしに（時ならぬ）花が敢つたわい。（これは珍しい眺めかな）

評 繪はみ吉野の吹雪であらう。これも山下風を儆つて來て六花の美をあやなしたもので、相當綺麗な歌だが創新味はない。單に雪を花に譬へただけだから。お負けに先蹤もある。萬葉十春雜歌一八四一に、

山高みふり來る雪か梅の花散りかも來ると念ひつるかも　（又咲きかもちると）

とある。それをみよし野へ持つて行つただけである。而かもみよしのは作者の意匠でなく、畫家の工夫否な延喜帝の御考案であるとなつては歌にはちつとのとりえもなくなる。一說に吉野は櫻の名處であるから處柄雪も花かと思はれるといつたのだといふ（景樹や廣蔭）けれども金子氏も謂はれるやうにこの頃のみよし野は深山として雨雪によせある土地として、故鄉乃至山川形勝の地として咏まれたもので、さうならこそ、こゝも態々誂らへて冬の部に御書かせになつたものであるから、唯單純な六花落花の暗喩に過ぎない。

春宮のうまれたまへりける時にまゐりてよめる　典侍　藤原よるかの朝臣

三六四　峰たかき春日の山に出る日はくもる時なくてらすべらなり

考 詞書・作者　清「……ないし藤はらのよるかの朝臣」元「東宮の生れたまひけるに、參りてよめる　內侍因香」

六帖一照る日「內侍のすけ寄香」

譯 春宮　皇太子、こゝは醍醐天皇第二の皇子保明親王のことを申す、この御子延喜三年に御降誕、御母は中宮穩子といつて基經の女、さて翌四年二月十日立坊あらせられた　峯高き　いたゞきの高い（門地の高い）　春日の山に　春日明神の神山に、（春日の神の御子孫の藤原氏中只今一番榮えさせられて居る堀河太政大臣の姫君の御腹に）。出る日は　さし出たお日樣は（お生れ遊ばした日の御子は）くもる時なく　雲に日影を掩はれる時なくいつも御健勝で、てらすべらなり　この世を照らされるやうであります（やがて天皇として四海の民に仁惠を垂れさせられることでありませう。）

譯 （字面）春日の山の峰高くさし出る日は（この後）曇る時なく（いつも）下界を照らすことでありませう。その如く（裏面）門閥高きこの明神の御後裔であらせらるゝ中宮樣の御腹に御產まれ遊ばした日の皇子は（此後）永久に榮えまして一天四海を知ろしめすことでございませう。（誠に大慶至極に存じまする）

評 藤原氏の榮華を春日の神と結合することは此期の着想としては極めて自然であらう　榮華や大鏡を見ると代々の攝關が如何にこの氏神を尊んで報謝と祈願とに禮拜したかを詳にすることが出來よう。始め鹿島にあつたものを奈良春日に勸請し、攝關の春日參詣といへば、世を響かすばかりの行々しいものであつた。それも遠方で不便といふので更に「大原や小鹽の山」にお遷ししたものである。此歌は一首暗喩を以て徹底し而かもその譬喩の對が妥當で、親王の御さいさきを祝つたものとして上乘の作である。

此程祝福せられた皇子なのに延喜二十三年三月二十一日二十一歲を以て薨去あらせられたのは眞に悼ましい次第である。後に諡して文獻彥と申すのはこの方の事である。

木集賀の歌は何れも算賀ばかりであるのに、これは皇子御降誕の祝歌でその點も出色である。後年師輔や道長が双六や賭弓の勝負を爭ふにも「若しも今回の御子が御男子ならば重六いでこ」など力んだのを見ると皇子の御誕生は如何ばかり舉族の慶びであつたかも察せられる　といふのは、藤原氏の慣用政策として先づ美しい女兒を儲け、年頃になると女御更衣として入內させ中后皇后と進んで君寵を得て男皇子を外孫に持ち、やがてその皇子を立坊して皇位にお即きになるやうになると是れ得意の絕頂とも謂ふべく、皇子の御誕生は家運發展の劃期的な慶事であつたからである。して見るとこの一首は又文化史的に觀て興多いものだと思ふ。

第八　離別歌序説

土佐日記に「とかくいひて前の守今のももろともにおりて、今のあるじも前のも手とりかはして、醉言にこゝろよげなることして出でにけり」とあつて、別れ際を快くして互に氣拙い感じを一掃しようといふのは古今東西不易の人情である。それは今日別れて明日直ぐにも逢ふ仲でも暇を告げるには互に對手を祝福する挨拶語にも察せられ、この心の延長として祖道の宴となり告別の挨拶廻りとなり、驛頭國境の見送りとなつたものである。離別歌は哀傷歌が死別の情を歌つたものなのに對して專ら生別の情を歌つたもので、萬葉には此目がないが相聞と雜歌と卷二十の坊人の別れなどに歌そのものは澤山ある。本集始めて離別の部を立て之に收めた歌の中には或は訣れの悲しさを述べ三六六・三七一・三八一・三八七或は惜別の情を歌ひ、三六九・三七二・三七三・三七四・三七九・三八三・三八四・三八五・三八六・三八八・三八九・三九〇・三九二・四〇〇或は別れて以後の情を契り、三六七・三七八或は母子、男女纒綿の情緒を托し、三六八・三七五・三七六などそれ〳〵に趣がある。唯今日から見てどうかと思ふのは三九三以下の十數首は永訣の歌ではなく、一時の離別に過ぎないから同じ離別の部に入れてあるのが、不調和な感じのすることである。

題しらず

三六五　立わかれいなばの山の嶺におふる松としきかば今かへりこん

在原行平朝臣

考　部立・元「離別〇」顯「別離部」
　詞書　元なし。
　結句　相「いざかへりこむ」

百ノ一六・六帖　國・新撰　同。
謠曲「松風」　同。

語　立わかれ　「立は」接頭語「わかれ」は「あ〳〵(接頭語)離れ」の轉か。こゝは一寸した別れでなく、當分永の別れをいふ。永訣・訣別・永別・生別などに當る。文德實錄第七に「齊衡二年春正月壬午朔丙午從四位下在原朝臣行平爲二因幡守一」とあつて、この歌は多分その時の詠であらうといふ。いなばの山　此を廣く因幡の國にある山としたもの（眞淵等）と狹く因幡の國の稻葉の山としたもの（景樹等）とある。愚考は說に贊成したい。今任に因幡に下るといふについて大まかにその任國の峯の松をさしたものであらう。けれどもこの一首が人口に膾炙し此に暗示を得て咏んだ後の歌の「いなばの山」といふのは寧ろ後者の狹義のものであらう。といふのはこの稻葉山といふのは當時の國廳所在地（今の國府村）の直ぐ近くに聳えて居て、而かも松樹は蒼鬱として茂つてゐるからである。物集高量氏の日本名所事彙にいふ

稻葉、一に因幡山に作り、又宇倍山とも云ふ岩美郡國府村大字宮の下なる宇倍神社の東北に聳え、其の項きは高原を爲し古松鬱然として蒼翠を極む　在原行平の歌に「……」と詠ぜしは卽ち此の山のことにして、山下なる國府村は行平が國守たりし時に官邸を構へたるの地なり。又宇宮の下に藥師寺の舊址あり。行平此地に藥師佛を安置し、寬弘年中（この年號はどうかと思ふ。すると行平は一條天皇の御代まで生きてゐたことになる）任滿ちて京師に歸りし時、木尊を携へ行きて同地に安置せしもの、即ち今の松原因幡堂なり。藤原定家「忘れなんまつとなつけそ中々に、いなばの山の峯のあき風」

さてこゝは「因幡」に「往なば」をかけたもの　松としきかば云々　松といふやうに私に急用があつて早く還つて來い。こちらは御身のかへりを切に「待つ」て居ると聽きましたならば、今いうて今にもかへつて來ませう。

語　（今日　訣れに大層名殘を惜しんでくれられますが私は今こゝであなたと）お訣れをして「往ぬ」るといふに緣ある因幡の國へ參りますが、あの國の山の頂に生へて居ります「松」といふ風に、御身が私に至急の還りを「待つ」ときへ御たより下さいましたならば直ぐにも（飛んで）かへりませう。（から何もさう、ひどく悲しんでは下さいますな）

評　送らるゝ人、却つて送る人を慰めたもので別離歌としては珍しい趣向である。當時京から因幡に向ふにはどの道を通つたものかは知らぬが、後世承久の役に於ける後鳥羽院、元弘の役に於ける後醍醐天皇の隠岐への御遷幸には山城攝津・播磨・美作の諸國を經、なにはの浦以西、須磨や明石の浦づたひ、汐屋、垂水の漁村を經て杉坂越に院庄あたりへならせられた道行がこまかに出て居る。まして交通不便な王朝初期には下りに六日上りに十一日を費やしたといふのも強ち虚説ではなからう。それだのに「今かへりこん」といつたこの「今」は「直ぐに」を誇張したもので、この種の表現法の早いものは萬葉十三相聞三三二二

門に居るかとめは内に至るとも痛くし戀ひば今還りこむ

であり、同様の修辭は拾遺六の三〇六題しらず、よみ人しらずにも

忘るなよ別路におふる葛の葉の秋風ふけばいま歸へりこむ

とある。人に呼ばれて早く還るといふことはとりも直さず、その人に對する最上の好意の表し方である。（だから此の反對の「こんど來てくれなど云つたつても誰が來てやるものか」は物別れの棄てぜりふである）

ではその相手は誰であらうか？　或は平素入魂の人々が相謀つて彼（行平）を招待した祖道の宴席に於ける一座の人々とも想はれ、又は特に云ひかはした戀人とも想はれ、乃至は自分の父母兄弟といつた風の近親とも想はれる。それは強ちどの推定が當つて居るともいひ得ない。萬葉を見るとよく坊人の赴任についての哀しい訣れの歌がある。それ程でないにしても當時國司受領乃至はそれ以下の一地方官吏として、地方下りをする人は親戚知人との哀別といひ、最高文化に遠ざかる寂しさといひ、今日吾人の想像する以上に甚しいものがあつたらう。所謂「天ざかる鄙のわかれ」の哀感は色々の形を借つて送る人送らるゝ人の別離歌となつたもので、この行平の歌の如きもさうした情感の表れと觀て趣がある。但し因幡を往なばにかけることは行平時代にはまだ一節とも謂はれやうが、後世類種の訣別歌となると最早陳套採るところなしと謂ひたい。金槐集左記の一首はこれから脱化したもの

五月の頃陸奥へまかれりし人のもとに扇など數多遣し侍りし中に郭公かきたる扇に書きつけ侍りし歌

立別れいなばの山の郭公まつと告こせ歸りくるがに

三六六　すがるなく秋の萩原朝たちてたびゆく人をいつとかまたん

よみびとしらず

評　四句　六帖四別「旅行く人の」

結句　六帖四「惜くもあるかな」

語　すがる　これは濱臣の説が妥當だと思ふ。

「すがるは雄略紀に自贏（此云須我屢）と有りて、似我蜂のみならず、轉じては春秋草木の花にむつれて霧をすふ虻の類までをも歌には詠めり、古今集のすがるなく秋の萩原とよめる是れ也。それを鹿と心得たがへしより後は、皆鹿の事としてよめる歌多し」

土蜂・大黄蜂・腰細蜂・さそり・似我蜂など古書にあるものも矢張この「すがる」である。釋日本紀にこの蜂は自分では産卵せず他蟲の子を借りて己の子となす「子借る」卽ち「すがる」であると様に説いたのは詩經に「螟蛉子あれば果蠃養うて子となす」とあるところから來たものだが俗説である。又眞淵の解にこゝを「すがるなす」としてすがるのやうにと見、すがるは一度巣立ちをしたならば決して歸らないものだから、すがるのやうに今出て往き切りで、還つて來られない御身云々とした。理りもきこえて面白い説だが、「すがるなす」とした典據的な原本がないし、一旦巣立したら二度と還らぬとは何によつた説か（詩經の註に一寸此に近い記事もあるが或は又すがるを「果離る」などとつたのかとも推せられる）ともかく根據が不確かだから從ひにくい。尙又この一句を以て次の序詞と見る説（契沖・宣長）はよくない。（評參照）　秋のはぎはら　萩多き野原でそれが秋だといふので、紅萩の優しく咲き亂れた光景を句はせ三句目に「朝」とあるから露しげき萩が枝に白露爛々紅花點々の色彩美をも匂はせて居る。旅ゆく人　「人」は「君」と同じで、こゝは

相手をさしていふ　いつとかまたん　いつまた再び御歸りなさることと心當てに待つことが出來ませう。

評　すがるの鳴いて居る秋の萩原を朝出發なされて旅路につかれるあなたは（マア今御出かけになつて）いつまたお返りになり御會ひ申すことが出來ませう。どうもいつ〳〵とさし定めることが出來ません。（それを思ふと猶のこと今朝の御訣れが名殘惜しく思はれてなりません）

評　今日「左樣なら」といつても明日また直ぐに會ひ得ることの豫想の確實な御互ならば、すがるが鳴かうが鳴くまいが、萩が咲かうが咲くまいが、「左樣なら」「ヤツ失敬」と至極あつさりしたものである。けれども半年一年二三年と再會の期なき人との訣れとなるとさう單純には行かない「もう暫らくはお目にかゝれませんね……では御大事に……」「ハイ有難うあなたも御機嫌よろしう」など今日各驛毎のプラットにかはされるかうした挨拶の中には、ホンの形式に過ぎないものもあるかも知れぬが、その形式もとゞのつまりは訣れんとする相手にそゝぐ最後の愛著感にある。況んや今日出て行つていつ又再び會ひ得ることか？　その豫想さへたゝぬ永のわかれの悲しさは纏綿たる離愁洵にこの歌の通であらう。この一首上句の紅萩なく朝の白露は鮮やかに印象づける佳句である。而かも又かうした景氣は何の爲めに歌はれるかといふと、「せめては今朝の訣れの有樣なりと心にとめて後々までの思出草にしよう」との熱情が直ぐに汲まれる。

あの日、天氣は珍しい快晴でした。あなたはまだ早いといふのをたつてイヤいつまで居てもきりがつかぬからなどいつて出て行かれました。私はあまりのあつけなさにせめてかどまで御見立てしませうといつてとつかは出てまゐりました。さし下駄の片片のかはいてゐるのも心附　すに……さて門から隣まで隣から村境までと、つひ御わかれのしほもなくとう〳〵あの〇〇原までゆきました。おゝあの時の有樣　紅萩が美しく咲きさかつて枝もたわゝの白露に、すが〳〵しい朝の陽光が、輝やかに接吻してゐます。とどこからともなくブーン〳〵と羽音しめやかなすがるが飛んで參りました。

と今樣に直すとかうした思出を得ようとして作者は、今秋の朝の萩咲く原の景色と離愁綿々との情趣に、甘き悲哀といふにも近いやうな情趣にひたつて居ることを示して居る。又下の句は餘韻いかにも訣れの切なさ、心細さを曳いて哀れなものがある。十日二十日と日を限つた旅――それすらも離れはつらいならひ後世俊基の道行（太平記卷五）に、

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉　錦を着てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも旅寢とならば物憂きに……

とある、實にその通りである。然るにこゝはその歸途の期が一年さきとも、二年さきともわからないといふではないか（尤もこれは正直に字面に拘る必要はなく、歸朝は知れてゐたとしても、それが餘りに遠いさきなのでこのやうに誇張したと解いてもよろしからう）近松が世話物の一傑作「丹波與作」に

山も見えざるかりそめに　江戸三がいにいかんして
いつもどらんす事ぢややら　殺しておいていかんせの

とまるで德川期の口語詩のやうなのがあるが、それは又ここの下の句の歌謠化といつても可い程よく似た想である。

三六七　かぎりなき雲井のよそにわかるとも人を心におくらさんやは

考　詞書　遍昭集「……わらはべのはべる所も心には忘れ侍らずとて」
作者　大和物語一六三段遍昭
初句　爲「かぎりなく」
四句　大和物語「人に心を」
五句　元・筋「おくらかさめや」

離　別　三六六・三六七

舊本「なくらさむやは」　打聽「小暗さむやは」
顯「なくらざらめや」　清「おくらさむやは」
遍昭集・大和物語「おくらざらめや」

考 かぎりなき　ほてしなき　雲井のまそ　大空のかなた天外萬里の地　人を　大和物語だとこれは旨と子供を指したものだが、更に擴げれば妻子のことにもなる。併しあの物語が離れてこの歌だけについていふなら、これは「君を」といふも同じで、相手を指したものである。心におくらさんやは　我心に後れさすやうなことをしようか、否そんなことは決してしない。必ず心の中に御身を伴つてからだこそこゝとかしこに隔てても、心の中では同行二人と思うて參りませう。つまり今訣れようとする人に誓ふ愛の詞である

講 (これから私は)天外萬里の(長の旅路に出てあなたとは遠く〳〵御わかれはしますものそれは外面の身體だけのことで)私の心の中ではあなたを置き去りにして出て行くやうなことがありませうか。決してそんなことはありません。

評 「今お訣れしましても今後私は遠い旅の空で物につけ、折にふれてあなたのことを懷しみませう」といふ別辭を詩的に誇張したもので、かの酒豪と旅行で有名であつた故若山牧水氏の

風吹かば秋風吹かば別るとも今日の武藏を思ふ日あらむ

といふのと想はよく似て居る。

大和物語には遍昭が深草の帝(仁明天皇)の崩御を哀み奉り、三十六歳のまだしき身に突然姿をくらまし「たらちねはかゝれとてしも」といつて「ぬばたまの我黑髮を」剃りこぼち、出家遁世しその諒闇あけには「みな人は花の衣に」といふ述懷を柏の葉に書きつけて殿中の人々にいひ送り、それが手がゝりとなつて人を遣してさがさせられた時、その使に對面してこゝの一首を咏んだとなつて、こゝの一齣はこの物語中殊に生彩ある一短篇小說をなして得るが、古今の撰者が別離の部に入れたのを思ひ、又歌そのものを味讀すると、どうもこれは旅立たうとする人が後に居殘る親近の人に向つて咏んだものであらう。下の句に一節は見られるがやゝわざとらしい嫌味がある。

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時はゝのよめる

三六八　たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

考 詞書　元「母のよみける」
結句　元「せきなゞめそ」　六帖二親　同。

講 をのゝちふる　小野千古傳未詳千古といふ人本集の詞書として二箇處出て居る(今一つは三九一)姓は違ふが何れも地方官として在任したことは確かでこゝの千古は「介」即ち二等官として赴任したものである。たらちねの　「おや」の枕詞　まもり　我子に對する保護　あひそふる　の「あひ」は接頭語、これは下の語を強調する氣味合の語である。相違らず、相勤めまする、御厄介に相成など(相思ふ、相似るなど　「相」は「互」にの意がある)心ばかりは　心だけは、「身體は可けなからうとも」といふをこめたもの　せきなとゞめそ　堰きとめてはくれなといふのと　關よ　なとゞめそ、道中處々にある關所よとゞめてはくれなよとかけたもの。

講 (我愛子千古が陸奥下りをするにつき)「たらちねの親(たる私)が、そのお守りのために(我子思ひのこの)心を添へよう(が)こればかりは途中の關處々々でも大目に見許して引止めたりなどはしてくれなよ。

評 逢坂・不破・清見・勿來・白河と京から陸奥へ行くには多くの關所があつて、そこでは一々通行人をあらためる處から思ひついて、有形の身は咎めだてしようとも無形の心は許せ、それも赤の他人といふのでなく、眞身の母のこの心だからと謂つたものだ、形式は寧ろ感味に負けて居る。血肉をわけた我が愛子を遠くに旅立たす哀別離苦は實に昔も今も同一轍で厝をくつては吉日を選び、蔭膳を据るては無事を祈りする肉親愛の尊さがこの一首の生命であらう。

萬葉九相聞に

離　別　三六八・三六九

天平五年癸酉遣唐使船發二難波一入海之時親友贈レ子歌一首並短歌

として一七九〇に

秋はぎに　妻とふ鹿こそ　一子二子　もたりといへ　鹿兒じもの　わが獨子の　草枕　たびにしゆけば　竹珠を（タカダマ）
しじにぬきたれ　いはひべに　木綿とりしでて　いはひつつ　吾思吾子（ワガモフワガコ）　まさきくありこそ

とあり、一七九一に

たび人のやどりせむ野に霜ふらば吾子はぐくめ天の鶴むら

とある。これ等並に本集　〇一・九〇二の贈答歌などは、凡て實感を以て優るものであり形式とても拙くはない佳作である。

きのとしさだ

さだときのみこの家にて、ふぢはらのきよふ（清ん）があふみのすけにまかりける時に、うまのはなむけしけるよよめる

三六九　けふわかれあすはあふみと思へどもよやふけぬらん袖の露けき

考　詞書・作者　元　終の「よめる」の三字なし。木利貞

評　さだときのみこ　三五〇參照。　ふぢはらのきよふ　藤原清生傳未詳、但地方官階級であり、貞辰親王に近侍した人であつたことはこゝの詞書によつて察せられる。うまのはなむけ　餞別、こゝは祖道の宴卽ち送別會　きのとしさだ　紀利貞一三六參照。

けふわかれ　「けふ」は二句の「あす」に對照したもの、今日あなた（卽ち清生の君と）お別れをしてもまた、愚考これは次の秀句と對照的に措いた秀句で「京離れ」卽ち御身は京を去つて近江へ行く人でその御身と今日わかれてもとの意にとりたい。あすはあふみ　明日は任地の近江へ行かれますが、さてその近江はこの山城とつい隣合せの近い國のこととて、私は今日別れても直ぐとあす逢ふことの出來る身であるの意。卽ち「逢ふ身」な國名と秀句にしたもの　思へども　思ひますけれども、それでもなぜかしら　よやふけぬらん　もう夜がふけたと見えまして、つひお名殘をしさに時の移るも氣づかないでゐましたが……袖のつゆけき　袖のあたりが何だか露つぽくなりました。

評　貞辰親王のおうちで（友だちの）藤原清生が近江介になつて赴任して行く（についてその）別離の催しをした夜よんだもの。今日京で別れても、つひあすは逢へるやうな（目と鼻の近くの）近江への（御赴任だからさう別れを悲しむには當らない）とは思ひますけれども（お名殘をしさにつひ）夜が更けたかして（コレこの通り）袖（のあたりが）露つぽくなりました。

評　貫之集に

みなもとのきんたゞのあそんの近江のかみにくだるによめる

ねになきてわびしと思はぬほどなれどつねの心にかはりけるかな

とあると同じ近江の同じ地方官の赴任を送つた別離の歌だが貫之のはことわり過ぎ何だかくすんだやうな氣味がある。これは辭意暢達面白をかしくしやれて送つた跡が見えてよろしい。初二句の秀句などは從來の諸註唯「近江」と「逢ふ身」との方だけを認めてゐるが、これは初句の方にもあつてそれとかけ合ひで面白く仕立てられて居るのではあるまいか。「別れの涙」とあらはにはいはないで、そんなに悲しいとは思ひませんのにそれに……として結句につゞけ「さてはこの袖のしめつぽいのは夜がふけて、夜露がおいたせいでありませうか？……イヤ〳〵矢張お名殘をしさの涙の故だと申したいです……とその場にとつては實に面白い別辭となつて居る。そしてその時の移るをも忘れるといふことも主賓に對する愛想となつて旁々友情のあたゝかさゆかしさをよくあらはしてゐる。

こしへまかりける人によみてつかはしける

離　別　三六九・三七〇・三七一

三七〇　かへる山ありとはきけど春霞立わかれなば戀しかるべし

考　作者　元「同人」　筋「同利貞」

評　かへる山　越前國敦賀郡にあつて昔は鹿蒜山といつたのをこの頃訛つて歸山といふ。三越一かゝりにある山で「歸山」といふ名が都に歸るといふに因みがあるので盛に咏まれた。春霞　「立」の序詞においたものだが多分は春のわかれなので折節の景物たる霞を做うて有心の序としたものであらう。

評　越路へ往つた人に咏んでおくつたもの。（あなたのお出でになる越路には）都に歸るといふに緣のあるかへる山があるとはきいてゐますものの、此の節の春霞の立ち隔てるやうに、京と越路と（幾百里を）へだてましたならば（定めし私は御身を）戀ひ懷かしむことでございませう。

評　詞書は已に越路へ往つた人にあとから贈つたやうになつて居るが、事實は四五句の示すやうに、今や別れといふに方つて咏んだ餞別歌であらう。永の訣れの悲しさを土地にかけ季節にかけして歸山春霞を咏み込んだ點がよろしい。

人のむまのはなむけにてよめる（之集なし）　きのつらゆき

三七一　をしむから戀しき物を白雲の立なん後はなに心ちせん

考　詞書　元・筋「人の馬のはなむけしける時によめる」

四句　清「たちなん時は」　六帖四別・貫之集七「立わかれなば」

評　をしむから云々　名殘惜しく思はれるので、今現　お目にかかつてゐてからに戀しく思れますのにまして　白雲の雲のたつといふところから「立」の枕詞としたもので、同時に白雲のたなびく遙かの土地へ旅立ち行く匂としたもの。

評　（現にお目にかゝつてゐてすらこのやうに）懷かしまれます。（それといふのもお名殘を）惜しむからでございますが、あこれを思へば、まして此後あなたがあの白雲のたつといふやうにこの地をばたつて往かれた後は（マア）どんな心地がしませう。（その寂しさ戀しさ今から想ひやられて心細い極みであります）

評　初二句少し分別の迂餘があつて理に過ぎた氣味はあるが、別離後の豫感を如實に訴へたもの、哀思綿々といひたい。

ともだちの人のくにへまかりけるによめる（清なし）　在原しげはる

三七二　わかれてはほどをへだつと思へばやかつみながらにかねて戀しき

考　詞書　三「ともの……」（たち三代同）　元「……まかりけるとき」

四句　爲「かつみるからに」

評　ともだち　友のこと「だち」は「複數の接尾語」の原意失せて一人の子を「子ども」といふやうに一人の友をも「友だち」といつた。人の國　一、外國　二、外國中殊に支那の國　三、生れ故郷以外の國　四、近幾地方や帝京のある山城以外の國など色々の用例があるが、一はこの頃外國との往來がなかつたし、二は遣唐使は久しく有名無實となつて滋春在世當時は恐らく誰も往かなかつたであらうし、三、四あたりの意が略こゝに近からうと思ふが、猶精しくいへば平安京のある山城以外の內越の國とかあづまとかつくしとか廣く通用された汎稱を持たぬ或地方の國であらう。若し汎稱があるならば、それと明らかに詞書にあげるであらう。在原しげはる三五五參照。ほどをへだつ　初句を受けたのだから「ほど」は空間の意で、互にその場處が遠くなることには相違ないが、しかも下句の續きから觀ると「又相見るまでには幾多の年月を經なければならぬ」との意で時間の意味をも兼ねてゐるから、時間を入れて味はへるのも、必ずしも俗解ではない。否なその方が一層こゝの作意には忠實な解釋とならう。思へばや　思ふが故にや、思ふせいかして　かつ見ながらに　かうしてお目にかゝつてゐながらも一方では　かれて戀しき　御訣れしない前から（豫め）して早や戀しく思は

れます。

語 （今こゝでお訣れをしては）お互（の住み處は）すつと離れ（又お眼にかゝる迄には多くの年月を經なければならない）と思ふその故かして、（かうして）お目にかゝつてゐながら早や前以て（訣れた後と同じやうに）戀しくおもはれます。

評 戀しさの早手廻し、戀情の豫約申込といつたやうな歌で、前のと同一落想であつて人によつては初二句餘りにくだ〳〵しく理り過ぎて父宰平の直覺的な詩想橫溢に比して遙に劣り樣に評する向もあり、又それはそれに相違あるまいが、之を前の類咏に比べると印象の鮮やかさに於て優れた點もある。

實に人は半ば豫感に生きるものである。年の暮には新年に生き新年には歲暮に生き、少年は青年に、子女は新妻に壯年は晩年に、晩年は死後に、すべてはやがて到來する自己の運命に對する心用意に支配せられて離覊するものである。源氏物語松風の卷に明石上が、源氏との間に產まれた明石の姫君をやがて紫上の養女としてやることを餘儀なくせられ掌中の珠今や人手に渡らうとする淋しみを叙して、いつもはついぞ端近に出たことのない明石上が、珍しく簾の外に出て水嵩まさる大堰の流れに見入り「姫に訣れたならば、いつもこんな調子で暮らす身の上だ」としんみりとする處が實によく描かれてあるが、翻つて思ふにこれは人生そのものが大部分豫感に生きる實在だからである。（刹那に生きるといふことは近世自然主義や象徵主義作品の出るまでには見られない）で、この一首はよく這般不易の情味を歌ひ得て居る。但し初二句が少しクシヤ〳〵して居るのは實際非難者の評の通である（嘗てこの雜誌のけようとして「見ながらもかつぞ戀しきわかれての後の逢瀨をいつとか待たん」など試みたこともあつた）

あづまのかたへまかりける人によみてつかはしける　　いかこのあつゆき

三七三　思へども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

考 詞書・作者　元「坂東へまかる人によみてつかはす○○　伊香敦行」　古典本「……　伊香子淳行」

語 あづま　東國地方をいふ。それは日本武尊「吾嬬はや」の御咏歎から來た地名である。序に紛らはしい地方總名に坂東と坂西、關東と關西、及び山東がある。坂の東西は令義解、公式令には足柄山（駿河・相模の境の山）以東を坂東以西を坂西といふ旨があるし關東とは伊勢の鈴鹿の關より東ないひ、それに對してこの關以西を關西といふ。逢阪の關以東を關の東卽ち關東ともしあづまともすることは典據のない俗說ではあるが、慣用可なり舊くして又意味から考へては無理からぬ用法だと想ふ。大江匡房「傳記に彼のまだ年若かつた時殿中の女官たちが「匡房は學問にかけてはえらからうが管絃のみやびかな嗜みはなからうから一つからかつてやりませう」といふので、或時吾妻琴を前にするて「是非一曲伺ひたい」と責めた時、

逢阪の關のかなたもまだ見ねばあづまのことは知られざりけり

と即答した。さそくの秀句まことに氣がきいてゐるといふので、女官たちあべこべに調伏せられたといふ逸話がある。けれども當時の地理を察するに平安京を出て東に向ふものは先づ一樣に逢阪の關を越えて、それから東海道に出るものは鈴鹿の關をこえ、東山道に出るものは不破の關を越え北越地方に行くものは愛發（越前）の關を越えたのだから、逢阪の關で關の東西を分けるべきではなく、鈴鹿の關こそはその分岐點であつたのである。吾妻鏡建仁二年「一幡に關東二十八ヶ國の總守護地頭職千幡に關西三十八ヶ國の地頭職を與へた」とある關東關西などこの原義によつてなる。又「あづま」もその地名の起りから嚴密にいふなら後の山東卽ち信濃・上野の境の碓氷峠以東といふことになる。日本書紀、日本武尊東征の處に「故因號二山東諸國一曰二吾嬬國一」とある。今日列車で新聞を買ふに名古屋以東で「朝日をくれ」といへば、だまつてても、東京朝日をくれるし、名古屋以西ならば「樣」「大阪朝日」をくれるが、名古屋ではきつと「東京ですか大阪ですか」と聞き返すから昔のことはいざ知らず、今日では名古屋を以て關東關西の分岐點とすべしだとは……よく近頃汽車旅行をし慣れた人のいふことだ　けれどもこれは古文の解釋には通用しない。（此等のことについては國學院發行の應問錄第二輯三一六―三一八にくはしい）いかこのあつゆき　伊香淳行とも伊香胡敦行とも書く。六位に叙

せられたといふ外、傳記は不明。思へども　あなたのことは深く心にかけて思つて居りますけれども、「思ふ」とか「思はぬ」とかいふのは今の「愛する」とか「愛しない」とかに當るが、尙又異性關係を放れてこゝのやうにもつかふ。身をしわければ　からだを分けるといふ譯にも參りませぬからサ　たぐへ　引き添はせ。

譯　（あなたのことは深く氣にかけて）思つては居ますけれども、身一つを兩方にわけることも出來ませぬから、目に（こそ見えれ私はこの）心をあなたの御からだに附き添ふやうにしてつかはしますよ。

雜　「心は二つ身は一つ」といふ場合友情の痛切さを身と心とに歌ひわけて辯解したもの、伊勢物語第七十八段に業平が雪の日惟喬親王を訪うて

思へども身をしわければめかれせぬ雪のつもるぞ我が心なる（六帖一雪にもある）

と咏んだのもこれと等類である。

あふさかにて人をわかれける時によめる　　なにはのよろづを

三七四　あふ坂の關しまさしきものならばあかずわかるゝ君をとどめよ

考　詞書　嘉「……わかれける時○よめる」

結句　相「君をとどめん」

雜　あふさか　逢阪とも合坂とも書く。近江國滋賀郡に在つて有名な古關である。日本書紀武内宿彌が謀を以て忍熊王の軍を討ち、逃ぐるを追うて此地で追ひついたので、敵にあふといふ義でその處が逢坂と名づけたとある

「……武内宿彌出二精兵一而追レ之。適遇二于逢坂一以破。故號曰二逢坂一」。

次に孝德紀大化二年の詔に幾内の境界を定めて「北自二近江狹々波合坂山一以來爲二幾内國一」とある。

次いで關所を置かれたのはいつのことかそれは不明であるが、文德天皇天安元年（一五一七）四月廿三日庚寅の日附でこの關を復活し、外に新たに大石・龍華の二關をおかれたことが記されてある。

始置二近江國、相坂・大石・龍華等三處之關剗一、分二配國司健兒等一鎮二守之一、唯相坂是古昔之舊關也、時屬二聖運一不問二門鎖一、出入無レ禁年代久矣、而國守正五位下紀朝臣今守上請加二二處關一、而更始置レ之也

そして河社一の二〇には此につけ加へて「相坂の關を始めておかれたるは桓武天皇奈良より都をうつさせたまひて後のことにや、古昔の舊關といへる詞は、奈良京なりける時よりの事ときこゆ」と謂つてある。

思ふに相坂の關は孝德天皇の大化二年始めて片候・防人・驛馬・傳馬・造鈴契等交通制度を布かれた中に關所のことをも規定せられたとあるから、その當時直ちに東西相通ずる咽喉の要衝地としてこゝに關所を置かれたものが、大和朝廷の時代にはあまり防備の要を感ぜられなかつたので自然廢關の有樣であつたものを、平安朝廷に入つて、俄かにその要を認め（例へば鈴鹿山の賊とか、蝦夷の侵入とか）當朝初期已に復活の形勢にあつたものを此際改めて明文にうたはれたものであらう。（あてにはならないが、和漢名所圖會や和事始は皆大化二年を以てこの關の起りとして居る）さてその關所の址は逢坂山の峠より少し東、上片原尼寺のほとりであるといふ（東海道名所圖會）中古以來盛に歌文に取材せられ、相坂の名を相逢ふ意に秀句にしたり、杉のむらたち、關の清水、蟬丸、關寺小町など一々枚擧するなら一部浩翰な相坂文學集が出來る位である。文字は始めは「逢坂」と書いたことは前掲書紀の本文によつて明らかである。人をわかれける　人に別れた「を」は古人のいろ〳〵の解があつて先方が動いてこちらがぢつとしてゐる時に「を」といつて、その反對の場合即ち先方はぢつとしててこちらが動く時に「に」といふのと區別する意だともいひ（眞淵）

おほさかに逢ふや少女を道とへば（紀十二）

のやうに相手もこちらも同時に運動する意の格助詞だともいひ（山田孝雄氏）いやさういふことはない唯普通「に」といふ處を往々「を」とした古格の體言助詞だから意味は「に」と變りがない（これが一番多い）とも謂ふ。元來「を」は處分性を持つた動詞とその動作を演ずる主體を示す名詞若くは名詞句との中間に用ひられる助詞（即ち處分語彼處分語のつなぎ）だから唯「に」といふよりは、一段と親密の感が多いと思ふ。なにはのよろづを　難波萬男、傳記未詳。關しまさしきものならば　關がサたしかに人をとめるといふ名の通りの

ものなら　あかずわかるゝ　まだ心ゆくまでに相見もしない中早くもわかれて行く。

語釈 逢阪で人とわかれた時によんだもの。(汝)逢阪の關よ(汝もし)逢坂の關といふ名の通り(實のある)の正しく(人をとめる關所である)ならば、あかぬ別れをして往かうとする某の君をとゞめてくれよ。

評 名詮自稱ゆくりなくも知人とこの關に往きあひ、二日三日のことゝひかはす際もなく倉皇として去らうとする友の袖をひかへてこの歌をよんだと想はれる。「まさしき」に逢阪と關と兩方をかけて「人に逢ふといふ逢阪の名の通りなら逢ふの反對の別れをとめようとも關といふ行人を止める場處の名の通りのものなら、我〇〇の君を止めてくれよ」と様に解いたもの(眞淵・宣長)は精しく味つて面白い解き方をしたものだが、一首を讀下しての感じをいふと、矢張他の諸註の通り、「まさしき」は關だけにかけた方が宜いことがわからう。その上逢阪は已に詞書にも斷つてあるのだから、そこまでこま〳〵とかけない方が宜い。道途邂逅の後の訣れに對し、巧みに處柄にふさはしい別辭を咏んだものである。

題しらず　よみびとしらず

三七五　から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべき物を

この歌はある人つかさ給はりてあたらしきめにつきて、としへてすみける人をすてゝたゞあすなんたつとばかりいへりける時に、ともかうもいはでよみてつかはしける

考 詞書 元・筑「みまさかのすけの門出しける所にて、わかるとて」

作者 元「讀人しらず」

二句 元・筑「たつとは聞かじ」

四句 清「おきてしきけば」

左註 元・筑「或人のいはく、この歌、つかさたまはりて、新しき女につきて、年經てすみける女をすてゝ、たゞ明日なむ立つといひたりければ、よみてつかはしけるとなむ」

語釈 から衣 「裁つ」から「立つ」にかけて枕詞においたもの、契沖が裁つたものは二つに別れるから、こゝも片々に別れることに寄せがあるといひ、又それを採つた註もあるがそこまで纖細に修辭意識が動いたものとは想はれない。たつ日はきかじ 御出發の日なんかは聞く耳を持ちません。今更御出發の日取を聞いて平氣で居られませうか 朝露の 露がおくといふやうに私をおき去りにしてといふその「おき」にかけた枕詞である。ゆけば 「ゆかれますからには」の意だが「ゆかば」と未然にした方がよささうだ。木下幸文がこのことをいひ出し金子氏も同意して居られる。けれど故中村秋香氏は矢張「ゆけば」を正しいとして

さて、此「ゆけば」を或る説に「ゆかば」の誤ならんといふは、よくも思はぬ説で、「ゆかば」は未然よりいふ詞で、此もとの妻を任國へつれてゆくかゆかざるか未定の時に於てもしおいて行くことならばといふ事ならば「ゆかば」ぢやなれども、これは已に捨置て、出發する事と決定しての上からいふものぢやから、ゆくことなればの意で「ゆけば」といふのぢや。

と説かれたのは精しくはあるが、作者は「そんなことは今更聞きますまい」と既定の事實を否定して、未然の形にしてしまつた續きだから「もしも私を置き去りにでもなさらうものなら」と矢張未然形を以てつゞくべき處だ。けぬべきものを 失戀の極絶え入つて死んでしまひませうのに……といふところを三句の朝露の縁語で「けぬ」とした。「きえぬ」の約である。「もの」は音調上入れた輕い語である。つかさたまはる 官を賜はる。任官の沙汰を承り、次の語句から察して地方官に任ぜられたものと想はれる。あたらしきめにつきて 新しい妻に思ひ移つて、新妻のお供をしてなどとらぬやうに、男の愛が新妻に移つたといふ意である。すみける人 つれ添うてゐた女、當時の風俗始めは夫の方から妻の家へ通ひ棲み、いよ〳〵夫婦の契が固まり子などが出來てから改めて夫の家へ妻を迎へ取つたので、「すみける」「通ひける」などいふ。ともかうもいはで 何ともかんともいはないで、前妻の思ひ餘つた情緒がよく表れて、韻文ではないが餘程強い句である。

評 (いよ〳〵あす御出發とか使のものが御たよりを傳へて來ましたが、妾はもう今更あなたの)御立ちになる日なんか聞きま

すまいよ。（そんなことを聞いて）わたしを置き去りにして往かれましたならば、（失望の極）露と共に消え入りませうのに。

評　この歌は或人官を拜して、新しくなじんだ妻に心移つて永年つれそうた元の妻を棄てて、元の妻の處へは單にたといふ。さては戀の怨みを訴へたもので、寧ろ戀の部に入るべきであるが、尙よく想ふにこれは文字の上の誇張で男も女も今ではきれいさつぱりと離れて、互に又別の愛人をつくつて居る矢先に男が赴任するといふので、流石に一言なかるべからずとして、形式的な別辭を述べると、女も亦以前が以前なので、通常の送別歌では曲がないと思つてこんな風の歌を送つたのではあるまいか。さうならこそ、これが一般別離の部にとり容れられたものではあるまいか。男の方から何とも云はないのを女が聞きつけて、咏み送つたといふのとは事態がちがふと想ふがどうか？

全體かうした男女が互に消息しあふといふことからが今日の常識から推しては解らないしかただが、それは王朝の男女關係が今日とは非常に異なつてゐるからである。

諷詠可なりに手嚴しくして而かも濫に至らず、語句の聯接優美にして且つ自然、よしやその女の容貌が少々醜からうとも、この一首によつて心にくい女性に想はせるだけの巧みさがある。

左註はそのまゝ眞實でないまでも、さうした事情の下に咏まれた歌であることは否まれない。行文は元永本のがすぐれてをる。

三七六　ひだちにまかりける時にふぢはらのき。みとしによみてつかはしける　寵

あさにけに見べき君としたのまねば思たちぬる草枕なり

考　作者　清「寵この本ナシコト本ニアリ無御本」一三「寵成本無此名」

初句　元（その他諸本）「朝なけに」

四句　元「思ひたちにし」

考　ふぢはらのきみとし　藤原公利、傳未詳。但本朝文粹三善清行が封事二箇條の始め地方戸口の疲弊を述べた一節に「去延喜十一年。彼國介藤原公利任滿歸レ都。清行問二邇磨郷戸口當今幾何。公利答曰無レ有二一人一」とあつて此集より後には備中介に任ぜられて居るから地方官階級の人であつたといふことだけは察せられる。寵　本集に三首採られて居る女流歌人だが、傳記がわからない。目錄に「大納言定孫從四位上行大和守精女也」とあり抄に「從四位上源精女」とあつて目錄には精のことは可なりこまかく書いてあるが、肝腎の本人の傳がない。否な傳どころかその名の訓みすらも穴冠だから「アナ」と云つたり字體が似てゐるので「寵」といつたり「寵」の訓の「ウツク」いや「嬖」だ「ロウ」だ「メグム」だ「ウツクシム」だと隨分まち〳〵であるが齋藤彦麿の說で、尾上柴舟博士や金子氏の採られた「クラ」といふのが宜いと思ふ。卽ち始め內藏といつて彼女の父兄が內藏寮に仕へた屬官であつた　で、その通名となつたものが轉々筆寫の裡に內と藏とが一字になつて果てはその形に近い寵の字を宛てたものであらう。この歌が「物名」の技巧に終始してある點から推しても「くさまくら」と我名の「くら」か咏みこんだものであらう。あさにけに　こゝは寧ろ「あさなけに」が流布本の形であらうと思ふが、余が見た定家本には「に」とあるし、道理上この方が正しい。「け」は來經の約で「朝にきへに」は朝毎に、毎朝々などの意である。萬葉に「日にけに」とあるのも同義で、後堀などにも　朝にけに」といふのがある。見べき君とし云々　「見る」とは前にも云つたやうに唯會つて顏を見るといふのでなく、うしろみて愛情かそゝぐことをいふ　愛して下さるあなただとは思はれませんから、そして「君とし」に相手の名　「公利」をもじつたもの。思ひたちぬる云々　思ひ斷ちぬる、思ひ絕ちぬる、思ひ立ちぬるの三つの中最後のものが宜しい。思ひ起して深く決心して出かけて行くのです「思ひたち」は常陸をもじつたもの、この今回の常陸下りは、草枕はこゝでは直に「旅」の實名詞の代りにつかつたもの、そして自分の「くら」を入れたことは前述の通である。

考　常陸へ下つた時に藤原公利によんでやつた歌、（都に居ましても）あなたが毎日々々私を愛して顧みて下されよう

とは思へませぬので、思ひ起して遠い常陸の國をさして旅立つのです。

評　一首の中に先方の名も自分の名も、お負けに旅行の目的地まで咏みこめながら、少しも不自然の嫌がないのは物名の上乘とも謂ふべき技巧歌である。が、之を以て「相手のもしやに惹かされて、日毎失戀の惱みを續け求めて東下りと決心し、決行はしながらも尙戀々の情を訴へたもので眞に斷腸の趣がある」ととるのは少し字面に拘はり過ぎた解であらう。世間の消息を絶たうとならば、東山・西山・鞍馬と都近い處にいくらも回避の場處はある。何を苦しんで殊更常陸を選ばう。思ふに彼女は始め公利に愛せられ自分としても此をこよなき戀人と思つてゐる中に、男の愛がさめたのでやむなく二の町の相手を極めた處が、その男が新たに常陸介か椽かになつて赴任するので、連れられて今や出發の間際流石に默しかねて、別れとも怨みとも戀ともつかぬ消息を送つたものであらう。名詞を咏み込んだりする處を見ると彼女は最早充分あきらめがついて、その餘裕から思ひついた歌だともとられ、この一首によつて公利がスハ一大事と行く手を追つて來さうにも思はれないし、追つて來たとしても彼女が、「では常陸行はよしませう」とよりをもどすやうな危險狀態でもないことを想はせる。彼の伊勢物語五十九段の

昔男ありけり。宮仕へいそがはしく、心もまめならざりければ、家刀自まめに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり。

とあるのを見ると、當時かうした地方下りもまゝあつたことと推せられる。

與謝野晶子夫人の歌に

鬼が住む東の國へ春いなむ除目に洩れし常陸介と

とある落選と都落との悲哀をこめたものだが、「除目に洩れし」といふ落選を「先夫の愛を失つた」と置換へれば丁度こゝの歌になる。

三七七　えぞしらぬ今こゝろみよ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと

きのむねさだがあづまへまかりける時に、人の家にやどりて曉出たつとて、まかり申しければ女のよみていたせりける

よみびとしらず

考　詞書　清「きのむねさたかあづまへまかれりけるときに（人ノイエヤトリテアカツキニ）いてたつとてまかりまうしければ……」

元・筋「紀の宗貞が、東へまかりける時〇人の家に宿りて、曉に出でたつとて、罷申しける。あるじの女のよみて出だしける」

二句　高野切・六帖四雜の思「今心みむ」（正義も此をとる）

三「よしこゝろみよ」（いせ　本同）

注　きのむねさだ　元永本・筋切によると紀宗貞とあるが傳記は不明　あづま　東國、三七四參照。まかりける時　行つた時だが前後の句意から「往かうとした時」の意と推測される。人の家　或人の家、女の家、なじみの女の家　まかり申し　「辭」の一字に「マカリマチシ」と訓みをつけた例もある。暇乞のこと。よみていだせりける　咏んで見せたもの、咏んで「此を」といつて示した歌、一說に取次の侍女をして見せさせたともある　作者の身分が不明だが、次の歌詞から察しては。人傳ならぬ別れの表白である。えぞしらぬ（あなたの仰せが本當か嘘か私には）わかりませんわよ。

今こゝろみよ　今に見てゐて御覽なさい　命あらば　（あなたにお別れしては、妾は到底生きる空はありませんが若しひよつとして妾の）命がながらへて居りますものなら、我や忘るゝ　御身（御自身）先づこの妾を忘れられるか（それとも又）　人やとはぬと　この妾の方が先へ（操をすてて心戀りして）御たより一つも碌々申上げないやうにならうか（どちらが事實であるかを今に御覽なさいまし）

譯　紀宗貞が東國へ往かうとしてその門出に、なじみの女の家に泊つて夜明け方に出發しようといふので、暇を告げると、女が咏んで彼（宗貞）に見せた（あなたの仰つしやることが本當か嘘かソリヤ妾には）わかりませんわよ（だが併し）今に御覽なさいまし、（妾はあなたに別れては生きて居れさうもありませんが）若し妾が生きながらへてゐましたならば、あなた御

自身が早く心變りなさるか(それとも)妾の方が早く操を破るやうなことになるかとサ……(妾の方から先へ心變りする樣のことは決して〳〵ありません)

評　餘情の多い點に於て優れて居る。この一首によつて作者は命死ぬばかりの別離の悲哀をも訴へ、別れて後の愛を裏切る樣の不節操は決してないといふ誓ひをもこめ、さういふあなたこそどうだか危まれますと對手の變心に對しても豫防注射をして居る。加之、このお負けに男が昨夜來女に告げた痴話口說は次の數句であることが自然と別るやうにもなつて居る。

「わたしは寂しい東の旅の空ででも、きつと御身のことを思つてそれを心やりとしてゐようから、御身もどうかそのつもりでゐてもらひたい。が、しかし人の心は秋の空御身は恐らくわたしの思ふ十分の一も酌んでくれないで、やがてあだし男に心を通はすやうなことにもならうかとそれが氣がゝりでならぬ……」

あひしりて侍りける人のあづまのかたへまかりけるをおくるとてよめる　ふかやぶ

三七八　雲井にもかよふ心のおくれねばわかると人にみゆばかり也

考　元「あひ知りて侍りける人のあづまに(清なし)罷れりけるを、おくり侍りとて」

二句　清・元・筋・高野切・六帖四別「深き心の」

四句　元「人にわかると」

語　雲井にも　「雲井」は「雲居」とも書いて雲ゐる(おちついてある)處、卽ち大空をいふ　遠い大空の涯までも　かよふ心　往き通ふ心　おくれねば　御身におくれないで後からついて往くから。

互に親しくして居た人が東國地方へ往くのを送るとて咏んだ、(御身を墓うては遠い)大空にも往き通ふ我が心のこととして(御身が出て行かれればいつもそれについて往つて決して)後れるやうなことはありませんから(今こゝでの訣れはたゞ)人目に(からだだけの別れなのが)「別れるもの」として映るまでのことであります。

評　心身二元を趣向立てて身は別れても心は蔭になり日陽になりしてついて行きせうといつたもの、「あひしりて侍ける人」といへばよく男女のことに用ひるからさう說いたものが多い。が、併し同性の友とてもこの程度の別辭はあつて然るべきだと思ふから、今はその語句の示す通り單なる「相識の人」としておいた。三六七、三六八などと併せて身と心とを別けて立意するこの節歌人の慣用手段を看ることが出來る。

ともものあづまへまかりける時。よめる(清に)　よしみねのひでをか

三七九　白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだくたび哉

考　詞書・作者　元「友のあづまへまかる時○○」　良岑秀岡」

結句　清・元・筋・相「くだくよひかな」

語　よしみねのひでをか　良岑秀崇、目錄によつて略年譜をあげる。

元慶　三、一〇、一〇、　文章生に補す

同　七、正、一一、　但馬掾

同　八、六、八、　治部少丞

仁和　四、二、一〇、　兵部少丞

寬平　三、三、九、　兵部大丞

離別　三七九・三八〇

寛平　八、　正、　七、　從五位下

同　八、　正、二六、　伯耆守

白雲の　二三句の序詞で同時に遠い旅路を匂はせたもの。本によつてはこれは二句を隔てて「立ち別れ」の「立ち」の序詞だとしたものもあるが、隔句の序詞煩はしい上に上三句は白雲の如く云々とからだをいひ、下の句は「ぬさと」といつて心をいつたものである。こなたかなたに　あちらこちらに、御身は東の天涯に在り我は郡の地角にありて互に遠く、立別れ「立」は接頭語　心をぬさと云々我心をまるで幣同様に千々に碎くことかな今回の御旅路は、幣は前にもあるやうに帛を小さく切り刻み之を道々の道祖神に手向けて旅の幸を祈るものだから、遠行の人を送る辭としてふさはしい譬喩である。

講　白雲のあちこちに立別れる如くに、私共御互のからだは今日から京とあづまに立別れ（なければなりません。それにつけても私の心は御身の旅支度にある）ぬさのやうに千々に碎くる思ひが致します。

評　結句「くだくよひかな」とある方が優れて居る。こゝの歌態は寧ろ出て行く人自ら訣れを惜しんだやうに聞える。

俚謠にいふ

離れ〳〵の浮雲見ればあすの別れもあの様に

とこゝの歌も亦同様白雲一片相距らば消息闃として、音容兩つながら接すべからずとの離情をその前夜あたりに咏んだものとして趣は一段と深いものがあらう。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける　つらゆき

三八〇　しら雲のやへにかさなるをちにても思はん人に心へだつな

考　詞書　元「みちの國へ罷る人につかはす」

二句　貫之自筆本（中村氏）「やへがさなれる」

講　みちのく　「道の奥」の「の」はn でOの韻がある上へ更に "Ōku" とつゞけるとOが二つ重なる處から一つ省いて「道のく」となつたものらしい。道とは山道のこと卽ち中山道のことそれより奥卽ち白河の關より北・磐城・岩代・陸前　陸中・陸奥・羽前・羽後の地方をいふ。但し當時はかうまで細分されないで大體陸奥出羽と分れてゐたらしい。で、道理上「みちのくの國へ」と謂ふべきだが「く」音が重つて句調が悪いから國は入れないで「みちのくへ」といふのが習慣のやうになつたもので、それはまだ聞えるが「みちのくに」では何としてもわからない。

しら雲の　こゝは實名詞である。白雲は遠く高くたなびくものとしてさうした想をこめて歌にするのが普通である。やへ　八重とはあてるけれども、七重より一重多い八重ではなく彌重といつて幾重にも幾重にもとの意である。をち　「あち」と同じで方向の遠稱代名詞だが「あち」は「こち」よりは遠いところから「遠」をもをちと訓む　思はん人　その時になつて御身のことを思ふ人こゝでは作者自身を指す。心へだつな　心だけはへだてなく今日同様あたゝかい友情を失はないで下さい。上句の「八重にかさなる」とかけ合ひに親疎を對照させた技巧が宜いと褒められて居る。

講　みちのくへ往かうとする人に咏んで贈つた、（御身は今し京を離れてはる〳〵とみちのくへ御こしに）なり白雲が幾重にも立ちへだてた遠く隔つた處にゐられましても、都であなたのことを思つて居る人に向つては心に隔てなくこれまで同様あたゝかい友情を失はないでゐて下さい。

評　文部省發行の小學唱歌集「螢の光」の第二部に

つくしのきはみみちのおく　海山遠くへだつとも

そのまこゝろはへだてなく　一つに盡せ國の爲め

とある落句は違ふが第三句までは丁度こゝの歌と同じ想である。又貫之が陸奥へ赴任する人に着物を餞した時の歌に

玉桙の道の山風寒からばかたみがたてちに着なんとぞ思ふ（新古今九の八五七）

といふなど、何れもあたゝかい友情の詩で、今日同窓の四方八方に別れる間際にかはす別辭を古典的な形で示したものである。で、形は古めかしいが想には不易の情味がある。

人をわかれける時よみける

三八一　わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらん

考　詞書・作者　貫之集「人に別れけるによめる」　元　筋切「人に別れ侍る時○○○○○　貫之」

六帖四別　同。

補　なし。

書　別れといふ事は「色」でもないのに(なぜに色の染みつくやうに)心に(深く)沁みついて(かう)淋しく悲しいのであらう。

評　繊細脈ふべき歌風である。四一五の「いとによる」以上に繁縟な譬喩である。

あひしれりける人のこしのくににまかりてとしへて京にまうできて、又かへりける時によめる　凡河内みつね

三八二　かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬなにこそ有けれ

考　詞書　元「或人、越にまかりて、年月をへてまうで來て、又かへり罷ける時」

二句　流布本の或もの「なにぞはありて」

三句　元「あるかゐは」　嘉「あるかひも」

補　かへる山なにそは云々　歸山とは何か？　それは云々であつたとの意、從來の諸註「何ぞはありて」とて何のありがひがあらうぞと樣にしてゐるが、これは文法上どうしても歸山とはなに？　と自問してそれは外ではない……であるとなるところだと見て行く中に金子氏のだけがさうなつてゐて自分も非常に心強く思つた。六一五に

いのちやはなに？　そは霧のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに

とあるのと同じ句法である。そはありてあるかひは　それは有つても有りがひとては……「ない」といふ代りに　來てもとまらぬ名たまさか京に來ても止まりもせずにやがて又越路をさして返るといふ名の歸山といふのでありましたれ。とつゞけたもの　ありてある。　かひの疊音が句調を滑らかにして居る。

書　知るべの人が越路へ往つて、永年たつて京へ上つて來て又越へ返つた時によんだ。(御地に在る)かへる山とは何を意味してをりませうか？　それは(あなたが早く都へ御かへり下さるよせとしての山の名だとばかり。此迄は頼もしく思うて居りましたのに、さうではなくて)あつてもありがひの(ない……イヤ有るにはあつても、その有りがひとては逆に)折角都へ來られても久しく止まりもせずに、又直ぐ越路へ返られるその爲めの歸山といふのでありました。

評　「たま〳〵御上京でしみ〴〵御話も伺ひたいと思つてゐましたのに、そのかひもなく早や御下りですか……てもあつけない御別れですこと」といふ程の心を、山の名の歸山を秀句につかつて「都へかへる」を餘情に、越路へかへる」を字面にして有りの反覆(有りは三つあるが三つが疊音と見るのはどうかと思ふ。第三の有りはずつと隔つても居るしその繋りもちがふ)を以て句調を助け、詞書の示すやうな一寸手の込んだ離別の想を何の苦もなく歌ひしらべたもの、老練な歌ひ振である。

こしのくにへまかりける人によみてつかはしける

離　別　三八二・三八三

三八三　よそにのみ戀やわたらん白山のゆきみるべくもあらぬ我身は

考　詞書　元「越へまかりける人に○○○○○○○○」
作者　元・筋切「ミツネ」
結句　元「あらぬわが身を」

講　よそにのみ戀やわたらん　その地へ行くこともならず唯よそに戀うてばかり暮らすことでありませう。「のみ」は戀ひわたるのみと下につくもの。「わたらん」は年所を經過すること。白山　しらやまと訓むが今日では「はくさん」と音でいふのが普通である。加賀國能美郡の東南隅に屹立して海拔八千六百八十一尺、多くの峯々谿々がある。毎年七月十八日より山開きとなり九月一日に閉ぢる。餘談にわたるが加賀出身の三宅雪嶺・肥後出身の德富蘇峯二氏は各々その國の名山白山と阿蘇が峯を具現したやうな性質の人で、共に現代文化の先達であるといはれて居る。雪嶺の號もこの山から來たもの、木集にもまだこの山の歌があり、枕草子「雪の山」の賭けをするところに淸女が雪の山が猥言した日まであるやうにとて「白山の權現これ消させ給ふな」と祈るところがあるなどこの頃から盛に文學作品に取り容れられた。さて「白山の」は雪からかけて「往き見る」を誘き出すための序詞としておいたので　北越地方有名な山であるだけにこの序詞はうまく出來て居る。一說白山の　雪見る　といふやうに白山のある越路へ　往き見る　と「白山の」を通常句として「ゆきみる」を秀句と見たのは宜くない。ゆきみるべく　の「べく」は可能の助動詞で下へつゞいて往つて見ることが出來さうにもないとなる。

講　越へ往く人に咏んでやつたもの。（御身の往かれる越路の名山の）白山の「雪」といふやうに往つて見られさうもない私は（唯御身をば遙の）よそに戀ひ（したふ）ばかりで暮らしませう。

評　白山を秀句につかつたのが技巧の一節だが、あとは凡て實感を盛つたもの。官途にさへられ、事情に障られていくら懷しくも後を慕ふことの出來ない訣れは實に昔も今も同一轍で、今日と雖も一家の主婦、さらでも一般婦人の離別の情は此と少しも變りはない。戀歌ではあるが新古今十一戀の部一の九九〇

題しらず　讀人しらず

よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山のみねの白雲

といふのと酷似した詩形である。（但その着想、これは熱烈な思慕を含んで居るのに、新古今のには寂しい諦めが落想になつてゐる點が違ふ）

音羽山のほとりにて人をわかるとてよめる

三八四　音羽山こだかくなきて郭公君がわかれををしむべら也　つらゆき

考　詞書　貫之集七「音羽の山のほとりにて人に別るとて」
結句　三「をしむべらなる」日三本
六帖四別・新撰　同。

講　音羽山　一四二參照。こだかくなきて　木高く啼きて「木立高くないて」ととるか「梢高く啼いて」とするかだが、木立高くはとりも直さず梢のことになるから後の方が宜い。それを「こだかく」の「こ」は接頭語と解いたのはよくない　一四二の音羽山に「…遙に今ぞ鳴くなる」とあるあのいひ方とも近い。隨て「音羽山」の「音」が「高く」に響くといふ解も採らない。但「高く」が下の「啼く」にはひゞいて居る。君がわかれ　君が遠行の門出　をしむべらなり　惜しむべくあるなり。惜しんで啼いてゐるものの如くに聞えますよ。

講　音羽山のあたりで人にわかれるといふので咏んだ。音羽山の梢高く音をたてて（アレ心なの）郭公までもあなたに御別れすることを惜しんで居ますやうですわい。

離　別　三八四・三八五

評　無情の郭公を借りて有情の離愁を反映したもの、卽ち「郭公ですらもあの通りですからまして私の胸中は如何ばかりか？　お察し下さい」といふのが餘情である。貫之の作としては比較的小技巧を弄しないでスラリと咏んだものでその點は宜しいが、この種の立意は和漢古今の通想で新しみは缺けて居る。それに詞書に「音羽山のほとりにて云々」と已に場處を斷りながら歌の方で又「音羽山こだかくなきて」とあるのも重複の嫌がある。

藤原のちかげがからもののつかひにながつきのつごもりがたにまかりけるにうへのを
のこどもさけたうびけるついでによめる

三八五　もろともになきてとどめよ蛬秋の別はをしくやはあらぬ　ふぢはらのかねもち

考　詞書　元「……たうべける……」

補　藤原ののちかげ　一〇八參照。からもののつかひ　唐物の使、筑紫へ舶載した唐・高麗・百濟などの商船の貨物を檢査する爲に朝廷から派遣せられる使のことで、室町時代唐物奉行の前身に相當する。三代實錄・千載集・敦忠集等の詞書に散見して居る。竹取物語に火鼠の裘を涌戴したことを筑紫の國司がしらせる所も、大體這般の有樣を模したものか？　とにかく筑紫は當時我邦が新文化を見るレンズのやうな觀があつたらしい。ながつき　長月。陰曆九月　うへのをのこども　殿上人たち。たうび「たまはり」の約　たまひ」それを音便にして下を濁つて「たうび」としたもの、たうべ　とてもたまはりの意、要するに酒を賜はつてそれを飲むこと。俗言に飲食することを「たべる」といふもこれの轉化である。ふぢはらのかねもち　藤原雅茂、內舍人良門の孫、右近中將利基の第三子で寬平年間讃岐權掾を振出しに延喜廿三年正月十二日參議同廿一日左兵衞督に任じ、同二月中風症に罹つて同三月七日に薨去とある。もろともに　蛬と我々ともろともにの意。なきてとどめよ　啼いて（泣いて）引きとめよかし（何をか）　秋の別　九月晦と云へば秋の最終の日であるから「秋」との別れといふ意がある。それを「秋に於ける俊蔭との訣れ」と旁句にしたもの　をしくやはあらぬ「やは」は反語惜しくないことがあらうか。實に惜しむべきの至ではないか。

置　藤原後蔭が唐物の使として九月の晦日頃に出發しようといふので、殿上人たちが送別の酒を戴いて（後蔭が始め一同）飲んだ時（その席上で）咏んだ。（オイ）蛬よ吾々と諸共にないて引留めよかし、その方だつて秋との別れは惜しくないことはあるまい吾々がこの秋の暮に、後蔭に訣れる名殘惜しさも同じで、（離れの相見互といふものだから吾々のこの心持に同情をよせて泣けかし）

評　歡を盡して滿座陶然たるの時、會々殿上近き牀下壁間若くは壺前栽のあたりで蟋蟀の音をきいて、惜別の情と秋盡心持と蛬とを駄して一丸とした佳咏で輕快な卽興的なところが宜い、個人的な離愁でないから「なきてとどめよ」といふも先づは座興の精煉せられたものと評すべきで眞摯熱烈の味はない。

三八六　秋霧のともに立出てわかれなば暗ぬ思ひにこひやわたらん　平もとのり

考　作者　元・筋「友則」　古典本「平元矩」

二句　高野切「ともにたち〇でて」

結句　清「もへやわたらん」　筋「もえやわたらん」　元「も〇やわたらん」

平もとのり　平元規、中興の男寬平九年七月…日非藏人として昇殿、右馬權少允、同權大允、左兵衞少尉、同大尉を經て延喜六年正月廿三日藏人に補せられ、同八年正月七日從五位下に叙せられた　こゝの作者「友則」とあるものは「もと」「とも」假名の相似から來た誤であらう。友則は地位卑く殿上對答の交らひは　なかつたと想はれる。秋霧のともに立出て　秋霧のたつと共に我が後蔭の君も出發せられて、「秋霧の」といふと下に「如く」とつゞけるのが普通だが下が直ぐ「立出て」ならばそれでよろしいけれどもこゝでは

少し不穩當である　又秋霧を主語にして「秋霧が御身と共に立ち出て……」とも解し得ないではないが、矢張聯接がよくない。更に又御身を主語にとつて「御身が秋霧の伴侶になつて立出て」とも解き得るが矢張拙い。尙又「霧」はつけたりで「秋の暮れる」ことを主にしたと解いたものも宜くない。この一首はいはば霧で仕立てられた態である　晴ぬ思ひ　霧の緣語で、君と訣れていつも悒々鬱鬱としてとの意、「思ひ」の「ひ」を「日」にかけたと見るのは穿鑿に失する。

評　同じ時によんだもの。秋霧がたつと共に御身も御たちになつて(あと)わかれ(わかれに)暮らすやうになりましたならば私共はいつもあの霧同樣晴れぬ思ひに御身を戀ひ〳〵日を過ごすことでありませう。(眞にお名殘惜しく存じます)

評　前のが蕉を戲うたから趣向をかへて秋霧をとり容れて別意を叙したもので、霧は當夜の實景とよりは寧ろ秋の景物として引合はせに出したものであらう。これも即興の巧緻さが一得である。但餘情に乏しくて、何となく誠意のない送別會の挨拶といつた風の味がする。此から脫化したと想はれるものは金葉六の三六六

百首の歌の中に別の心をよめる　藤原基俊

秋霧の立別れぬる君によりはれぬ思にまどひぬるかな

源のさねがつくしへゆあみんとてまかりける時に山ざきにてわかれをしみける所にてよめる　しろめ

○

三八七　いのちだに心にかなふものならば何か別のかなしからまし

詞書　元「源實が、筑紫の湯に○○○○まかりける時○、山崎にて、わかれ惜しみける○に○○○○」

結句　六帖四別「かなしかるべき」

新撰　同。

題　源のさね　源實、參議左衛門督舒の二男、日錄に

元慶　四、正、一一、　左兵衛少尉

寛平　三、　藏人

同　六、正、七、　從五位下

同　九、七、五、　左近衛少將、藏人

同　九、七、一三、　從五位上

昌泰　二、正、一一、　信濃守

同　三、9月9日、　薨去

つくし　筑紫、九州地方の總稱、筑後風土記によると筑紫と名づけたいはれが四種ある。

一、地形が木兎に似てゐるから、「つくとりの島」を縮めたもの。

二、山地が多くて、馬で通へば鞍が磨り盡くから。

三、昔筑前・筑後の國境あたりに惡神が棲んで人をとつて喰つた此神を「人の命の盡しの神」といつた。その神名が地名になつた。

四、惡神の爲めに殺されたものを葬る爲めに棺の用材を伐つて山の木も盡くるばかりであつたから

右の中第一の「つくとりの島」といふのが稍や聞えるが、あとは無稽の傳說である　ゆあみんとて　入湯の轉地療養をしようといふので、九州に良い温泉があつて、その湯に入らうといふので　山ざき　山崎、山城の國乙訓郡にあつて攝津・河内との境目に當る。嵯峨天皇が、離宮(河陽宮)を置かせられた頃から聞え關所もあつて京から　海へ行く咽喉の要として、王朝時代よく出て居る。四宮左大臣の左遷、菅原道眞の貶謫何れもこゝに別離の記事があり、後世に至つては豐臣秀吉が主君信長の復讐戰に勝敗の決をとつたのもこゝの天王山といふのである。又室町期の連俳で聞えた山崎宗鑑の閑居したのもこゝであつて、何かにつけて國交や國史と交涉多い土地である。今は鐵道東海道線が通つて居り　關所の址と覺しき村の西端には關戸神社といふ祠がある。しろめ　白女、日錄に大江

玉淵女云々遊女也任(住歟)摂津江口遊云々。尊卑分脈、大江氏系に「平城天皇皇子阿保親王孫、參議左大辯音人(號江相公)子日向守從四位下玉淵男、朝綱、參議正四位下(號後江相公)女子白女古今集作者」とある。すれば朝綱の實妹であるそんな歴とした家柄の子女がどうして遊女にまでなり下つたか、當時の遊女といふのは社會的に觀てどんな地位にあたものか、或は尊卑分脈あぐる所の白女と、遊女として傳はつてゐる白女とは同名異人なのではなからうか？　此等は猶考究の餘地があるが大鏡・大和物語などでは、亭子院に召されて歌を奉つた記事があつて次に大江の玉淵が女といふのが出てゐる。

（大鏡の卷末の方の古物語の處に

亭子院の河尻におはしまし〻に、白女といふあそびもの召して、御覽じなどせさせ給ひて「遙に遠く候ふよし、歌につかうまつれ」と、おほせ事ありければ、よみて奉りし、

はま千鳥とびゆくかざりありければ雲たつ山をあはとこそみれ

いと、いみじうめでさせ給ひて、物被けさせて給ひき。「命だに心にかなふものならば」も、この白女が歌なり。

と大和物語百四十段も略此と同じである）

いのちだに云々　命さへ自由にいつ〳〵までも長命出來るものでありますならば、何か別の云々　今日のお別れを何悲しみませう悲しみは致しませぬ。

語釋　源實が筑紫へ入湯に往くとて出かけた時、山崎で名殘を惜しんでそこで咏んだ。命さへ自由に出來ますものならば(今日の)お別れを何悲しみませう　決して悲しみはしませぬ。（けれども人の命は、今日あつて明日はかられぬものと聞いてゐますし、妾はあなたに別れては迚も生きて居られさうもありませんから、矢張このお別れが悲しくてなりませぬ）

評　「別れは逢ふの始めでありますから、五年十年いつ〳〵までも長らへて居られますものなら、妾は力を落さないであなたのお歸りをぢつと待つてゐませう。なれども妾の今の思ひでは到底生きる空がなささうですから、生別はやがて死別とばかり悲しくてなりもせん」との意、辭氣悽艶斷えんとして纒にこの語をなすといふ趣が殊に宜いし、語句に少しの無理がなくて而かも一讀强烈な刺戟ある着想である。この部中上乘の作である。けれども正義や中村氏の註に「思ふにその人多病な爲めであらう」などいふのは野暮な解釋である。社交慣れた彼女が口前のよい別れのお世辭とつて略妥當であらう。（但し實と彼女との關係が非常に深かつたといふ確證があるのなら、これはお世辭處か衷心の悲痛の表白である）

一體あそびめといふものは早く上代からあつたもので、萬葉に所謂「遊行娼婦」といふのがそれで可なり多くの秀歌を遺して居る。それから當朝のあそび女、王朝末期江口の遊女、更科日記あたりに出た山姥、西行と問答したといふ遊女、鎌倉・室町期の遊君、近世の傾城妓女現代の文學藝者とずつと見渡すと「遊女文學」なるものも裕に研究の一題目とならう。（遊女文學については最近高野辰之博士が雜誌「國語と國文學」に寄せられた面白い論文もある）

山ざきより神なびのもりまでおくりに人々まかりてかへりがてにして別れをしみける（渋れは）によめる

源　さね

三八八　人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなん

語釋　詞書　元「……「して」……「よめる」の二ケ處なし」

結句　新撰「いきかへりなん」

神なび　通常は大和のそれをいふのだが、此は山崎の南手、向日明神の祠の後手の今「かうなびの森」といつて居るのをいふ。源され、前の註參照。人やりの道　人が遣るところの旅路、他から强ひられて餘儀なくする道中、たとへば官命で出張するとか、左遷せられるとか　大かたは　大概ならば、大抵のことならといふのが普通の解だが、中村秋香氏は

「大方は」といふ詞は、今「一向に」といふ意ぢや……此歌古來の解釋いづれも當らない、といふは「おほかたは」といふ詞を說き得な

いからの事で、此詞は今は大概又は多分などいふ事に用ひられて居るが、古くは「大方は」『大方の」又は「大かたに」など、はのに など受ける辭によりて意味が少しづゝ變ることで「おほかた」といひ「おほかたは」といふは一向、一向にといふ意に用ひられたも のぢや。此集戀に「おほかたは我名も湊」雜に「おほかたは月なもめでじ」其外「おほかたは」とあるはすべて一向にとしてみれば 意味がよくわかるぢや。

と、如何にも精しい説でばあるが、「大かた」といふに「大略」の意のものと「一般を通じて」の意のものとあつて、こゝはその前の部に 入るべき大方で、あらまし、大まかにの意であるから、余は「大がいならば……」といふ漠たる口實の下に」と譯しておく。いきうし 往き憂し、往くのに何となく氣が進まない……といふ心地。いざ　率(いざ)郎ち誘ひ催す副詞サア。

語釋　(見送の)人々が山崎から神なびの森まで送つて來て歸りにくさうにして別れを惜しんだので咏んだ。人に云はれ て已むなく行く旅ではなく(元々自分一手の湯治保養　旅だ)のに(そんなに皆さんが別れを惜しんで下さるなら、いつそ)何だか 往くのが嫌になつたと樣の漠とした口實のもとに、サア〈一緒に都へかへりませうよ。

評　別れに臨んで見送りの一行に厚い感謝を捧げたいといふのが主想で、無論この字面通り本人が都へ引き返しなど はしないのである。已に山崎まで見立てることすら並ならぬ手厚いことだのに、まだゾロ〈とその南手の山までもつ いて來てくれたので「これではお訣れのしほがありません」といふ處から強い感激を盛つたもので、相手の中には勿論 「命だに」の白女なども意中大きく寫つての作意であらうが、表面は見送りの一行に對して慇懃なる謝辭別辭を歌つたも のである。

「大方は」を誤つて「大抵のことならば……といつて引きかへしませうが、これは並大抵の旅でなく、我と自ら思ひ 入つての温泉行であるからさういふ譯にも行かず、まことに名殘惜しいことです」などしたものは非常なひがことであ る。

三八九、　したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず

今はこれよりかへりねときねがいひけるをりによみける(清め)　藤原かねもち

考　詞書・作者　三「……かねもち」
元・筑「甘南備の杜にて、今は○○○○かへりねと、さねがいひければ○○○○○○　○○兼茂」
二句　元・筑「きみに心の」
藤原かねもち　三八五參照。したはれて　我心ながら我と制しかれて御身が慕はれてならないので　きにし心の身にしあれば 二つの「し」は何れも強意の助辭、「心の身」とは心の支配に屬する身、心につれてやつて來たこのからだですから。愚考こゝは非常に たるんで拙い句である。或は作者は「心のみにしあれば」唯一その心で一杯ですからと樣の秀句として殊更こんなたるんだ言廻しを 用ひたものではあるまいか？

語釋　(同じ時)もうこゝからお還り下さいと實がいつた時によんだ。とかくあなたが懷かしい一杯でこゝまでついて來 たこのからだのことですから(往くさの道はわかりますが)還るさの方は(どう行つて宜いのか)道もわかりません。

評　挨拶としては整つてをる。「聽く耳持たぬ」といふ代りに「歸る足は持たぬ」と樣の世辭である。が何しろ調た るみ餘韻乏しく詩味がうすい。

三九〇　かつこえてわかれもゆくか相坂は人だのめなるなにこそ有けれ

藤原のこれをかがむさしのすけにまかりける時に、おくりにあふさかをこゆるとてよみける(清なし)　つらゆき

考　貫之集　「藤原のこれかがが武藏介になりて下るに逢坂の關こゆとて」

離　別　三八九・三九〇・三九一

詞書　元・筋「藤原これたか○武蔵介になりてくだりける時○○○○○會坂までおくりてよみける」
嘉・最後の「よみける」の四字なし。

三句　元・筋「會坂を」
六帖・別・新撰　同。

補　かつこえて一面には惜しみて引きとめつゝあるのに他の一面では關山をこえて、これが普通の解と思ふが愚考では且つは「別れ」と「逢ふ」とのかけあひで　方では、人に逢ふといふので逢坂と呼びなして居るのに片一方では別れてお下りになりますといふ「かつ」ではあるまいか　わかれもゆくか　「も」と「か」は感歎助辭、マア別れて行かれますとは下に「さては　など補つて次へ續く。　人だのめなる　「たのめ」は「たのませ」の約で、人に「頼もしく思はせ」の意だが、多くの場合「空だのめ」と同樣「頼もしく思はせておいてその實頼もしからぬ」場合につかふ。

評　藤原惟岳が武藏の介になつて赴任した時に、見送つて逢坂の關を越えるとて咏んだ。一方では名殘をしみつゝその片一方では(早や關山をこえて)別れて行かれますとはナア、(さては)逢坂といふ名は(唯徒に)人に頼もしがらせの空しい名であるといふことを(今日私はつくゞ感じます)

評　「逢坂」といふと「人に逢ふ」といふにかけるのが當時の歌人の常であるが、その中ではその口調が自然なのが宜しい。着想に於ては何の新しみもない。

おほえのちふるがこしへまかりけるうまの餞によめる

三九一　君がゆくこしの白山しらねどもゆきのまに〳〵跡はたづねん　　藤原かねすけの朝臣（三清たし）

考　詞書・作者・筋「大江千古が、隱岐へまかりける時、馬のはなむけによめる　中納言　兼輔」

尙元永本は「大江千里云々」とある

補　おほえのちふる　大江千古、音人の子で千里の弟に當る。後には從四位上伊豫權守式部權大輔などに補せられたがこれはそれ以前のこと。藤原かねすけ　兼輔、一五三七―一五九三元慶元―承平三、五十七歳、醍醐・朱雀の朝に於ける歌人で、右近中將利基の第六男地位は從三位中納言、邸が賀茂川堤に在つたので堤中納言ともいふ。歌は本集四首後撰集に二十餘首採られその他代々の勅撰集に採られて居る、家集に兼輔集（又權中納言兼輔卿集ともいふ群類二三五、九、一六七―一七五、續國四二二―四二九）。こしの白山しらねども　越路の白山はまだ行つたこともありませんが、「しらやま」といひ出して「しらねども」と承けた聲音の承接がさらりとした音調で宜しい。ゆきのまに〳〵　白山に雪があるその雪の中に御身が足跡を印せられる。その雪にまかせて、跡はたづねん　あなたの後をしたひませう。あなたの雪の中の足跡をたどつて參りませうといふ秀句「跡は」としたのは初句「君がゆく」と相俟つて外ならぬあなたの行かれるそのあとといふのですからと樣に先方によせる好意を響かせてゐる。

補　大江千古が越路へ往く時餞別として咏んだ。御身が往かれる越路には白山といふ名山があります。その白山は知りませんが、(雪の多いところと聞いてゐますから)雪の中に足跡をのこしてあなたが往かれましたならば、それに(惹きつけられて)御あとをしたうて私も往きたい(位に思つてゐます)

評　越へ往くといふにつけて虎の名山白山をとり出し、白山といふにつれて「しらねども」と同音をたゝみ次に白山の緣語で「雪」とつゞけ「雪」の秀句で「往き」をかけ、結局御身のあとを尋ねようとの懷慕に落したもので、語句の聯接即興とも思はれぬ程達者に出來て居るが、併し畢竟これ輕いユーモラスを盛つた洒々落々の訣れで、「跡は尋ねん」と謂つてもその人衷心さる熱意ある譯でもなし、眞摯な趣には缺けてをる。

「越の白山」は知らぬが今日以後は遙々尋ねる氣になつたといふことは、一種這般人情の公式を示して居る。相手の

人を中心にして此迄無關心に看過した土地が深い關心性を帶びて迫つて來るのは、古來普遍の人情でなる。熊本といひ臺灣といひ大連といひ倫敦といふ。十年の昔それ等の土地に如何樣の變事があらうとも、平然とすまして居られた身も熊本出身の先輩が出來、臺灣に嫁いだ從妹が有り、大連に就職した卒業生が有り、倫敦に留學した同僚があるやうになると、一寸大水が出るとは〇〇町の邊はどうだつたか知ら、一寸暴徒が起きるとは臺北のあたりはどうだらう？　と所謂雨につけ風につけ人事と天變の時折毎に氣遣ふやうになるのが人情で、この點から見てはこの歌の想は相當人情味を含んで居る。唯それが稍誇張し過ぎた爲めに又洒落を含んだ爲めに、輕佻の氣味に墮ちてゐるのが惜しいと思ふ。

人の花山に詣でて夕きりつかた歸りなんとしける時よめる　僧正遍昭

三九二　夕暮のまがきは山と見えななんよるはこえじとやどりとるべく

考　詞書・作者　遍昭集「同じ山に人の入りて夕方罷り歸りなむとせしかば」

清「……ゆふ〇つかた……時によめる」

元「人の華山にまうで〇て、ゆふ〇〇つかた歸らむとしけるに〇〇〇　遍照」

二句　遍昭集「離は山も」

三句　高野切・(イ本)古典本・顯「見えぬかな」

清「みえぬかな」頭に「普通はみえななむ、御本にもみえぬかな」

元・筋「なりなゝむ」

六帖二・まがき・新撰　同。

室　花山　山科の元慶寺卽ち作者遍昭の住持してゐる寺、尙一一九參照。まがき　繼體紀には蕃塀とあて後世では間垣とも馬垣とも籬とも書く。元柴を以て結ひめぐらした疎ちな垣をいふ。後轉じて一般に垣をいひ、殊に垣を美的にいふ場合に「まがき」といふ氣味がある。それは「眞」といふ接頭語を垣につゞけたもので本來は語義が別なのが混用されてゐる。見えなゝん　「なん」は希望助辭で見えてほしい見えれば宜いに。

講　或人が花山寺へ參詣して夕方歸らうとした時によんだ。夕方の籬は(いつも)山と見えれば宜いものを……(あゝこりや山ぢや夜は越されないから)よさうといつてこの寺に泊るやうにサ。

評　上の句は稚想の警句で、下の句はそれに對する說明となつて居る。多分は歸らうとする先方の人にあてて咏んだもので、住僧としての愛想を面白く風流に述べたものである。籬を山と見たてたもの、卯の花垣などには類例もあるが、單なる籬としては例が少いが、花山寺の寺山は木立がこんもりとしげつて庭の垣一重外は本當に山といつても宜さうな有樣で、お負けにそれに夕靄がかかつたとなつては「山」の思ひつきも强ち突飛とは謂ひ得ないものがあつたらう。ともあれ、還向の途につかうとする人に向つて「まことにお名殘惜しい」といふことを例の遍昭式で、をかしみと輕味を交へて好意深く歌ひ得て居る。だが併し、自分としてはこの僧正の今一つ此と同一歌境を取扱つた次の歌の方がしつとりと落ちついて好ましいと思ふ。

まてといはゞいともかしこし花山にしばしとなかん鳥のねもがも

尙思ふに、この部に入つたものは所謂訣別といふ永のわかれの名殘をしさを歌つたものばかり入れた方がよからうのに、この歌を始め以下の數首にはホンの一時の別れを歌つたものが入つて居るのは少し飽かぬ心地がする。

三九三　わかれをば山の櫻にまかせてんとめんとめじは花のまに〳〵

山にのぼりてかへりまうできて人々別れけるついでによめる　幽仙法師

離　別　三九二・三九三

考　詞書・作者　元・筋「比叡の山にのぼりて、歸る人を惜しむとて　律師幽仙」
二句　六帖四別「峯の櫻に」
三句　元「まかせ〇む」
結句　六帖四「春のまに〳〵」
新撰　同。

説　山　比叡山、延暦寺をいふ。山は延暦寺寺は三井寺祭は賀茂と當時の通名になつて居つた。幽仙法師　目錄に右近將監宗道の一男で贈太政大臣總繼の孫に當る。寛平二年十月二日權律師となり延暦寺に居る。時に年五十五歳同七年十月律師に任じ昌泰三年二月入滅する……と、尙晩年即ち昌泰二年十二月十四日には仁和寺の別當にも任ぜられて居るから、眞言僧のやうにもあるが出家の始めは慈覺大師の戒を受けたもので、元來は天台僧でたま〳〵仁和寺に緣故があつたので別當に任ぜられたものであらうといふ。契沖・眞淵などの説明では當時（卽ち權律師・律師時代）彼の坊は近江の西坂本にあつたものだと、如何にもさうとればこゝの詞書はよくわかる。尙彼が律師になつた時のよろこび申しの歌は兼輔集に出て居る。わかれなば　「別れることを」だが尙くはしくいへば、こゝで一同が散々に別れて歸らうかそれともこの坊に泊らうかといふことは　山の櫻にまかせてん　この「山」とは現に作者の住まつてゐる坊附近のこと、別れることの可否をきめるのはそりやこゝの櫻にまかせておきませう。とめんとめじは花のまに〳〵　諸君を引きとめようか、それとも引きとめないでおかうかといふことは花の心まかせにしてサ。

講　延暦寺に上つて還向して人々が別れ〻（歸途につかうとした）時に咏んだ。（只今）別れること（の可否はこゝの）山の櫻に一任しませう。諸君を留めるなり、又留めないでかへすなりは花の了簡まかせに（まさかこの花を見棄てて歸るやうな無風流な方はありますまいよ）

評　主僧たる彼が名殘をしさの餘り、折柄咲きさかる櫻を味方として相手の風流心に訴へ、「拙僧の拙い接待はとにかく、この花に背いて歸る法はなからうではありませんか」と面白く引留めたもので、世捨人とは云ひ條なか〳〵隅にはおけない辭令でこれなら「人には木の端のやうに」は云ひおとされないであらう。婉曲なる善誘の好咏と謂つて可い。

三九四　山風に櫻吹まきみだれなむ花のまぎれに立とまるべく

考　詞書・作者　遍昭集「雲林院のみこひえの舍利會にのぼりて歸り給ひけるに」
元「雲林院の親王〇舍利會に、比叡にのぼりたまひて、かへりたまひけるに、櫻の木のもとにて〇〇〇　遍照」
「山」を「比叡」としたものは外に筋切、高野切などがある。
結句　遍昭集「君とまるべく」

説　うりんゐんのみこ　雲林院親王、仁明天皇の皇子常康親王をいふ。雲林院は山城國愛宕郡紫野に在つて、元は淳和天皇の離宮であつて紫野院と謂つたのを、天長九年雲林院と改稱し、この親王が傳領せられ、親王御出家の後、作者遍昭に附屬せしめて寺とせられその遍昭が元慶八年に奏請して、自分の住持する元慶寺（卽ち花山寺）の別院とした。後に村上天皇の御代には別院として塔など建てられたし、こゝの書提講のことは大鏡の發端にも出て居る。舍利會（しやりゑ）　舍利は梵語シャリーラの譯で支那で、骨身又は靈骨と譯し釋迦の御遺骨をいふ。が、こまかくいふと法苑珠林などにあるやうに

骨舍利……白舍利　　髮舍利……黑舍利
肉舍利……赤舍利

の三種がある。これを祭る佛會を舍利會又は舍利講といふ。我邦では傳敎大師が支那から將來した佛舍利を叡山に安置し、之が法會は貞觀二年から始まつたが、こゝのはその後三代實錄第十三卷にもある。貞觀八年六月廿一日のことであらうといふ。山風に　比叡

山風によつて　櫻吹まきみだれなん　櫻の花吹きまぎれて亂れちれば宜いと思ふ。この上の句は自他が混同して居る。

山風は櫻吹きまき亂さなむ

と他動で一貫するか

山風に櫻ふかれてみだれなん

と自動で一貫しないと不明瞭な譯だが、誤解を起す程のまぎれでもないから修辞の難にはなるまい。花のまぎれ　花かちつて家路がわからなくなるその紛れに　立とまるべく　歸ることをよして御身がおとまりになるやうに。

評　雲林院の親王が舍利會に叡山へ御參拜になるのでお供をしていつて還向道で、櫻の花のもとで咏んだ。（この美しい）櫻の花は（いつそ）山風に吹かれて散らされて亂れれば宜いと思ふ。すればその花吹雪のまぎれに（家路が知れぬとて）我が雲林院の親王も御留りなさらう。

評　詞書は元永本の方が優つて居る。でないと、このまゝならば件の舍利會はこの親王が御主催で、還向道では作者は他の知るべの人々（無論幽仙などもあるにはあるが）と同道したやうにも誤解される。

時雨とは千種の花を散りまがふ何ふるさとに袖ぬらすらむ

と後少將義孝の咏の如く、極樂淨土は紅蓮大紅蓮の多くが散り亂れて美しいと佛說にあるから、舍利佛の歸りの櫻花の咲き盛つて居る有樣はさうした緇徒者流の聯想から見ても面白いものがあらう。そこで同じくは、この景を今暫らく共にめでばやの感に堪へずしてこの一首となつたものと思ふ。前にはとめんとめじを櫻にお預けとして、櫻を大切に梢に咲かせて名殘惜しさを歌ひ、玆にはいつそ一思ひに散れといつて同趣の情趣を歌つたのも面白い。が、共に一時の離情を誇張した爲めに感味はうすい。

三九五　ことならば君とまべくにほはなんかへすは花のうきにやはあらぬ　幽仙法師

考　作者　三「幽仙法師三本同」

評　ことならば　かくとならば、こんなことなら、この詞八二にもあつた。　にほはなん　思ひきり美しく咲いてもらひたい。「にほふ」は香のことではなく美しくはえること（その中に自然妙なる薰もこもることは勿論だが）　花のうき　花の不面目、花の恥辱花自身の爲めに物憂いこと。

評　（花よ、花よ、櫻の花よ）こんなことなら我が雲林院の親王が、おとまりになるやうに思ひきり立派に咲きはえよかし。（でなくて）この親王をおかへし申すとなつては、そちが身にとつては不面目でないことがあらうか、（たしかにその方の恥辱だぞよ）

評　宛ら給仕女を督勵して客に酒を強ひさせる格で、「花に面目をたてさせよう――卽ちこの花を美しいと御思召しならば　どうか今暫らくは留つて見めでられたし」と婉曲な懇囑の餘情になつて居る。で趣向はよろしいが、形の上に於ては「汝櫻よ」といふ意の呼掛がないために、一首の上から櫻に囑した氣味は受けとられるけれども何となく生ぬるい嫌がある。

仁和帝みこにおはしましける時にふるの瀧御らんじにおはしまして、かへりたまひけるに、よめる

三九六　あかずしてわかるゝ涙たきにそふ水まさるとやしもはみゆらん　兼藝法師

考　詞書　元「仁和帝の……おはしましける時」

離　別　三九五・三九六・三九七

相「仁和のみかどのまだ……」
結句　頓「しもはみるらん」
　　三「しもはみるらん」（ゆ三本同）

新撰　同。

釋　仁和の帝云々　二四八參照、同じ時のことである。兼藝法師　目錄にも抄にも伊勢少掾古之二男、大和國城上郡の人とあり、古義には石上の良因院に住んでゐたこともあるといひ、餘材抄には兼藝といふ名義を考へて「大日經に、阿闍梨の相を說中に通二達三乘一兼二綜衆藝一といへり。兼藝の名はこの心にてつかれけるなるべし」とある。

講　飽かぬお別れに名殘惜しさの涙が、この布留の瀧に落ちて流れますと、この川下では水かさが增したとも見ることでありませう。

評　この歌によつて察するに、作者は御案內役でも仰せつかつてお供をして、今御歸京について、その御挨拶をしたものと想はれる。卽ちその口吻は何となく亭主振りを見せて居る。さては、景樹のいつた通り良因院あたりにでもゐた時なのか？　若くはもつとこの瀧近くに居住してゐたものとも臆測される。が歌そのものは少し誇張に失して眞面目な別離を叙したとは思はれない。瀧と離情とを結合しようとあせつたが爲めの誇張であらうが、しみ〴〵した趣がないのが缺點である。

かんなりのつぼにめしたりける日、おほみきなどたうべて、雨のいたう降ければ、夕さり迄侍てまかり出侍ける折にさかづきをとりて　つらゆき

三九七　秋はぎの花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

考　詞書　元・筋「かむなりの壺に（元永本はこの下に「て」とある）召して○○○○御みきなどたゐべけるに雨の○○○降りけるに、ようさりまかりいづる○○○○に、さかづき○とりて」
清輔本・高野切・傳爲相筆本は末尾「きのつらゆきがさか月をとりて」として作者名の貫之はない。すると此次はの「とよめりける返し」まで次の三九八につく詞書で、本文の歌詞ではなくなる。思ふに「とよめりけるかへし」は外の同樣の場合に、たゞ「かへし」とあるのとはちがふからこれは恐らく高野切や、傳爲相筆本の方が正しからう。すると本集の歌數はこゝで一首減る勘定になる。

語　かんなりのつぼ　一九〇參照。おほみき　大御酒「酒」は白酒・黑酒などの時はしろき・くろきと「き」によみ又「みき」ともよむが火御酒は酒を最も丁寧によぶ名稱である。さかづきをとりて　杯を兼覽王にさして、當時の風俗に杯を人にさすにだまつてはささないで何か彼かみやびかな詞を添へたものと想はれる。四一八參照。

講　兼覽王（傳は二三七に）が雷の壺へ御召しになつた日御酒などを頂戴して……雨がひどく降つたので夜に入るまでも伺候して退出しようとしたとき杯をさゝげようとて（そへた歌）。このひどい雨に壺庭の秋萩を濡らしましたが、それにもまして（始めて御目通りを得ましたこの光榮の席を退出して）我王樣におわかれしなければならないことを名殘惜しいと思ひます。

評　作者は本集撰進の御用命によつて度々この饗芳舍に召されたことと想ふが、次の歌によつて察するに、この兼覽王には始めてお目にかゝつたので初對面の御暇乞の挨拶といふので、名殘惜しさを一段强調したと想ふ。外は秋時雨が宵かけて降りしきつて、此程朝夕の眺めとしてではやした庭前の萩が散つた。これは恐らく實景でもあり、又その當時宴席での主なる話題でもあつたらう。そのつゞきを受けて「ですがその萩以上に惜しいのは……」と持つていつたもので時處人の三つにふさはしい着想である。

とよめりける返し（詞によめる）

三九八　をしむらん人の心をしらぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

考　詞書　元本「○○○○○○返し」

鑑　兼覽王　二三七參照

講　（それ程までに）惜しんでゐて下されてゐるであらう處の御身の意衷を今日が日までも知らずに暮らして來て、今や我が身は今外面にふる時雨のやうに老いふりてしまつたとは（さて〳〵殘念なことであります）

評　年齢をくれば四十前後と想はれる兼覽王が、斯く老人振つたいひ方をせられたのは唐情（四十を初老とす）に倣はれた故もあり、折ふし外に降つてゐる雨のよせでもあるが、又一面我が齡かけて「相知る何ぞ遲くして相別るゝ何ぞ早き」とよく弔辭などにいふやうな相手を惜しむ心もちを強く出されたもので、一見傾蓋の如き親しみが溫藉に流動してゐるのが宜い。

かぬみのおほきみに初て。物（あひ）がたりして別ける時によめる　躬恒

三九九　別るれど嬉しくもあるかこよひよりあひみぬさきに何を戀まし

考　詞書　元・筋「兼覽の王にあひはじめて○○○○○別れける時○○○○」

二句　嘉「うれしくもなし」

四句　嘉「あひみぬべきに」

新撰　同。

鑑　嬉しくもあるか　「か」は咏歎、嬉しく存じますよ、今宵より　下の「先に」に係る。今宵より以前まだお目にかゝらない時。

鑑　兼覽王にはじめてお目にかゝつてお暇する時によんだ。今お別れするのは惜しいですが、併し一面嬉しいとも思はれますよ。（それは）今宵より以前まだお目にかゝらない時には、何を（日當てに）お慕ひ申しませう。（すればこの後は少くとも御慕ひ申す對象を得ただけでも嬉しいと思ひます）

評　西行歌うて曰はく

うとくなる人を何とて怨むらん知られず知らぬなりもありしを

とこれと一味相通じて居る。此を以て離合集散を一如と見た達觀を表したなど解くのも宜くないし、「いつまどもそばに伺候するにこしたことはないのだが、それが不可能なるが故に第二義を以て滿ち足らうた表現」ととるのも說いて盡さない。作者が「うれしくもあるか」といつたのは衷心悅んだものでなく、以下に次々歌ひ出す心持を以て成程と肯づかせる警句なのである。「早やお暇申さねばならぬとは返々も遺憾な次第であります」ともいひ「ですが今日お目にかかりましたので、これからはあなたを懷かしむ光榮を有つことが出來るだけでも、私は恐悅に存じます」ともいひ「でも矢張今日お目にかゝつてよかつたとしみ〴〵悅ばしく存じます」ともいひ「今後は何分にもよろしく御願ひ申します」ともいふその委曲をスラ〳〵と簡結に歌ひ含めて初對面の別辭として文學的にも外交的にも成功したものであらう。

題しらず　　よみ人しらず

四〇〇　あかずしてわかるゝ袖の白玉は君がかたみとつゝみてぞゆく

考　三句・三・清・元・嘉・筋・切「しら玉を」

鑑　なし。

講　あなたと飽かぬ別れをして泣いた涙の白玉は（とりも直さず大）あなたの記念だと思うて（切に秘に）包んで出かけま

せう。

評　涙を白玉に暗喩したのは一面さめ〴〵と泣く相貌を想はせるよすがとなると共に、又一面涙を玉とめでていかにも貴重品扱ひにしようといふ情趣をも示して居る。又「つゝみてぞ行く」といふのはこの歌の作者が見送られる方で、眞實つらい別れをして五歩に見返り、三歩にたゞずみ、而かも世間を憚つて音にあげて泣くことすらも出來ずシク〳〵と忍び泣きに道中しつゝ折々そつと袖で眼を拭うて居る趣も思はれる。さては作者は恐らく女子であらう。

（以上は諸註の略一致するところで 多分はさうであらうとは想ふが、或は平安歌人の洒落振で、戯れてなかしくいひまはしたとも解せられる。戀の部七三七の下の句「おのが物から形みとやみん」といふとよく似たいひ方である。）

四〇一　限なく思ふ涙にそぼちぬる袖はかはかじあはん日までに

考　二句　清「おつるなみだに」

三句　清「そぼちぬる」

語　そぼち　ひどく濡れる、ボトく〳〵にぬれ、山田のそほづ、濡れそぼつなどの「そぼ」と同一語系。

講　（御身との永の訣れを）この上なく悲しんでこぼした涙にそぼぬれたこの袖は、再びお目にかゝるまでに乾くやうなことはありますまい。

評　「御身にわかれてはたゞの一日涙なしに暮らせさうもありません」といふ離愁を歌つたものではあるが、誇張に失して浮いた氣味があり、表現が固定的に唯別れの一時に流した涙が多いので、それが又の逢瀬まで乾かなからうと様に聞えるのが拙い。

四〇二　かきくらしことはふらなん春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめん

考　初句　顯「カキクヅシ」

語　かきくらし　「かき」は接頭語「くらし」は「きらし」の轉か萬葉には「掻きらし」といふがある。若くは「掻きくもらし」の略か？

講　ともかく空一面にひどく曇ることないふ。ことはふらなん　こゝは一句と相錯へて「ことならばかきくらしふらなん」の意で、こんなことなら、とてものことに、掻くらし降れかしといつたもの、すると今面のあたりは春雨が細くやさしく降りそゝいでゐることもわかる。「ことは」といふところを、「とてものことに」「どうせ降るなら」「いつそ降るからには」など譯したものがあつて 落ちつく意味はそれにちがひないが一々語釋をするなら、前述のやうにいふが、一番明瞭且つ正確かと思ふ。俗謡に

よしや今宵は曇らば曇れとても涙に見る月を

とあるこゝの「とても」なども「ことならば」に近い。ぬれぎぬ　元着物の濡れたのをいひ、轉じて無實の罪をいふ（乾いたからだに強ひて濡れた着物をおつかぶせるといふ意から歟？）

講　こんなことなら、いつそ掻きくらして（思ひきりひどく）降れば宜いものをさ、すればその春雨に濡衣をきせて、（御身にはどうも雨がきつくて歸れなかつたなんか云はせて）あなたを引き留めませう。

評　別れを惜しむ情の切なさもよく表れ、その情を慰めようとして採つた手だても上品である。公卿縉紳の別れとも相思濃熱の戀仲とも解し得る。加ふるにその餘情、春雨煙る壺前栽や南庭を見い〳〵興趣盡きせぬ主賓の對座を思はせるし「春雨」と優美に叫んで「ぬれ衣」と緣語のつきもうまくいつてをる。

四〇三　しひてゆく人をとゞめん櫻花いづれを道とまどふまでちれ

考　四句　清・元・筑・切・嘉「いづれかみちと」

離　別　四〇二・四〇三・四〇四

類 なし。

語 (いくらとめても)たつて行く御身をとゞめたいばつかりに、この櫻花が散つて〳〵どれが道やらけぢめがつかぬ程散れば宜いと……(マア私はこんな風に思ひます)

評 櫻の落花一三片ヒラ〳〵と散る下に袂を分たうとして、「いつそ散るならもつと散れ」と前の「かきくらしこは降らなん」と同樣の呼掛けをして、又一つの上手な強い口上としたもの、歌境の雅興はさることながら已に三四九や三九四に同樣の櫻の着想があるし、六帖にも

さくら花ちりがひくもれあかすしてわかるゝ人も立とまるべく

とあつて「又か」の感じがするし、強ひて行く人をとゞめようとした歌には七三九の「駒の足折れ」といふ遙かに強い表現があるので月夜の星のやうに思はれるのが、この歌の損な處であらう。

四〇四　むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

志賀の山ごえにて。いし井のもとにて、ものいひける人のわかれけるをりによめる

考 詞書　貫之集「志賀の山越にて山の井に女の手あらひて水をむすびてのむを見て詠みてやる」

拾遺　九・雜戀一二二八「しがの山ごえにて女の山の井に手あらひむすびてのむをみて」

四句　元「あさくは人に」

切　「あかでも人を」

六帖二山い井・新撰　同

志賀の山ごえ　一一五參照。いし井　石井、又いはゐともいふ。岩間の水たまり、岩清水といつた風のもの、往時の井は至つて無雜作なもので凹の小溝をせきとめて板圍ひをして「板井の清水」など謂つた。で、これも志賀の山の路ばたの岩石に自然と清水の湛へてゐるものを石井といつたものであらう。ものいひける人　言葉をかはした婦人、「人」は男女何れにも通じるが、この時代かうした言ひ方は大抵異性を指していふ。又この句を上につけるのと下につけるのとで解釋がちがつてくる。上につけると石井の處で落ちあつてそこでことばをかけた婦人となり、下につけると、この山ごえの道中道連れ、話連れとなつて來た婦人が石井の許まで一緒に來てそこで別れたとなる。あまり窮屈に詮議せずとも唯ゆくりなくもこの小ポーアシズで落ち合つてつひ二日三日言葉をかはした女性位にとれば宜からう。むすぶ　掬ぶ、手ですくふこと　掬飯を「むすび」といふもこれと同語系であらう。山の井　前のいし井のこと山にある石井の略さ、こゝまで上句全體は四句「あかでも」を出す爲めの序詞として眼前の實景を叙したもの卽ち有心の序である。あかでも人に云々　あかは水の梵語「閼伽」にかけたなどは見ない。まだ飽きもしない(色々御話を伺ひもし申し上げもし、尙引つゞき宜いお連になつていたゞかうと思つてゐる)あなたと早やおわかれをすることになりましたねえ、「人に」は「君に」といふも同じ。

語 志賀の山越で石井のもとで言葉をかはした婦人のわかれる時に咏んだもの。手ですくふと(手股から洩れる水の)雫で(直ぐ)濁る(位な淺い)山の井の(水の「飽かぬ」といふその如くまだ)飽くまで語りもせぬ中に(早や)あなたとお別れすることになりましたねえ、(さて〳〵御名殘惜しいことです)

評 一首の正味はたゞ「今少しお話も伺ひたいと思つてゐましたのに」といふ行きずりの、異性に投げた普通の挨拶だけなのだが、上の句の序詞はつひ今し方まで双方の當面した景況であるから、やがてこの一首の背景をも兼ねたことになる。それに初句から結句まで、語句緊密につながつて一語の贅句なく、一句の前後すべきもない。抄に「貫之第一の秀咏」といひ、風體抄に「歌の本體は唯この歌なるべし」と激賞したのは溢美であるにしても、上述二點は確かにこの歌を優越づけて居る。貫之自身得意でもあり、その當時已に衆人の喝采を得たであらうことは、拾遺十九雜戀の一二

二九即ちこの歌を再び掲げた直ぐ次に

三條の尙侍方たがへに渡りて歸るあしたに雫ににごるばかりの歌いまはえよまじと侍りければ車にのらむとしけるほどに

家ながら別るゝ時は山の井の濁りしよりも侘しかりけり

とあるのでわかる。（余思ふ尙侍は女官の最高で貫之の身分はずつと低いから、事實方違に來たものとすれば尙侍に今少し敬語をつけるべきであらう）尙又この歌は貫之が推敲詩人などといはれる他の一面に於ては、可なり即興の名手であつたことをも證據だててゐると思ふ。

或はいふこの歌萬葉十一の二七六

泊瀬川はやみはやせかむすび上げて飽かずや妹ととひしきみはも

から思ひついたと。けれどもそれは「むすび」と「飽かず」とだけの用意の相似だけで、一首の想に於て全く別種である。新千載三夏の三〇一題しらず　人丸

結ぶ手の岩間なせばみおく山の石垣清水あかずも有る哉

は清水そのものについては、こゝの歌と等類だが、人に對する主想は人丸のには全く咏み込まれてない。要するに特種の古歌を本歌にしたものではなく、さうした古歌の修養ある作者の口を衝いて出た暗合であらう。

さりながら、僅かに通りすがりの婦人に一寸遇つて一口二口物いひかけた位にすらこゝまで歌つて別れるといふ王朝人の生活は如何にも間の延びたものであらう。今日吾々が、町の通り、汽車の中、電車の中、さては乘合自働車の中や同じ温泉宿で出くはす異性といふものはザラに多くて、時には詩人的哀愁を寄せて「此等の人々とは永い一生の中恐らくは又と相見る機會は無からう、それだのに何等内部的交渉なくして、つと逢つてつと別れねばならぬとは偖ても人生は寂しいものだ」とも想はれるが、しかしそれ等の一人々々にこの貫之のやうな感傷を寄せた位には、しまひには感傷の食傷にあつて神經衰弱になつてしまふであらう。で、これなんぞは王朝人の生活情調を考察する上にも一の好資料であると思ふ。

貫之が一たびこの秀咏を物して以來等類模倣の咏は歌の方には無論澤山ある（國歌大觀の「むすぶての」や「山の井」を樣つて見られたし）が、俳句の方にもその影響が代々に見られる。

一桶のあと濁されし清水かな　割鼓（元祿）
二人して結べば濁る清水かな　蕪村（天明）
濁りても中からすめる清水哉　默我（寛政）
濁しては澄むを見てゐる清水哉　？（文化）
涌き口を尋れて濁す清水かな　梅室（天保）
强力の清水濁して去りにけり　碧梧桐（明治）
掬べば濁る淺き清水に値遇の緣　虛子（明治）

以上は凡てがこの歌の影響とは謂はれない迄も大部分はその着想の脈をこれから惹いて居る。尙又始業式唱歌の歌詞の左の一節もこれから脫化して居る。

掬べば濁る山の井のあかで別れし友垣と　またもふづくを打ならべ　學ぶ今日とはなりにけり。

四〇五　したの帶のみちはかたく〳〵わかるともゆきめぐりてもあはんとぞ思ふ　とものり

離　別　四〇四・四〇五

考　詞書・作者　三「きのとものり（木奏雅）」

元「道にあ〇りける人の車に……」

釋　道に　中途で　人の　これも婦人と解く。いひつきて　言ひ附きて、言ひ入れること。したの帶　下紐のこと、束帶の時などは上下二重に帶をするから　その下の方の帶をいふともあるが　必ず束帶ととらなくても肌に密着する下紐と思へば宜からう。帶といひ紐といふ古は彼此相通用した語である。したの帶の　か御禊の故事（伊弉諾尊の投げ棄てられた御帶になりませる長道磐神といふがある）によつて「道」の枕詞とする說（契沖）はとらず、「下の帶の如く」としてこゝ直喩が最後まできいた體にとる方が面白い。みちはかたゞくわかるとも　あなたとわたしは斯う片々に行き違つて一旦はお別れしませうとも。

釋　途中であつた或る婦人があつた我は歩きつゝ彼女は牛車の中ながら話し合つて、別れる時に咏んだ（御身と我とは）下の帶のやうに（一旦の）道は片々に別れても（帶がくるりと廻つて又合うて一つに結ばるやうに）行きめぐり〳〵する中に又めぐり合ひたいものです。

評　「逢うて別れて又逢うて」といへば二重廻して三重目に結ぶ帶のことで、布を以て離合の譬へとすることは後程頻繁になつたが、この歌「下の布のやうに」と切り出して一首凡てこれにかゝつて譬喩し、而かも相手が婦人で車と下と御簾越に語らひかはすといふのだから、別れとは云ひ條戀心によせたものであらう。何となく今日の新婚夫婦が三越へでも出かけて夫はエレヴエーターで七階まで上り、妻は一番下な食品部から買物し始めてグル〳〵廻つてゐる中に三階あたりでひよつこり出あつた時に、出會場處の對話をするやうな趣に見られて、悲痛な別離とは想はれない。又の逢瀬を見こしての別離の歌と想はれる。

第九　羇旅哥　序說

（元永本「旅心」とあり）

「たびのうた」といふ、「たび」とは一泊以上他に出かけることの總稱だから、遠きは漢土近きは河内の交野と大分大旅行小旅行の相違がある。交通機關が不備で、文字通りの草枕の頃のこととて、旅愁の歌が一番多い。四〇七・四〇九四一二・四一五・四一六次には故郷をしのぶ郷愁の歌が多い。四〇六・四一〇・四一一などたまに旅興の歌、即ち旅先の興趣を歌つたユーモラスをもつたものもある。四〇八・四一七・四一八・四一九又當時の旅人の常として道途の幸を道祖神に祈つたものだが、さうした着想の歌もある。四二〇・四二一現今のやうに旅行を一種の職業としたり、一種の享樂と觀たりする人々から見ては大分趣がちがふが、併し旅に伴ふ一種の哀愁に於ては古今内外不易の人情味もあつて隨分鑑賞に値する秀咏もある。

安倍仲麿

四〇六　あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山に出し月かも

もろこしにて月をみてよみける（詞なし）

この歌は昔なかまろをもろこしに、物ならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへて、えかへりまうでこざりけるを、このくにより又つかひまかりいたりけるに、たぐひてまうできなんとて出たりけるに、めいしうといふ所のうみべにて、（三なし）かの國の人うまの餞しけり。よるになりて月のいとおもしろくさし出たりけるをみてよめるとなんかたりつたふる。（ゆなし）

考　詞書・作者　元・筑「もろこしへ、安部の仲丸を、物ならはしにつかはしたりけるを、あまたの年を經て、かへりまうで來ざり

ければ、これからまた使まかりけるにたぐひて、まうで來なむとて出でたちけるに、明州と云海のほとりにて、かの國人も、馬のはなむけしたりけり、夜になりて、月いとあかく出たるを見て　○○仲丸

初句　土佐日記「青海原」

五句　元「いでしつき○○」

左註　元・筋なし。

百ノ七・六帖一天の原・金・新撰　同

題　もろこし　支那のことを日本でいふ稱呼、中華・中夏・中國・華夏・震旦・支那・漢・唐など書いて凡て「もろこし」と訓む。名義は遙かの西にあつて幾山河海を越して行く國、卽ち諸越・諸夾（萬葉や眞名伊勢物語にある）だとも唐の時代にもろ〳〵の文物をもたらした國卽ち諸越の國といふ義だともいふ。安倍仲麿　一三六一―一四三〇大寶元―寶龜元、七十歳、中務大輔正五位上船守之子で、その先は孝元天皇から出て居る詩文の才に秀で元正天皇の靈龜二年彼十六歳の時、遣唐使多治比縣守に隨ひ留學生として渡唐し、ひどく唐朝の文化に心醉し、仕へて玄宗皇帝の殊寵を得、止まること三十餘〻、孝謙天皇の天平勝寶年中遣唐使藤原清河歸朝の船に便乘して歸國しようとして明州の埠頭祖道の宴席に招ぜられてやがて出發、不幸にして中途難船、安南に漂着し、東海岸の大陸を傳うて復復唐廷に北歸し、肅宗皇帝の眷顧を受けて光祿大夫兼御史中丞兼北海郡海國公に封ぜられ遂に彼の地に逝いた。その詩は李太白・王維・杜甫・趙驊・包佶等と相共に當代の詞藻を代表し、歌も亦巧みで土佐日記・本集・續後拾遺等に出て居る。別名は仲滿・朝衡・鬼衡・晁臣・晁卿・胡衡などいふ。あまのはら　廣々とした大空を「はら」は廣い空間をいふこと已に述べた。土佐日記承平五年正月二十日の處に「青海原」とあるのはその折に合ふやうにわざと變へたもので本形は「あまのはら」であらう。まして「夜に入りて」といふのだから青海原はちと怪しい。ふりさけみれば　遠く見はるかすと、振放、振離の「ふり」は接頭語「さけ」は遠い意があるから遠望することになる。この下に「月そのぼれるあはれかの月は」など補ふとよくわかる。みかさの山　三笠山、大和國添上郡春日神社の還向道に沿うて、社の手前にある。大和志料に「一ニ御蓋又ハ御笠ニ作ル。春日山ノ四峰ニシテ其形蓋ニ似ケリ故ニ名ツク」とあるが、俗には山の形が三つ笠を重ねたやう（といつても二笠目は一方に偏つては居るが）になつてゐるから、三笠山だといふ。全山芝生で足弱の女、子供にも登るに適して居る。春秋の交この山に登ると全山竹の皮や蜜柑の皮や折箱の殼で覆はれて居る。自分も前任地時代には度々登つたものだが嘗て戯れに

肉肥えしアラビヤ馬に乘るとごと三笠の山を三巻れりつも

など咏んだこともある。この山丁度奈良の町の東手に當るので月の出にはこの方向を望むのが普通である。あの今もよく行はれて居る花合せの八月の札に圓い山を畫いてその上に滿月をそへたものがあるが、三笠山の月は丁度あゝした趣を想像するにふさはしい山の姿態である。殊に作者仲麿は渡唐に際し養老元年二月壬申朔この山の南に神離をしつらうて、一路の平安を天神地祇に祈られたとあることなどもこの歌を解くには考慮の中に加ふべきであらう。月かも　月であらうかあゝ「かも」の「か」は疑問、「も」は咏歎、それを「かも」を一感歎詞ととると飛んだ間違が起きる。天の原をふりさけみるとあゝあの三笠の山に月が出てゐるなアと樣に、明州の海岸から千里見透しで三笠の山を見たことになる。すると仲麿は天眼通であつたか？　とでもいひたくなる。昔　前述の元正天皇の養老元年のことだが實際渡航したのは靈龜二年　物ならはし　留學生として派遣されること、あまたのとし　約三十五六年、又つがひまかりいたり　は孝謙天皇の勝寶三年、藤原清河の往つたこと、たぐひまうできなん　打連れだつて歸朝しようとて、めいしう明州、唐書地理志に「江南道に屬し其國境に四明山があるので唐の開元廿六年明州と名づけられた」とある。今の渤海灣頭山東省のあたり、かの國の人　王維・趙華など。

題　支那で月を見てよんだ。廣々とした大空を遙かに見はるかすと折ふし月がのぼつてゐる。あゝあの月は（故郷）春日にある（春日は春日の神山からかけて三笠山邊に至る一帶の汎稱である）三笠の山に出た（その）月であらうか、あゝ（さう思ふと歸心矢の如く一刻も早く歸りたくてたまらない）

この歌は昔仲麿を留學生として唐朝へつかはされたのに、多くの年を經て、歸朝せない（で唐朝に仕へてゐたのを）後又我國から遣唐使が往つた時、打連立つて歸朝しようとて出發したのに、明州といふ地の海岸で唐の人々が送別の催しを

した……が、その夜月がおもしろくさし出たのを見て咏んだものだと語り傳へてをる。

評　所謂他郷の月に繼々の郷愁を寄せたもので、今や作者仲麿の胸には二個の時空遠き彼方へのあこがれが燃えて、夢多き少年の昔奈良の町にして幾夜こがれた三笠山の月、その頃の純なる内生活の回顧から、「あゝもう一度あんな心持であゝした月が見たい」ともなり、一面には波濤萬里を隔てた當夜の三笠山の幻影を浮べて鰭もあらば泳いでも行かう、翼があらば飛んでも行かうといつた熱烈な思慕をも含めて居る。況んやその人孝心深く温凉の定省意の如くならざるもの三十餘年といふに於てをや、又況んや唐朝と我朝とは相距る幾百里、航海不便の當時のこととて往くにも返るにも水盃で訣れたといふではないか。人と時勢と境遇とを考へてこの歌に味到すると、旅愁は一段と深いものがあらう。格調蒼古意詞渾然として作爲の小技巧がない。啻に本集中の秀咏とのみでなく、古來我邦旅の歌の中にあつては確かに千古の絶調である。（但しその歌境は果して詞書いふが如く、送別の宴席であつたらうか、此は景樹も疑つて居るが尙考究の餘地がある）説をなすものあり、彼仲麿は外國文化を我に將來する使命を帶びながら、在唐五十年凡て他國の爲めにつくして我に寸益を齎らさない、この非國民的態度は何としても言ひ解く術がなからうと、非國民か？　國民か？　余は今此について詳論する餘裕を有しないけれども、少くともさうした人物評の如何といふことは決してこの歌の價値を左右すべき性質のものではない。加ふるに東海の濱に卓立して日出國とは云ひ條文化常に彼に數歩の長を輸し、何事も彼の範に仰がねばならない當時、詞藻界一個這般の天才が出て彼の朝一流詩人の班に伍し、尙かつ廟堂施政の要路にあげられるといふことは間接に我邦の體面を發揚したもので、又さうならこそ承和三年には優詔と共に正二位を贈られたものであらう。殊にヨネ・ノグチがロンドンでアメリカ少女日記を書き、ラフカヂオ・ハーンが東大英文科に講義することを一個悅ぶべき事象と見る現代人の見方からいふなら、この仲麿の評は大分書きかへられねばなるまいとも思ふ。ともあれ人物論を移して、この歌を彼此することは正常な文學批評の態度ではない。聖人ならじとも怒を移すはよろしくないことは極つて居る。

（尙土佐日記前掲の處や唐詩選中、玉維が送別の詩などを併せ見れば、この一首の歌境は一層明らかになるが、繁を避けて今は省いておく）

四〇七　わたの原やそ島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ蜑の釣舟

小野たかむらの朝臣　三清なし

考　詞書・作者　元・筋「隱岐の國に流されける時○、舟に乘りていでたちけるに、京なる人○○○に、よみて遣しける○○篁○○」　金「隱岐國に流れて侍て小野篁」

百ノ一一・金・新撰　同。

補　おきのくににながされ云々　作者篁が遣唐副使を命ぜられ、已に出發する間際に遣唐正使藤原常嗣の乘用と定められた船が破損したので、篁の船をその代りにと願ひ出て勅許を得て居るのに、篁が不承知を唱へて「一旦極つたことを今更變更する法はない」と强硬に出て、お負けに諷刺詩「西道謠」を作つたので朝廷では之を不都合として隱岐へ遠流に處せられた、それは續日本後紀第七によると承和五年二月己亥のことで、文德實錄第四卷によれば仁壽二年十二月癸未のことである。日附の違ふのは處刑の發令の日附が前愈々出發したのが後のことと察せられる。その時の勅書には「小野篁内含二綸旨一出使二外境一而稱二病故一不レ遂二國命一。準二據律條一可レ處二絞刑一宜ㇾ降二死罪一一等一處二之遠流一配ㇾ流隱岐國ㇾ。云々」とあつた。船にのりて出たつとて　船出をしようといふので、歌に「やそじまかけて」とある處から察して此はなにはの浦かこの二ヶ處の中であらう。山崎よりの淀河の川船ではない。多分はなにはであらうが、次の「ほの〴〵と」の歌を篁の作とする今昔物語の記事もある位だから先づこの兩方の中としておく　京なる人　かうしたいひ方は妻子眷族など近親の人々か非常に入魂な知人を指す場合が多いが、當時篁は父岑守は已に亡くなつて老母が都に居た。

現に不承知を唱へた詞の中にも「篁家貧親老身亦尫弱　是篁汲レ水採レ薪當レ致二匹夫之孝一耳」（文德實錄第四）とある。でこれはその老母にあてたものと想はれる。わたの原　大海原難波から瀬戸内海を經て馬關海峽を通つて日本海に出て、それから東北に進んで渡航するといふのが當時の隱岐への航路であつた。やそ島　いやそじま卽ち瀬戸内海の多くの島々をいふ　古註に出羽、みちのく、難波にある固有名詞としたのはひがことである　かけて　兼けて、あはせて、多くの島々悉くをあはせ經めぐつて、八十の島廻を廻航して、瀬戸内海の航行に八十島を咏むことは萬葉から例がある。

海原を八十島かくりきぬれどもならの都は忘れかねつも　（卷十五）

此は備後水調郡長井浦で咏んだもの

もゝくまの道はきにしを又さらに八十島かけてわかれかゆかん　（卷二十）

此は筑紫へ遣はされた坊人（さきもり）が咏んだものである。人にはつげよ　「は」は矢張區別の助辭であるが、中には之を咏歎とした解もある

「人には」のは感歎の詞でてにをはではない。人に告げよといふまでの意ぢや（中村秋香氏）

思ふに「は」そのものは區別の助辭であつて、この一句のおちつく處は咏歎であると見るが宜くはないか？　「人には」の一語は自分が日蔭者の境遇であることをも、相手に深く思ひ入つて居ることをも含んだ餘情多いいひ方である。世間を憚る身であるから、公然消息をする譯にはゆかぬが、餘の人はいざ知らずせめては母上にだけなりとといふ氣持である。蜑の釣舟　釣を垂れて居る海人よ

「船を呼ぶわけはない人を呼ぶべきだがら『釣船の蜑』とすべきを口調上倒置したものだと見たのも一説だが、これは寧ろ船出する矢先に遙かの沖にチラホラ浮ぶ小舟の影を釣舟と想定し、又それに乘つて居る人を蜑と想ひ定めて、遙かに呼びかける氣持をさながらに表したと見る方がすなほであらう。

題しらず　隱岐の國に流された時に船に乘つて出發するといふので、京の人のもとへやつた歌。オイ〳〵蜑の釣舟よ（わたしは今さびしい）大海原の多くの島々をへめぐる（流謫の門出として）出帆いたしましたといふことをせめて都にゐます○○樣だけになりと知らせてくれよかし。

詞　「いよ〳〵」正月○日の朝になりました。無情の船頭はしきりに早く〳〵と促したてますので、細々と申上げたいことも充分に書きつくせません。船は早や港に舫つて居ります。遙か向ふの沖合には朝靄の中にチラホラと小船が見えて居ります。多分蜑の釣舟かと想ひます。あゝ私はこれから多くの島々を經めぐつてあの遠い〳〵隱岐をさして參るのです。都にゐます母君を思ひ我行末のはかなさを思ひ、身も世もあらぬ悲しさに胸もはり裂くばかりでありますが、官命なれば此も仕方がありません、どうか御身を御大切に」

今樣の消息ならばかうも謂ひたいところを、僅か一首に泣き籠めたもので、何よりも實感の强さで優れて居る。尙道中で謫行吟七十韻を賦し

渡口郵船風定出　波頭謫處日晴看

といふのも同時の作である。思ふに篁は天才的詩人型の人で情緒の熱する處、何物をも血と涙とに化さずには已まない底の咏吟を殘してゐる。（三三五・八二九・八四五・九三六・九六一を通覽ありたし）催馬樂「律」の「道口」に

みちのくち、武生の國府に、われはありと、親には申したべ、こゝろ合ひのかぜや、ささんだちや

とあり、平家物語卷二には平康賴の有名な卒塔婆流しの歌

さつま潟沖の小島に我はありと親には告げよ八重の汐風

といふがある。それとこの歌と必ずしも想詞の連繫がある譯ではなからうが、自分には何故か情緒の倉庫（くら）に一堆（ひとつみ）積となつて想起せられる。

題しらず　よみびとしらず

四〇八　みやこいでてけふみかの原いづみ川かは風さむし衣かせやま

羇旅　四〇七・四〇八

考　作者　抄　註の文に「此歌田部福丸がよむ首途の歌也」

初句　顯「家を出でて」

四句　元・筋「かはかぜさむみ」

六帖五雜の衣・新撰　同。

釋　みかのはら　瓶原・三日原・三香原・甕原・御甕、など宛てる。　山城相樂郡にあつて和銅年間始めて離宮をおかれつゝいて聖武天皇の離宮（恭仁の宮といふ）を置かれた頃から聞えた。その宮跡は今瓶原村大字岡崎、井平尾の中間にその遺蹟がある。（萬葉一〇五〇から一〇六一まではこの恭仁の宮の讃美と挽弔の歌ばかりである）さてこれは都出てから丁度今日で三日目になつたといふのをみかのはらにかけた秀句だと看られた金子氏の說もあり、「みやこいでてけふ」までを三日の秀句の甕を出すための序詞と看た景樹の說もあるが、愚考では尙景樹の後に說いた旅する人の常として家を出て今日で幾日、明日で幾日とかぞへるその幾日といふに緣しある三日と同音のみかの原といふ意の秀句であらうと思ふ　京となにはの間は極めて短距離で源氏物語にも源氏が須磨に行く道行がある　それを木居宣長の說によつて第一日に難波まで行つて第二日目の申の時に須磨に往つたとしても、京からなにはまでは一日行程であるし、舊幕時代淀の川舟は大阪から京へ上るのでさへ一夜にして着いたもので、今日東海道線の特急は一時間足らずで京阪を走るのだから、いくら道草を喰つても京を出て三日目に瓶の原といふのは少し手間取り過ぎた旅　である。（その間に方々迂回を要する名所舊蹟があるといふなら格別だが？）で自分はたゞ瓶の原といふ地名に興を覺えて京人が地方へ旅してよくいふ「みやこを出てから今日でいくかといふに寄せある瓶の原までやつて來たところが」と樣に解きたい。いづみかは　泉川、瓶の原を流れてゐる川で今の「木津川の上流である。崇神紀十年九月の處、官軍と埴安彥との對軍を寫して

更避二那羅山一。而進到二輪韓河一。與二埴安彥一。挾レ河屯レ之。各相挑焉。故時人改號二其一曰二挑河一。今謂二泉河一訛也。

記にも「故號二其地一謂二伊抒美一。今謂二伊豆美一」とある和名抄の水泉（以豆美）鄕續紀三十一の出水（いづみ）鄕は已に「泉川」の名が確定した後樣の稱呼であらう。小倉百人一首二七の

瓶の原わきて流るゝいづみ川いつみきとてか戀しかるらん　（中納言兼輔）

は誰もよく知つて居るこゝの地名咏込の歌である。かは風さむし　前句「泉川」を受けて「川風」と「川」を尻取句にして句調を調べたもの。かせやま　鹿脊山、瓶原から泉川を隔てて北の對岸にある。村でいふと木津村と加茂村の中間に在る。そしてこゝは衣を「貸せ」といふにかけたもの。

評　都を出て今日は（この）瓶の原にきしかゝつた處が泉川のあたり川風（そゞろに）寒きを覺えた（丁度向ふ岸に衣を貸せといふを名にした）鹿脊山もあるよ。

評　この歌の餘情旅愁にありと見て「都を出でて日淺きに「早くも旅衣を薄み、川風のそゞろに寒きを覺える。あゝこれが家にあつたなら暖き妹が手、母が手に縫はれた着物を暖かに衣、手料理を飽くまで喰つて樂しからうものを…」といつた氣分の歌と採るのも一解だが、愚考では寧ろ旅先の輕快な逸興を主想にして斯く咏み下した後の餘韻は「ナニ瓶の原といふのか、まるで旅日記の文句のやうだな、ヤア向ふにあるのはかせ山といふのかこりや振つてる。川があつて川風が吹いて、そこで寒くて衣かせ山か、ヤアこりや歌になりさうだ位の洒落た作者の風貌が想はれる。さう見れば輕い好笑を含んだ旅情の歌として相當の佳作である。かせ山に衣をかけた歌は他にもあつて

泉がはあたり寒けき秋風に砧の音の衣かせ山　（少將內侍）

春來ても河風寒くみかの原たつや霞の衣かせ山　（權大納言氏實）

などいふが、みかの原とかせ山と二つを秀句的に輕快に歌つたものは他にない。又名詞を六個まで取入れた歌も珍しい

（現代の歌には

清洲川篠堤小舟ほとゝぎす雁木板橋十六夜の月　三木天遊

など全部名詞のもあるが……）又抄の作者推定は萬葉の恭仁宮の歌の作者と勘違したものであらう。顯註には萬葉の恭仁

宮の短歌をあげたしまひに「讃二久邇京一歌也田邊福丸集に出」とある。此で宜いと思ふ。

さて元永本にはこの次に左の一首がある。

しながどりゐな野をゆけばありま山夕霧たちぬあけぬこの夜は

そしてこの元永本を紹介せられた尾上博士は、結句は「やどはなくして」の誤であるといはれた。如何様上をそのままとしては「あけぬ」は變なものである。（考證を放れて歌詞のみについていふなら「夕霧」を「朝霧」に變へた方が宜い。すると一〇七一と似た歌になる）處で萬葉雜歌の一一四〇にこの歌をあげて

志長鳥居名野乎來者有馬山夕霧立宿者無爲

とあるから矢張尾上先生の謂はれた通であらう。尚右の歌の左傍に

一本云　猪名乃浦廻乎榜來者

とあるけれどもこれは誤であらう。この歌の前に攝津作とあつて、これは攝津の猪名町を呼んだものである。すると今の箕面有馬電鐵（阪急線の前の名）沿線、平野サイダーの製造元附近で、猪名川はあつても些やかな上流で浦回もなければ川舟をこぐ程の河流でも無かつたらうと思ふ。よしやそれだとしても已に萬葉にある歌であるから、本集としては入れない方が宜い。若し元本に入つて居つたとすれば撰者の誤である。

四〇九　ほの〳〵とあかしの浦のあさ霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ

この歌はある人のいはくかきのもとの人丸が也（渭のうた）

考　詞書・作者　元「題しらず　人麿」筋「題しらず　柿下人麿」　今昔物語廿四の第四十五「小野小町」

左註　元・筋なし。　相「このふたつの歌はある人のいはく、かきのもとの人まろが歌也」

柿本集下・金・三十六人撰・新撰・九品上上　同。

評　ほの〳〵と　仄々とほんのりと、模糊たる眺めに使ふ副詞。あかしの浦　播磨國明石郡明石町今は市制を敷かれて居る。上代からの要津近畿地方から南海西海に通ずる咽喉の地でなにはと並び榮えた津である。こゝの燈臺は今も古色を存して立つて居る。萬葉に「ともし火のあかしの浦、あが心あかしの浦」などつゞけたのがあるが、こゝではほの〳〵と夜があけるそのあかしとかけて謂つたもの、隨て初句は「あかし」の序詞でもあり、夜明けの樣を限定した副詞でもある。島がくれゆく　「島かげに隱れて行く」とも「島かげを漕いでゆく」ともとれるが、今は遠鏡の「海を隔てたる所の隱れで見えぬをいふ必しも島には限らず」といふに依つておく。雲隱れ、葉隱れ、木隱れ、深山隱れなど何れもその障へる物を適確に指し示した用例なのに比べてどうかと傾かれもするが、朝靄を通して海の面を見渡して居る船が視野に隱れたのをやがて島山にかくれたとしたものであらう。尙いふならこれは唯遙かの朝霧の中へポツと消えたので「霧がくれ」とも謂ふべきだが語の重寢をさけたものともとれる。上の「朝霧に」の「に」を原因の「に」とすればどうしてもかうなるし、添加の「に」としても結局今云つた風の趣になる。舟をしぞ思ふ　舟をサしみ〳〵哀れと思ふ。「し」は強意。「舟惜しぞ」などとつては可けない。

講　仄々と夜が明けると明石の浦の朝霧（の中をこいで）往つて、やがて姿が見えなくなつた船をば（自分は）しみ〳〵物哀れに思ふ。

評　此歌は隨分異說の多いものだから讀者は充分比較玩味していたゞきたい。

先づ作者の位置については舟の中にゐての作だとも（餘材抄等）否對岸の淡路島繪島岬の北端岩屋の燈臺あたりから見ての歌だともいふ。（これは前あげたやうな有名な古人の註にはない）成程これは旅の部の歌だから作者自身が旅をしてゐる時の歌でなくてはならぬ、明石や岩屋の岸で咏んだとしては「海邊曉望」とも題すべきもので羇旅とは謂へない……と一應はさうも思はれようが、旅の歌とはいつも作者が徒歩か騎馬か車上か船舶

中かになければならぬとは限らない旅情、（卽ち旅愁でも旅興でもその他何でも旅についての高潮した感情）さへ主なる着想になつて居れば差支ないものと思ふ。で、自分は矢張明石の海岸から海を眺めたものととりたい。西の旅か、南の旅か……とにかく京を離れて二日路で昨夕この明石の浦について風待ち船待ちの一泊をとつて、翌早朝目ざめて海上を見入つて他の人の船出姿を見てつくづくその淋しさを感じ「あんなにして海に遠く渡航する身はどんなに淋しく悲しいことであらう」と一應は他を憐みつゝも「イヤ自分とてもいんまにこゝの浦回を船出して、あの調子で旅をしなければならぬ身だ」と一轉して自己を憐むの情と化し、他人の旅姿に自己の旅姿を見つけて寂しんだ氣持であらう。又さう解すれば趣もあり、旅の歌と謂つても宜いことになる。

播磨の南にはふたこ島・みなほし島・たれか島・くらかけ島・家島など數多の島々があるから島隱れといつた（顯昭）イヤそれは明石からは十五六里も隔つて居るから離朱と雖もそんな遠眼はきかぬ筈だ（契沖）

などの詮議もあるが、この一首の大切なのは前掲の餘情にあらう。

又この歌の作者を人丸とした左註は誤であらうといふことは、先覺の諸說が略一致して居る。人丸ならば筑紫へ下つた時の作として場所柄はよくあてはまるが、その時の咏とも見るべきは萬集三雜歌二五四

ともしびのあかしの大門（おど）にいる日にやこぎわかれなん家のあたりみず

とある。こゝの歌とても古めかしくはあるが、萬葉よりは一時代降つて王朝初期の作であらうといふことに古人先輩の衆說が一致して居る。風格のみならず、一つの動かぬ證據として引かれるものは、貫之が本集以後手をつけた新撰和歌の序に弘仁以前延長以後のものは入れなかつたと斷つて、この歌を再び入れて居るのに徵しても、已に貫之當時これを弘仁以後の作と看做されてゐたことがわかるといふのである。

（抑夫上代之篇義漸幽而文猶質。下流之作。文偏巧而義漸疎。故抽ㇾ始自二弘仁一至二于延長一詞人之作花實相兼上而已）

然るに藤原公任は三年の間この一首に沈潛してやつとその旨を解したとも、上品の上に位する最高の歌體としてめでたともいふのは要するに左註に煩はされたものである。（左註の作者を公任とする說によるとしても、公任自身はこれを人丸の作だと固く信じてゐたのでこの註を加へたといふことになる）歌聖人丸の作といふ先入主と云つた豫感に幻惑されたものである。（それは現代でいふなら某劍客がその人と知らずに故桂大將と試合した時は、物の美事に一本を取つたものが、後に桂大將と知つてからはどうしても勝てなかつた……といふそれと同じ心理である）又この左註を信じて後世俗間この歌を寢がけに三度讀誦すれば早起のまじなひになるともいふ。それに尙現在明石の市では驛近くに人丸神社といふがあつて、これが和歌三神の一つに入り祠は小さいが參り客は隨分多い。人麿と明石は萬葉にも歌があつて關係がないではないが、萬葉程度の交渉ならば何もあの樣に人麿を明石だけが獨占すべきではない。矢張これはこゝの名歌の作者としてのことであらう。嘗て或知人から一對の小さい水さしを贈られたことがあつた。それは雅致ある明石燒で人麿の像の上にこの歌を書いた釉畫が書いてあつたこの樣に、「ほの〻〳〵と」の歌は民衆的には最早人麿の作といふことになり切つて居る。處で今昔物語卷二十四の第四十五に、「小野篁隱岐國に流されし時和歌を讀む語（ものがたり）」と見出しを置いて、始めに「わだのはらやそしまかけて」の歌をあげて次に

明石と云ふ所に行きて其の夜宿りて、九月許りの事なりければ、明霧（あけぎり）に寢られで眺め居たるに、船の行くが島隱れするを見て、哀れと思ひてかくなむ讀みける、「……」と云ひてぞ泣きける。

これは篁が返りて語りけるを聞きて、語り傳へたるとや。

とあつて眞淵の打聽には此を證として篁の歌たと斷ぜられ、宣長も亦此に同じ故中村秋香氏も亦此に同意せられた。が金子氏は「若し篁の作だとすればなぜにこの前の「わたのはら八十島かけて」の續きに置かなかつたか、又なぜに一方に篁と名を出しながら一方によみ人しらずとしたか？ と謂つて否定せられた。この方が正しいと思ふ。少くともこの

撰集時代には筆作と信ぜられて居なかつたことだけは確實である。尤も撰の時は不明で、その後今昔の作者が他の筋から探知し得た新事實といふこともあり得ようし、又この歌の風格は大體筆時代のものでもあるから絶對に否定する譯にも行くまいが、大體今昔の記者は見えすいた嘘でもその話に確實性を帶ばしめる方便として、末段の「これ筆が返りて」式の附言をするから當てにはならない。現に直ぐ前の仲麿の「天の原ふりさけみれば」をあげて、その後にも「これは仲麿此の國に返りて語りけるを聞きて、語り傳へたるとや」とある。何ぞ知らん、その仲麿は途中難船に遭つて復々唐に戻つて終身我邦の土をふむ機を得なかつた人である。

あづまのかたへ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。三河の國の八はしといふ所にいたれりけるに、その川のほとりに杜若いとおもしろくさけりけるを見て木の蔭におりゐてかきつばたといふ五もじを句のかしらにするて旅の心をよまんとてよめる

在原業平朝臣

四一〇　から衣きつゝなれにしつましあればはるゝきぬるたびをしぞおもふ

考　詞書・作者　元「東國に、友とする人、一二人いざなゐて行きけり、三河の國八橋といふところに到れりけるに、この川の邊にかきつばたの○○おもしろく咲け○○るを見て、木のかげにおりゐて、かきつばたといふ五文字を、句のかみ○にすゑて、旅の心をよまむとて○○○　○○業平○○」

相「くのかしらごとにすゑて……」

頓「…やつばしといふ所に……」

顯「○○業平朝臣」

五句　元「こうをしぞおもふ」

新撰六帖六かきつばた・業平集・勢語八・今昔物語集廿四ノ卅五・謠曲杜若・小鹽　同。

補　あづまのかた　東國の方、三七四參照。友とする人　友だちと解いたものは誤ではないが、今日の語感からいふと一寸違ふ。此は伴侶とする人、で、旅のつれ〴〵を慰める道連の意である。今昔には親しい家來とあり、繪入伊勢物語などにも業平を主人他を下僕として描いてあるから、先づは氣のおけない家來と看て宜からう。八はし　廣文庫「やつはし」の處に海道記以下數種の引用文があつて故老の話や、懷舊の記錄やとり〴〵であるが單に「橋が多い」といふ意即ち「彌つはし」ととつたもの（橘庵漫筆……）はどうかと思ふ。こゝは矢張數詞の八つであらう。又溫故隨筆に昔この國の住人「ひでみつ」八歳の幼兒を亡ひ、その後生安樂を祈る爲めに橋を八つかけたといふのも話い難い。又こゝが最高地點で分水嶺になつて八方へ水が注いだとも想はれない。矢張こゝに堰關やうの水たまりがあつて下が泥沼で杜若が生え、田へ水を引く爲めに小溝が八方にあつてそれに一つ〳〵粗末な橋が架つてその橋の間々には杜若が咲いてゐたものと見て宜しからう。後世友禪などの八橋模樣は圖案ではあるが略右樣の景色を想像して意匠を施したものであらう。猶東海名所圖會三二九に、

八橋古蹟、池鯉鮒より八町許東の方、牛田村の松原に石標あり、是より左へ入ること七町許、こゝに一堆の丘山ありて、古松六七株其側に凹なる池の形の芝生あり、是れむかし杜若のありし趾といふ。北の方に遇妻川の流あり、こゝに土橋をわたす、これは八橋をわたせし流といふ、都て此の邊田畑にして、八橋燕子花の俤もなし、むかしは此所官道にして、今も鎌倉道の名ありて道幅も廣し、かの丘山に業平塚といふ石塔婆あり。後人準へ立つるものならん、又業平の碑銘なり、今八橋村無量寺へ移す。

この八橋については同國出身の先生が二人もあつて就いて聽いたこともあるが、明治以後は全く田野に歸して跡形もなかつたのを最近又手入をして大に舊觀を保つことに努めてゐるといふことで、又その附近には業平　父君阿保親王の墓もあるといふことであつた。杜若　又「燕子花」とも書く鳶尾科に屬する草花で、花菖蒲に似ては居るが葉に中肋樣の脈がない。又溪蓀にも似て居るが葉の幅が廣くて花が小さい點が違ふ。「かきつばた」といふ五もじを云々。此を「折句」といふ。物名・香冠などこの種の遊戯的文字技巧はし

まひに廻文歌とまで發達した。本文各句の頭の附圈の文字をつなぐと丁度「かきつばた」となる。これが折句といふもので物名といふのは次の部にあるし香冠といふのは、折句の上にもう一つ句尾の字を逆に拾つて意味のある一句を得るやうに工夫したもので、兼好法師がその親交ある頓阿にやつた無心狀「米賜へ、錢も欲し」の意を

よもすがらしれざめのかりほたまくらもまそでもあきにへだてなきかぜ

と歌ひ、頓阿の返事に「米はなし、錢少し」の意を

よるもうしれたくわがせこはてはこずなほざりにだにしばしとひませ

は名高い。廻文歌は上からよんでも下からよんでも同じ歌詞になるやうに工夫したもので、三月の寶船の歌

なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな

（「とおのねぶり」は十人同船の意とも長夜の眠の中に十界を流轉する意ともいふ）

の樣なものでもつとこみ入つたものは縱横斜とまるで十六むさしのやうな歌行のものもある。旅の心をよまんとて　元永本のやうにこゝで切つた方が宜しいが、それは後世振りで以前は重言を厭はず「よめる」とつけたものらしい。他にも類例がある　から衣きつゝ唐衣を着馴れるといふ意から次の「なれにし」につゞける序詞とし、尙このから衣を基調としてその緣語で一首を仕立てたもの　なれにし　馴れ親しんだ「し」は過去　つましあれば　妻がサ居ることだから、そして妻はから衣の緣語の寢の秀句でもある。はるゝきぬる旅をしぞおもふ　遙々とやつて來たこの旅をしみ〴〵寂しく思ふ哉、はる〴〵はから衣の緣語「張る」の「きぬる」は同じく「着ぬる」と「來ぬる」の秀句、但し「たび」に「足袋」と「旅」との秀句はない。（足袋をはくのは近古以後の風俗である（結句はこの前の「舟をしぞ思ふ」と同じ句法で旅をしぞ哀れとは思ふの意

東國地方へ親しい伴侶一二人誘つて往つた。（さて行き行いて）三河國八橋といふところにかゝつたのに、その川のあたりに杜若が大層立派に咲いてゐるのを見て、木蔭に休らうて「かきつばた」といふ五文字を句のかしらにする（折句として）旅の心を咏まうといふので作つた歌。都に永年馴れ睦んだ妻があることとて（今更のごと）遙々辿り來たこの旅をサしみ〴〵哀れに思はるゝよ。

折句の制約あるに拘らず序詞と緣語と秀句とを自在に驅使して、さながら折句の制なき自由さを以て咏んだ趣が何よりめでたい。それは形式的技巧の方面のことだが、この歌の感味はどうかといふに、氣を張りつめて道中して居る時はさもなくて、今この八橋におりゐて花でも見て休まうとなると氣がゆるみもし「同じくこの花を共にめでばや」の感もあり都とこゝとの遠隔さも犇と胸に迫つて都戀しく、旅寂しく「さて〴〵遠くも我は來つる哉」の感に得堪へぬといふのは如何にもあり得べき鄕愁であらう。即興の達者さと技巧の巧緻さとが加ふるに、この實感を併せて確かに業平が秀咏の一つである。

「こゝの詞書が伊勢物語張になつて居るのは始めの本集の體裁ではなかつたらう　これは始めもつと簡古な、他の詞書同樣の詞態でこの歌が採られたら、次に伊勢物語の作者がそれを骨子として小說化し、次に後人のさがしらでその小說化された伊勢物語の本文を本集に書き加へ、それが傳はつて流布したものであらう」といふのが多數古人の通說の樣になつて居る。之についての卑見は卷頭十論に述べた處を見ていただきたい。

とにかくこの歌のポピュラーなことは考の部に諸書を繰つてもわかるが尙川柳子が面白いことをいつて居る。

業平も飯喰うてから燕子花

これは伊勢物語に「餉を喰ひながらよんだ」とあるところから、藝術は生の餘裕に生まれることを俗化したものである。

業平も飯を喰はればがきつばた

管子の語に「倉廩滿則知禮節　衣食足則知榮辱」とあるそれから花と餓鬼とを洒落れたものであることはいふまでもない。

むさしの國と、しもふさのくにとの中にある角田川のほとりにいたりて、都のいと戀しうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐて、思ひやれば、かぎりなくとをくもきにけるかなと、思わびて、ながめをるにわたしもりはや船にのれ、日もくれぬといひければ、船にのりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらずさるをりに、しろき鳥の、はしとあしとあかき、川のほとりにあそびけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見しらずわたしもりに、これは何鳥ぞと。とひければ、これなん都鳥といひけるを、きゝてよめる。

四一　名にしおはゞいざ事とはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

考　詞書　元・筋「おなじ八武藏〇〇〇下つ總の〇〇〇中にあるすみだ川のほとりにいたりて、都のかたの戀しくおぼえければ、しばし、川のほとりにおりゐて、〇〇〇〇〇限なく遠くも來にけるかな、と思ひわびてながめ居るに、渡守はや舟に乘れ、〇〇日〇暮れぬといひければ、〇〇乘りて渡らむとするに、皆人もの悲しくて、京に思ふ人なきにしもあらぬに、〇〇〇〇〇白き鳥のはし〇〇〇〇赤きが、川の邊に遊びけるを、京には見えぬ鳥な〇〇れば、皆人見知らず〇〇〇〇〇彼れや何鳥〇と渡守に問へ〇〇ば、〇都鳥と云ふ。〇〇〇を聞きて〇〇〇」

業平集・六帖二部どり・勢語・新撰　同。

考　角田川　隅田川・墨多川・墨水などもいふ。源を秩父山の方から發し兩國の境を流れ……といふよりはこの流れを自然の境界として武藏・下總とわけたものらしい。隨てこの河の所屬は時代につれて相違があつて、この集當時（延喜）は下總に、壽永頃は武藏に永祿頃は又下總に貞享頃は又々武藏に屬し、以て今日に及んで居る。堯惠の北國紀行文明十八年十二月廿三日の條に

「……鳥越のおきな艤して、角田川にうかびぬ、東岸は下總、西岸はむさしのにつゞけり。利根・入間の二河おちあへる所に彼の古き渡りあり、東の渚に幽村あり、西渚に孤村有り、水面悠々として兩岸にひとしく、晩霞曲江にながれ、歸帆野草をはしかとおぼゆ、筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西に有りて、絕頂はだえにきえ、すそ野に夕日を帶び、朧月空にかゝり扁雲行盡きて四域にやまなし」

件の渡場は今の兩國橋の上手に在つて、今その近くに言問亭といふ茶店もあるとか、高安月郊氏の文集にも出てゐる。尙「すみだ川」といふ川、紀伊・出羽・駿河にもあるがそれは別である。わたしもり　渡守、渡し場の船頭、はし　嘴。都鳥　今いふ鷗のことだが、古今三鳥の一など謂つて勿體がつくにつれて色々の異說が出來、果ては梅亭鞠塢の都鳥考も出るやうになつた。「ミヤ〳〵と啼く小鳥だ（小野蘭山の木草啓蒙）」などいつたのは一向信ぜられない。江戸名所圖會七九八に

按ふに都鳥は鷗の一種にして、白鷗なる事決せり、羽の灰色なるもあれど背も腹も白きに、兩羽の纒き少し黑きもの多し、或人云、此の物に大小二種ありて、大なるは鴨の如く、小なるは鳩の如しと、又或人云、關東の海濱にありて、形大なるもの其聲猫に似たり、故に俗呼びて濱猫といふ、則ち食料とす、この河に居るものは小鷗なり、常は海上にありて風荒れたる時は、遙に波の靜なる水を求め來りて、こゝに泛び遊べりとぞ、其の餘所々にあれども、其の地によりて種々の方言ありて名を異にせり。

少々殺風景だが有德院殿御實記附錄（甲子夜話にも同樣の記事がある）に、將軍吉宗が都鳥の實物を見よう（夜話の方は朝廷よりの御めしによつてとある）とて、松下伊賀守當常に二羽射とめさせ、時の名畫工岡本善悅に寫生させたが矢張鷗であつたといふ。今當青森縣下八戸市鮫港の蕪島に海猫と稱して無慮幾萬と飛んで居る鷗を見ると濱猫といつたのも尤だとも想はれる）名にし負はば　都鳥と名に「都」と負うて居るからには、つまり「都」を冠した都鳥といふならば、「し」は强意、「名に負ふ」は單にそれを我よび名として持つことだが、後には「名にし負ふ」は評判の音に名高いなどの意となつた。事とはん　一つお前に聞いて見よう、「こととふ」とは古語では唯「口をきく」といふ意で、よく視詞などに「ことゝひし岩根木立」などあるのがそれだが、「とふ」といふ語尾に曳かれては後世では後にきつと疑問の「ありやなしや」などの詞が來るから綜合したところでは、一つ事を尋ねようといふ意に歸着する。わ

が思ふ人　我がいとしく思ふ人、我が親愛する人、妻子うからやから、親戚・朋友の類　ありやなしや　「居るかゐないか」も「生きてか死んでか」もよくない。「健在なりや否や」「愛人の近況果して今如何」の意であること、これが多數の解で、又穩當であらう。無論この語は「どうしてゐるか」といふ程のことを表したものだが「ありや」と正面から問ひ「なしや」と反面からも問ひ、そして詞書に「京に思ふ人なくしもあらず」といふのだから、結局「無事なかどうか安否の程が聞きたい」となる。

譯　武藏・下總兩國の境にある角田川の邊りまで來て、故郷都が餘り戀しく思はれたので、しばらく川岸にやすらうて、「あゝひどく遠くまで來たもんだなあ」と物思ひの眼であたりをと見かう見して居ると、渡しの船頭が「早く船にお乘りなさい。最早や日のくれです」と云つたので（それではとて）船に乘つて渡らうとするのに、一行の人々皆わびしい思ひをして都にいとしい人の無いものはなく（皆が云ひ合はしたやうに懷郷の情にしめつてゐると）その折柄白い鳥が嘴と脚との赤いのが川のほとりに遊んで居る。京近くには見えぬ鳥なので、誰も（何鳥といふことを）見知つて居ない（で）。船頭に「あれは何といふ鳥か？」と尋ねると（船頭は）「これがあの都鳥といふのです」と答へた。それをきいてよんだ一首。オイオイ、都鳥よ、お前は「都鳥」といふからには（都のことを知つて居らう）一つ物を尋ねよう。（それは）我が都にのこしておいた人々は今無事かどうか（知らせてくれよかし

評　胡馬は北風に嘶き越鳥は南枝に巢くひ、玄菲三藏は病んで故郷の食を望み、あらゆる七珍萬寶にもまして故郷の扇の布施に涙を垂れた。もと是れ人情の自然に出たもので、この郷土愛こそはやがて愛國心の主要成素をなすものである。業平の一行が都戀しの感に得堪へぬ折柄名も睦じき「都鳥」ときいてこゝまで情呼したのは決して突飛な誇張ではない。況んやその鳥は見るから可憐都雅這乎の情信に恰好の姿態を爲して居るし、その上僅かの音の相似にも直ぐと情緒を燃やす程秀句的語感の鋭尖な王朝人の歌としては、寧ろこの程度の表現が實感さながらであつたらうと思ふ。後のものだが俊基の關東下りに

大井川を過ぎ給へば都にありしを聞きて、龜山殿の行幸に、龍頭鷁首の船をうかべて詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ世の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ（太平記卷五）

とある。蓋しこの種の人情は古今同一轍であらう。否詩人ならぬ吾々すらも、故郷の地名を聽くと直ぐ一幅の畫面が髣髴するから之に感傷を加へて倍すれば業平のこゝの哀感に到達すると思ふ。要するにこの歌の長所は、人情不易の琴線に觸れて長へに旅の兒の共鳴をそゝる一點にあらう。その形式も上の句の情呼下句の偕調略々言はんとする所を言ひ得て居る。「心あまつて詞足らず」の評もこれには當るまい。

後世この一首の如何に人口に膾炙したことよ、齋宮女御集に

人を猶うらみつべしやみやこ鳥有やとだにもとふをきかねば

和泉式部集に

ことゝはゞ有のまに〳〵みやこどり都のことを我につげなん

續古今十八雜中の一八七六に

新院いまだ御位のとき都鳥の侍りけるを題にて人々に歌よむべきよし仰せられける時　少將内侍

吹く風ものどけき花の都鳥治まれる世のことや問はまし

拾遺雜賀の一一九三に

年月をへてけさうし侍りける人のつれなくのみ侍りければ、今はさらによにもあらじといひて後久しく音づれず侍りければ、かの男の妹うとにさきゝも語らひて、文など遣ばしければ、いひ遣しける　よみ人しらず

心有りてとふには非ず世中にありやなしやのきかま欲きぞ

新古今羈旅の九〇八に

伊勢より人に遣しける　女御徽子女王

人を猶恨みつべしや都鳥ありやとだにもとふをきかねば

新後撰八羈旅の五九三に

題しらず　法印清譽

都鳥幾代かこゝにすみ田川ゆきゝの人に名のみとはれて

を始め尙代々の勅撰集や家集にはこの歌の想系語系を襲いだものがまだ〳〵見られる。

一般文章の方にも北條氏康の武藏野紀行（永祿三年）に

大澤の庄など過ぎて漸く隅田川に付きぬ。川面を見れば、白き鳥のはしと足と赤きが多くむれゐて、魚をくふ有樣、昔をおもひ出て

都鳥隅田川原に宿はあれど只その人は名のみありはら

平家物語七「福原落の事」の末段に

波の上に白き鳥のむれゐるを見給ひては、あれならむ在原の某の、隅田川にてこととひけむ、名もむつまじき都鳥かなとあはれなり。

續々群書類從第十三、六九頁　惺窩先生文集に

角田川賦序

淺草之東畔跬步、而有二角田川一、輕舟短棹、浩歌一望、有レ鳥翩翩可レ愛、所謂嘴與レ脚赤者、昭二昭乎倭歌集中一、不レ問其名一、亦知レ爲二都鳥一、蓋名者實之賓也、故其鳴如レ有二京都聲一、予不レ覺發二鄉思一、南望北嘶、物尙然、況人乎、昔白氏左遷江州之湓浦一、而舟中聽レ彈二琵琶一者之有二京都聲一、淚濕二青衫一、千載之佳話也、于彼于此、江州之湓浦、江城之角由、舟中京客感二京都聲一者同、而所レ愧不レ能レ作二歌行一矣、雖レ然其鳥語之管絃、豈不レ及二商婦之琶絃一乎耶吁

飛鳴有鳥角田川　名曰京都聲自然　我亦舟中湓浦客　斷腸認作琵琶絃

最後に今一つ林羅山の七絕をあげる。

漾々溶々一葉身　河邊秋景只懷春　自從在五詠歌後　流水飛禽惹二殺人一

題しらず　よみびとしらず

四一二　きたへ行く雁ぞ鳴なるつれてこしかずはたらでぞ歸るべらなる

此歌はある人男女もろともに人のくにへまかりけり。をとこまかりいたりて、すなはちみまかりにければ女ひとり京へかへりける道に雁の鳴けるを聞きてよめるとなんいふ。

考　位置　爲四一四の次ぎにある。

三句　清・元「むれて來し」

左註　元「この歌、或人のいはく、男女〇〇ともに、人の國へまかりけるを〇まかりいたりける、すなはち、男身まかりにければ、女ひとり京にかへり侍りける道に、かへる雁の啼きければよめるとなむまうす」

新撰　同。

雜　きたへ行く雁　卽ち歸雁のこと。鳴なる　「鳴く」に「泣く」をかける。「なる」は咏歎、マアあんなにないてゐること、其聲を如何にも哀しと聞いたもので、下に「さてはあゝ雁も亦我如く」など補へば散文になる。つれてこし　打連れだつて來た。來る時一緒であつた。「つれてこし」は何となく引張つて來た、率ゐて來たと樣に聞えるが、前後の意から推すと互に打つれだつてである。「むれて」でも下の句にはよく續くが餘韻の哀愁がうすくなる。かずはたらでぞ　數は足りないでマア、なぜ數の不足を想ふかといふにその聲が餘りに哀しいからである。或は行雁の列やゝ疎疎のむらがあつて齒が脫けたやうな場合ならば、これは實景にも一致する。

又よしやさうした實景はなくとも、竿さし渡る雁がねをかういふ風に謂へば、讀者には鮮明な印象となる。歸るべらなる　歸るべくあるなる。「べく」は想像、「なる」は咏歎、歸るのであらうよあゝ。男女　ことばドの書樣によつて夫婦ととる。人のくに　地方の國。すなはち　卽ち、卽時に……と直ぐに。

語釋　北の國へ飛んで行く雁がマアあのやうにかなしさうに鳴いてゐること――（さてはあの雁もわたしのやうに始め）連れだつて來た（仲間に死んだものが出來て）數が減つて歸るのであらうよ。噫――。

評釋　左註はこの歌を歌物語化するやうな用意で、附け加へたもので、それが元永本のになると、益々この歌の作意を精密に散文譯して居る。が、此は恐らく後人のさがしらであらう。だが併し、よほどこの歌を味讀した人の巧に附けたものだと思ふ。それはこの一首の歌境をだん〳〵考へて見ると、つまりは左註の謂つてゐるやうなことに歸着する。抄には

是は滋春甲斐　國に女と下りけるが、男死て上るとて歸雁のなくを我身に思ひ合てよめる哀なる歌也。

とあるが、若それなら寧ろ哀傷歌の滋春の「かりそめのゆきかひぢとぞ」（八六二）といつた次位に配置する筈でもあり、撰者と同時代の滋春その滋春の妻をば「よみ人しらず」ともしない筈だから此は誤であらうことは、已に先輩の論斷もある。處が土佐日記の承平四年十二月二十七日に

廿七日、大津より、浦戸をさしてこぎいづ。かくあるうちに、京にてうまれたりし女子、こゝにして俄にうせにしかば、このごろのいでたち、いそぎを見れど、なにごともえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、かなしみこふる。ある人々もえたへず。このあひだにさる人のかきていだせるうた

みやこへと思ふもののかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

とある。これによると撰者貫之もこゝの歌と相似た不幸に遇つたことがわかる。宇治拾遺十二卷には右の歌を貫之作として、更に一層精しくその情趣を書いて居る。これもこの種の歌を味はふ一つの參考にならう。又同じ土佐日記承平五年正月十一日には

ふるき歌に「かずはたらでぞかへるべらなる」といふ事を思ひいでて

とあつて、この時も貫之この歌を「ふるき歌」といつてをる。ふるき歌とは大體本集よみ人しらずから萬葉、記紀の頃の歌を指していふのだから、少くとも貫之と同時代の滋春の妻の作でないことは確かである。

旅は人を感傷に誘ひ、同じ夫婦の情愛も家に安居してゐる時よりも旅に見聞苦樂を共にして居る方が一層濃やかである。そこで往きに夫と相携へて見た山川は依稀として、よく紫によく明らかに聳えも流れもして居るけれども、歸りは孤影悄然として、唯往返順逆の對照によつて思出の悲痛を增すのみである。斯る折柄行雁高く啼いて大空を飛ぶ。その聲悲しくその影寂しい。「さはれ天上の雁と地上の我よ、世に不幸なるものの極みを見せて汝は越路にかへり我は京に歸らうよ」となつて結句の餘韻は雁を懲むとも自己を懲むともつかぬ哀感が、ヴイオロンの一の絃を彈き流したやうにかぼそく搖曳するものがある。丁度文撰に謝靈運の句の　羈雌戀二雄侶一。幽鳥懷二故林一。　とよく似て居る。又無心に渡る雁を呼びかけて、「數は足らでぞ」と言ふのは卽ち感情の移入で、かうした同じ行雁も讐持ちの曾我兄弟の眼には又兄弟の主觀を投げた反映が見られる。

折節九月十三夜の、まことに名ある月ながら、隈無き影に兄弟は、庭に出でて遊びけるが、五つ連れたる雁がねの西に飛びけるを一萬が見て、「あれ御覽ぜよや、箱王殿、雲居の雁の何處を指して飛び行くらん、一つらも離れぬ中の羨ましさよ」弟聞きて「何かは然程羨むべき。我等が伴ふ者どもも、遊べば俱に打連るる、歸れば連れて歸るなり」兄聞きて「然にはあらず何れも同じ鳥ならば、鴨なも鷲なも連れよかし。空を飛べどもおのれおのれが友ばかりなる事ぞとよ。五つ有るは一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞ有るらん　吾殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿まことの父ならで、嬾しと思ふ其人の、行方も

敵のわざぞかし　…（曾我物語卷三、日本古典全集本による。（よく教科書に「空行く雁」と題して出てゐる流布本の曾我物語は右と少し行文の違つた點もあるが）とにかく空飛ぶ五羽の雁を見て一つは父鳥一つは母鳥殘る三羽を兄弟の子鳥とは、兄十郎の境遇から推した見立てで讀者の哀れを誘ふ文字である

東のかたより京へまうでくとて道にてよめる　　お　と

四一三　山かくす春の霞ぞうらめしきいづれみやこのさかひなるなん

考　詞書・作者　清「おとみふのましなりかむすめ」
元「あづまの方より、京に歸りける時　道にてよめる　壬生よしなりが　娘」
二句　六帖二都「霞ぞ春は」
おと　乙、壬生益成（よしなり）が女、益成は元慶・仁和の頃の人で仁和二年に播磨權少掾同四年二月に遠江介に任ぜられて居る。此遠江介在住はこゝの歌の解釋上參考にすべきである。東のかた　東國、逢阪の關以來の海道の國、尙三七四參照。まうでく　參（まゐ）出來の音便。山かくす　京近き山、こゝは少し强みを持たせて「山をかくす」とありたい。みやこのさかひ　都の境、都のあたりといふ程の意、「さかひ」は山城の國境鳥屋にとらない作者の地點の京よりの遠近で如何樣にもとれる。

講　東の方から京へ上つて來ようといふので中途で咏んだもの。山をかくす春霞が恨めしく思はれるよ（なぜかならば）どこが都のあたりであらうか（霞に隔ててよくわからないのだもの）

評　作者は都育ちの女性で、若くして父が遠江に赴任した時に連れられて彼地に行き任滿つると共に、今國廳を引上げて四年五年振の故郷平安の都にさしかゝる處と想ふがどうだらうか？　見渡すと音羽山のあたり、春靄濃やかに三十六峯の遠山も夢のやうに朧ろである。作者の胸には早くも朱雀大路の幻影、柳櫻をこきまぜた美しい通りに衣冠盛裝の公達や出衣晴れやかな貴女の牛車の右往左往が幻影となつて浮んで來る。隨分急いでは歸るものの矢の如き、歸心にはもどかしくてならない。その時作者は春霞を見て斯う怨言を並べたもので、霞の濃度必ずしも京の物象を覆ひつくす程でなくとも、本人が女性らしい無邪氣な純な焦躁が出て居る處が宜しい（若くは都へはまだ遙かながら早くも如上の憧れを以て遠望した表れとしても趣があらう）　夏冬の休暇に百里二百里と隔てた遠方から來て居る學生諸子が歸省の心境を反省するとこゝの歌はよくわかる。故郷といふものは始終に居てはつまらぬ處である。否、段々居れば色々嫌な話も聞かされて暗い心持にもなる處である。けれども、久し振に歸る日の汽車はもう十數驛前から次はどこ次はどこと計へて、いつも見つけた某驛プラットの柳をすら、「ウンあれも矢張あるな」といつた滿足を以て見い〳〵歸る。いよ〳〵我が町我が村にさしかゝると幾年胸に徂徠した道・川・橋・田圃・權兵衞・田吾作が次々現實になつて眼前に展開すると、もうすつかり明るい氣持になつて知らぬ野ら稼ぎの男女にすら、言葉をかけて見たくなる。この歸省の感は吾人の稀に經驗する純な感情である。で、この歌も形式は初句など稚拙ではあるが、歌つた情趣は人間の美しい一横斷面を示したものとして特筆すべきである。尙一〇九七のかひうたにもこの種の着想が見られる。

こしの國へまかりける時しら山をみてよめる　　み　つ　ね

四一四　さえはつる時しなければこしぢなる白山のなは雪にぞ有ける

考　六帖一雪　同。
こしの國　三七〇參照。　さて躬恒が越路へ行つたのはいつの事か？　契沖のみ甲斐少目時代のことかと想像で謂つて居るが他に餘り說もないし躬恒の官歷には北越の地方官に任命されたことはないやうだ。しら山　三八三參照

講　越の國へ住つた時白山を見て咏んだ。消えてしまふ時がないので越路にある白山といふ山の名は（アリヤ）雪（が

四季常住にあつて白い山といふ風に、アノ雪）から來たものであつたな（と、今面のあたり越路を道中して件の白山を見て始めて成程と合點がついた）

評 萬葉には富士山の雪を「みなつきの望に消ぬればその夜ふりけり」とあるし、後世芭蕉も羽州南谷の別院で「有がたや雪を薫らす南谷」と句し、當地岩木山なども山上一點の白斑を認めないのは八月のお山詣り前後極めて僅かの日數であるなど、雪が四季常住にあることは北の國では珍らしからぬ現象だが近畿地方、殊に京住の人にとつては確かに一つの驚異であつたらうとは思ふ。けれども形式があまりに散文的・説明的で、これでは唯「白山」の語義を釋明して前後にホンの一寸「けり」で咏歎した形になる。躬恒の咏一體に放膽奇警、確かに天才の咏と認められる佳作が多いが、時には蕪雜粗笨平語と選ぶところないやうなものがあつて、これは正しくその惡い方の代表歌だと思ふ。それさへあるにこの後尙も同趣の着想になる歌は、よしや多少の巧はあつても陳々他奇なしとも評すべきであらう。

俊撰八冬四八三　題しらず　よみ人しらず

あら玉の年をわたりてあるがうへに降つむ雪のきえぬ白山

新勅撰十九雜四、一三二一天暦の御時屏風の歌　信明朝臣

昔より名にふりつめる白山の雪井の雪はきゆる世もなし

あづまへまかりける時道にてよめる

四一五　いとによる物ならなくに別路の心ぼそくもおもほゆるかな　つらゆき

考 詞書・作者　三「きのつらゆき」（三本典鈔）

元「よめる」の三字なし。　貫之集七「人の國へ下るに…にてよめる」　拾遺六別三三〇「田舍へまかりける時」

二句　源氏物語總角「物とはなしに」とか貫之がこの世ながらの別をだに心ぼそきすぢにひきかけけんなど、げにふることぞ人のこゝろなのぶるたよりなりける」思出給。

三句　拾遺六「別路は一本別路の」

六帖四別　同。

補 あづま　東國地方、三七四參照。さて貫之が東國に下つたこと、いつのことか不明である。地方官として延喜五年以前に東國に赴任したことも物に見えない。（美濃介は延喜十八年二月）道にてよめる　途上の感咏であることを斷つて、別離の歌と違ふことを明らかにしたものである。いとによる物　絲の材料即ち繭や麻や綿の縷や一縷の極めて細い絲の類と想へば宜からう。とにかくこれを直ぐ縷絲それ自身のことにするのは穿しくない。別路　京を別れて行く東の旅路とする。語感からいへば今し方別れて片々の途につくその路と樣にもとれるが、こゝでは詞書と對照して前の樣に解く　おもほゆる　思はれる、心持の自然と進行して抑へられないといつた風の自動詞（ラ行下二活）「思はれてならない」といつた方が一層近い。

評 東國へ往つた時途中で咏んだもの。縷り絲による物でもないのに京を別れて行く東の旅路は（ナントひどく）心細く思はれてならない。

評 この歌、「別路は絲によるものではないのに」としたもの（宣長等）と別れて旅する心は絲によるものではないのに（多數の註）としたものと、別路は縷絲でもないのに縷絲が縷をもどせば片々に別れて細くなるやうに、京と東と片々に別れて心細いと樣に解いたもの（原本は見ないが金子氏があげられた中村知至の説）とあるが、歌そのものが纖巧な上にかうむつかしく解いては更に足をかけたやうなことになる。で、先づこの歌の產まれた次第を考へて見ると、作者は京の知るべの誰彼に訣れて「あゝ心細い――」と思つたのである。處で秀句趣味の發達した當時のこととて直ぐにその「心細い」の「細い」といふ語で、何ぞ云ひかけるものはないかと想を馳せた結果初句二句を考へて細いものには「絲」とし

絲をも一つ細かくよりを戻した一筋々々にまで想到してやがて右の様に咏んだもので、作意から見ると正しく、「この旅心は縫絲の代ではないのに」といふつもりなのが表れた形を文法的に見ては「別路は云々でない」となつたものと想ふ。四八三の戀歌などと照し合せて見ると縫絲・片絲と様の譬へは奈良朝時代から傳はつた當時の一般歌人のもつ聯想であつたらしい。で、後世の人々が見ては非常に尖巧に失した想のやうに誤られようが、當時にあつてはこれも即興としては、一節面白き歌とめでられたものであらう。

これを古今集の歌屑といふこと誰がいひかけて、何の書に早く載せたものか、文献の微すべきものがない。古註の一つの榮雅抄には出てゐてもこれより前、已に兼好が徒然草にいつて居るからむしろ徒然草の方が古く、恐らく當時の歌人仲間の言ひ草であらう。

徒然草十四段は兼好が歌道の見識を見るに足る好文字であるが、中に

貫之が糸による物ならなくにといへるは古今集の歌くづとかや云ひつたへたれど今の世の人のよみぬべきことがらとは見へずその世の歌には、すがた詞此類のみおほし。此歌にかぎりてかくいひたてられたるもしりがたし源氏物語には物とはなしにとぞかける。

とあるのは適評であらう。今日でも假に吾々に古今集一々の歌について採點をする僭越を許されるならば、此歌より低い點をつけたいものは澤山ある。これのみを歌屑といふ人、恐らく古今はたまきを見透してゐないのであらう。けれども特種の悲哀を盛つたものでなく唯「別れて行くのが心細い」といつただけで、單なる輪廓だけを示されたやうな氣がして、感味の惻々人に迫る激越さはない　これに比べると新古今卷十羇旅九六五の

吾妻の方へまかりける道にてよみ侍りける　民部卿成範

道のべの草の青葉に駒とめて猶ふる里をかへりみるかな

は作者その人（信西の子で、平治の亂によつて下野の八島へ左遷せられて行く中途、粟田口邊で咏んだ　已に悲劇の主人公である故もあるが、又我が乘り駒に秣かふことを口實に、一寸立とまつても「あはれ故郷よ――」と顧みるところ、馬は青草を悅び、主は京を懷かしむ二つの世界の對照が産むいぢらしさ、凡て詩材とするに足る哀感の流れがある。語感だけ技巧だけで仕立てた歌はどうしても感情が上滑りして讀者の胸を衝くやうな切實味が缺けてくる。

かひのくにへまかりける時道にてよめる　みつね

四一六　夜を寒み置はつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

考　詞書　元「甲斐の國にまかり侍りける時、○○○○○」

結句　清「あまたゝびねぬ」　新撰和歌「あまたたびねむ」

躬集上・新撰　同。

語　かひのくに　峡の多き國の義「四方山を以て圍はれてゐる山峡多き國といふ所から負うた國名。さて躬恒は寛平六年二月廿八日に甲斐權少目に任ぜられて居る。それなら三月に出發するとしても晩春であり、四月に延びたとしても初夏であつて歌詞の「初霜」と氣候が一致しない。けれども當時赴任や歸任の日取は極めて悠長なもので、國司の任が解けても百二十日間は元の官舍に住んで居て宜しいので、その期が過ぎると新任の國司が入る。それでもまだ別に恰好の家を借りて延滯して方々見物したり、送別の宴に招かれたりといふ樣だから、こゝも多分はその最大限即ち三四五六と四ヶ月を都で旅支度して七月に入つてから前任者の引拂つたあとへ移らうとて出發したものであらう。すれば七月は已に初秋であるから「初霜」といふに無理はない。まして「夜を寒み」とあるからには事實霜位はおりたことでもあらう。夜を寒み　夜分寒いので「寒み」と樣の句は上來度々あつた　置霜が地上に降ることを通常置くといふ。はつ霜　初秋頃におく霜。草の枕　上の初霜の緣語で、道すがら生へてゐる草を枕としての意、「旅」の枕詞ではない。あまた

たびねぬ　數多度、寢ぬ。度々寢た。「たびねぬ」は「旅寢ぬ」の秀句。

評　甲斐の國へたつ時途で咏んだもの。夜分（はめつきり寒くなつたので）初霜がおりる、その初霜を拂ひ〳〵草を枕の旅寢（の夢の）幾夜なゝを重ねた。

評　この歌はこの集としては珍しい率直な歌で、まるで近頃の生活派の人々の口吻そつくり、唯自分の生活を如實に短觀に投出した點が何より宜い。當時京より甲斐までは十三日行程とあるから、かうした旅寢は少くとも十回以上繰返されなくてはならない。それが今は中途でかう咏んだといふのだから、餘情には「まだ〳〵目的地へ着くまでには秋がだん〳〵更けて寒くこそなれ暖かくなる氣遣はない。さて〳〵旅は物憂いとは本當のことだなア」となつて詫しい旅情の體驗を響かせて居る。實に往昔交通機關の不便で旅行に困難であつたことは、かの記の日本武尊が屋張の尾津前で辨當せられた時そこの一つ松にかけたまゝでお忘れになつた御佩刀が、その後蝦夷を征伐して凱旋せられるまで元のまゝにあつたといふ一段や萬葉二の一四二有間皇子の

家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば　の葉にもる

などによつても察せられるがそれは上代のことで、この王朝期に入つてからの旅情は貫之の土佐日記、源氏物語玉鬘の卷の太宰小貳の上京など散文には數多いが、歌としてはそれ程多くはない。その點から謂つても珍しい題材である。

唯結句の「あまたたびねぬ」は何となく總括的な報告の體におちて、已にその詫しさが去つてから事後の表現のやうに聞えるのが宜くない。尤もこの缺は詞書が補つてはをるが、そんな補助をかりないで歌そのものの中に、現在その旅愁に當面してゐる現實感を含まねばならない。六帖の「寢む」は尚可けない。それならば都を出かけの歌になる。

たぢまのくにのゆへまかりける時にふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべける時に、ともにありける人々に哥よみけるついでによめる　ふぢはらのかねすけ

四一七　夕つく夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそ見め

考　詞書・作者　元・筑「但馬の國の湯にまかりける時○、ふたみの浦○○○○にとまりて、ようさりのかれいひたうべける時、ともな○りける人々、歌よみ侍りけるついでに○○○、　○○兼輔中納言」

兼輔集「但馬の國に下るとて二見のゆに宿りて」

二句　元・筑「おぼつかなきに」

三句　新撰「玉手筥」

四句　新撰「ふたみの浦を」

六帖・三うら・卅六人撰　同。

考　たぢまのくにのゆ　但馬國の湯、但馬國城崎郡城崎の溫泉（即ち湯島の溫泉のこと、先年大震災のあつた處）　ふたみの浦　播磨國加古郡二見村に在るもの、宗祇の句に

花を西に月かげ西に二見かな

二見の浦といふ地名で後世有名なのは伊勢ので、夫婦岩の日の出など殊によくもてはやされて居るし、但馬の城崎郡内川村のほとりにも二見の浦があつて、こゝも風勝の地であるところから土地の人は兼輔の歌も宗祇の句もこゝでよんだといふ（今はそんな景勝の地はない。尤も豐岡河の日本海に注ぐ河口日和山といふのは今も風景が勝れて居る）　かれいひ　乾飯・餉など書いて今いふほしい（乾し飯）のこと之を湯や水にひたして喰ふこと丁度軍隊の糧食の道明寺糒のやうなものだ。がこゝにいふかれいひは唯食事といふことで、彼の宮中の朝餉間なども天皇が朝餉を召上る處だか、その糒とは乾飯ではない。ともに「倶に」で「供に」ではない。同伴者といふことで從者といふのではないから。ついで　次手云々した時、云々するとの意で「……したその際」といふ程の心、今云ふ序もつまりは同じだが、今のは主に對する副本物に對する附けたり　樣にとられて居るが、この頃のは前にあげたものと同等關係で並べる

點がちがふ。夕づく夜「夕就く夜」ならば「夕方になつて　だが、こゝは「おぼつかなく」にかゝる句だから夕月夜と解く。夕月夜をおぼつかなしと歌つた例は

萬葉十春相聞一八七五の

春されば木のこのくれの夕月夜おぼつかなくも山陰にして

（二句一本木のくれおほき赤人集に「春くれば木がくれ多き夕月夜覺束なしや山陰にして」

六帖第五

はるがすみたなびくけふのゆふつくよおぼつかなくもこひわたるかな

金槐集　戀の歌の中に

夕月夜覺束なきを雲まより仄にみえし其かあらぬか

おぼつかなきを　はつきりしながらうものを、眺望が不明瞭であらうのにとゝの「を」は前件をらどいてよりよき後件を提出する氣味がある。玉くしげ　玉は美稱の接頭語、くしけは櫛笥卽ち櫛を入れるはこ、これは「ふた」の枕詞だがこゝでは「ふた」も「み」も「あけて」も皆、この語に寄せがあつてこれ等三語の總序詞的に働かせてあるから最も技巧の精緻なものがある　二見の浦　美しい櫛笥の「蓋と身」の秀句。あけてこそ見め　「こそ」に強調の氣味があるから明けて見てこそ見榮えがする　あけて見るのが宜いのであるとの意。「明けて」は櫛笥の蓋を「あける」といふにかけた秀句的な緣語である。

評　但馬の國の溫泉へ入湯に往つた時に、二見といふ所に泊つて、夕飯を食つたのに、同行の人達が歌をよんだ、その際、自分も作つたもの。（今は）夕月夜の（影で見るだけで、とかく眺望が）はつきりしないものを（それよりか）玉くしげの蓋身といふ名の二見の浦は（櫛笥の蓋をあけると云ふ樣に）今宵夜あけてから見た方が宜い。

評　表現技巧の精致なとは釋で說いた通であるし、この集の旅の歌としては珍しい題材を扱つて居る。そこには景勝の地に宿泊した餘裕が好笑となつて表れて居る。芭蕉は松島の一夜を「風雲の中に旅寢するこそあやしき迄妙なる心地はせらるれ」といつた。今見る二見が浦は宵闇の中に浮いて見えるだけで、到底その一々の勝れた物象を目睹し得べくもあらぬものだが、何れあすはゆつくり見られると思つて寢につくのも滿更惡くはない。その感じを二見の浦の名にからんで面白く咏んだ點が宜い。之を自分の經驗に照らして見ると、嘗て卒業生の記念旅行に和歌の浦に遊んで玉津島神社前の芦邊屋に投宿した處、この屋の風呂場は汐入の水田を隔てて一町程向ふにあつて、そこの前に金網を張つて鶴が二羽飼つてあつた。羅漢さん、歌がるた、トランプ、花合、滑稽女子大學、サーヴェーヂトウダンスと隨分はしやいで二時頃になつて床に就くとて一寸便所に行くと、手洗の向ふにはウツスラと宮山つゞきの松の葉越に「潟をなみ」あたりの漣漪が反映して見えた。「あゝ明日は一日あの景色を心ゆくまで見るのだ——そして船の中で賑やかな送別會を催す豫定になつてゐるのだ——」と思ふと、何とも云へぬ愉快な氣持になつて暫時は大切な子女監督の責任からすら解放せられたやうなくつろぎを覺えた。この心境は後日「和歌の浦」を思ひ出す毎にありゝと復活する。　兼輔のこゝの歌境がこれとそつくり一致しないまでもねらつた旅興には餘程相似たものがある。

尙又この歌ひ振によつて察すると、當夜坐にある人は皆二見が浦の風物について何とか彼とか歌つたものと想はれる處で最後に兼輔がこの一首を出して「景色は明日のことゝ」と宣告したので「なる程さうだ」と皆が口を噤んで寢について、云はゞこの一首が閉會の辭のやうになつた場面が想ひ浮べられる。

これたかのみこのともに、かりにまかりける時に、あまの川といふ所のかはのほとりに

おりてゐてきけなどのみけるついでに、みこのいひけらく（消息）　かりしてあまのかはらにいたるといふ心をよみてきかづきはさせといひければよめる（消息）　ありはらのなりひらの朝臣

四一八　かりくらしたなばたつめに宿からんあまのかはらに我はきにけり

考　詞書・作者　元「惟喬親王の狩しにおはしける時に、人々まかりて、天河の邊におりゐて酒たうべけるついでに、親王のいひけらく、狩して天の川原にいたれるよしをよみて、杯○させと云ひければ　○○○○○○○○業平○朝臣」

結句　今昔物語廿四の三十六「我はきにける」

新撰・業平集・六帖二・大鷹狩・勢語八一　同。

補　これたかのみこ　惟喬親王、一五〇四―一五五七、承和二―寛平九、二、二〇、五十四歳、文德第一の皇子で御母は紀名虎の女靜子即ち外戚は紀氏なので當時の藤原氏（良房）はその女の入内してお產みになつた惟仁親王（後の淸和天皇）を皇太子にしたいばかりに色々と迫害したので親王も始終御不快勝で遂に皇太子を御辭退になつた。こゝはその御辭退後のことである。尙御官歷は

天安元　四品　同二　太宰帥

貞觀五彈正尹　同六　常陸太守

で、最後の貞觀六年に御病を以て御出家法名算延と申して比叡の麓、小野の庵室に幽栖せられ、貞觀十六年には御親らは固辭せられたに拘らず封戶六百を增された。業平及び次に出る紀有常、並にこの期に有名な歌人敏行は皆姻戚であつたことは次の表でわかる。

紀名虎――有　常――女（業平室）
　　――女（敏行室）
――靜　子――惟喬親王

かり　伊勢物語には「櫻狩」とあるが、「かり」の原義は鷹狩といつて、飼鷹を放つて鳥を捕る遊獵のことで、雉・山鳥などを狩ることを大鷹狩といひ、鳴・鵜などを狩ることを小鷹狩といつた。この歌は六帖では大鷹狩の部に入れてある。（櫻や紅葉ならば特に櫻狩と　ことはり紅葉狩とことはるのが當時の普通の用語例である）あまの川　河内國交野郡に在つて、源を生駒の山中に發し、枚方町を縫うて淀河に注ぐ。傳說によると、昔仙女この川におりたちて水浴中羽衣を若人にとられて、やむなくその若人と夫婦の契りをこめ後

逢に大空に昇つた。（近江風土記余吾の天人とよく似た話だ）それよりこの川を天の川といふと。かりくらし　終日狩りをして、狩に日を／らして。たなばたつめ　棚機つ女、一七三參照。宿からん　宿をかりよう。こゝの「ん」は唯この三句だけでなく、初句からすつとに係つて居る。「日の暮れるまでを狩しよう。さうしてくれたら棚機つ女に宿をかりよう」といふのだ。（但し詞書を採るとすれば現在日が暮れて居る歌ともなつて「ん」は唯三句だけにかゝるともとれる）

補　惟喬親王の御供をして狩にいつた時に天の川といふ川岸で休んで、酒などのんだ時に親王がいはれるには「狩をして天のかはらに來た」といふ心を咏んで盃をさせと――で（自分は次のやうに咏んだ）。（さあ今日は）終日鷹狩をして暮れたら棚機つ女に宿を借りようよ、（なぜかならば）吾々は今（かの女神のゐます）天の川原に來てゐるのだものを。（「けり」の咏歎は始めの「さあ」といつた語氣に當ると思ふ）

評　歌境は詞書によると右の解釋とは少しちがふやうだ、詞書のはかりくらしてから川岸で咏んだとあるし、解釋では天の川といふところに來たについて、その川の名に歌興が湧いて云々と咏んだととつた。今この詞書の依據と想はれる伊勢物語八十一段を見ると

「……日暮になりぬ、御供なる人、酒をもたせて野より出できたり、この酒を飲みてむとて、よき所をもとめ行くに、天河といふ所に至りぬ。親王に馬頭大御酒まゐる。親王の宣ひける。「交野を狩りて天河の邊に至るを題にて、歌よみて杯はさせ」と宣ひければよみて奉りける……」

と、そしてこの直ぐ前には櫻見の記事があるから、右の解釋とは「櫻狩・日暮れ」の二點に於て相違して居る。

又「今昔物語集」の卷二十四第三十六には

「……亦此の業平中將、惟喬親王と申しける人の、山崎に居給へりける所に中將狩せむが爲に行きたりけるに、天の河原と云ふ所に下り居て酒など飲みけるに親王「天の河原と云ふ心を讀みて、杯を差せ」と宣ひければ、業平中將かくなむ「……」

（余一個の考では巻頭でも謂つた通り、大體伊勢物語の歌話の興味なそのまゝ、取容れた詞書の特殊なものとして、略右の勢語や勢語から派生したと想はれる本集の詞書や今昔の記事を信じたいと思ふが、何分にも伊勢も今昔も史實として信をおけないものなのと、右の詞書があまりしどけないのとで、その點どうかと躊躇する　で今暫らく普通の解に從つておく）

さてこの歌は「狩りくらし」といつて「とある里わに宿からん」とでもいふなら、極めて常識的だが、それでは歌にはならない。「棚機つ女に宿からん」といつた奇想天外式なのが詩的な放膽なそして又好色めいた警句である。そんな大膽なことをいつてどう收めるか？……と充分に讀者の好奇心を釣り出しておいて「なぜといふにこゝは天の川だ、天の川なら棚機つ女が女あるじではないか」といつた風に落したもので、讀者はこゝに至つて「成る程――、これある哉――」と感歎する。この行き方は業平が常に好んで用ひた手法で、亦常に成功を收め得た手法でもある。が、尙思ふに「天の川」と川の名をきくと何がなその語について洒落れて見ようといふのが當時の歌人通有の行き方でもあつたことは前の二見の浦・白山・都鳥・明石などを見てもわかる。物それ自身の眞髓を把握することを努めないで徒らに句々の言語の遊戯に得々として居たことは今日吾人の歌觀を以てすると、ひどく慊焉たるものがある。

みこ此歌を返々よみつゝ、返しえせずなりにければともに侍てよめる

四一九　ひとゝせに一度きます君まてばやどかす人もあらじとぞおもふ　きのありつね

考　詞書　元「親王、この歌を返々めでゝかへしなば○せざりければ、ともにありける○○○　○有常」

三句　元・筑「君なれば」　或抄　契沖「君までは」

四句　顯「ヤトカル人も」　清「やとかる人も」

六帖二六鷹狩・勢語八一・今昔物語集廿四の卅六　同。

種　きのありつね　紀有常、一四七五―一五三七、弘仁六―元慶元、六十三歳、仁明・文德・清和の三朝に歷仕し、從四位下周防守まで進んだ。三代實錄にはその人となりを「惟清簪有三儀望」とした。歌才に秀でてゐたことはこの歌や伊勢物語中に散見して居る即興で別る。尙前の歌の處參照。ひとゝせに云々　一年に一度御出でになる方卽ち彦星（豪牛星）のこと、一七三參照。

語　親王はこの歌（四一八の）をくりかへし〳〵見い〳〵してとど返しが御出來にならなかつたので、御供として行つて居たので（代りに）よんだ（返しは）、

「棚機つ女に宿を借りようなんて、そりや到底駄目でせう。（あの棚機つ女は、操の堅い女神で）一年に（たつた）一度お出での彦星樣をのみ〻待つて居るのでありますから、（決してあだし人に宿をかすやうなことはありますまい）

評　さそくの應答、「當意卽妙」とも評すべきもの、彦星・織姫を換言して「一年に一度きます君」「宿かす人」といつたのもよし、業平の好色めいた歌興を面白をかしくもどいたのもよし、唯この二首をとつていふなら有常は優に業平に伍して軒垪なき歌人のやうに見える位である。それにしてもこれは枕草子あたりによく見る、あの氣のきいた一分の隙もない對話を歌で行つたといふまでのことで、深刻な餘情などは見られない。唯明るい輕いホ、笑ましい高級な座興といふに止まらう。

尙伊勢物語は前掲の續きに

この歌を親王かへす〳〵誦し給ひて返し得し給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それがかへし

としてこの歌があり、今昔物語集には前段の續きに

御子の返しえしたまはざりければ、御供に有りける紀有常と云ひける人なむかくなむ

としてこの歌がある。これについていふことも略前と同樣であるから略しておく。（この歌古註・正義諧け難い解が多い）

朱雀院のならにおはしまし(三たり)ける時にたむけ山にてよめる　すがはらの朝臣

四二〇　此たびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまに〳〵

考　詞書　元・筋・祖「朱雀院の帝の、奈良へおはしましける時○、御ともにつかうまつりて、手向の山にて○○○」

新撰・六帖四たむけ・百ノ二四　同。

評　朱雀院　宇多上皇のこと、だから「帝」とつけるのは可けない。抄に「朱雀院は三條朱雀の御所也　おりゐの帝此院におはします寛平法皇の御事也。六十二代の朱雀院にはあらず」顯註に「朱雀院トハ寛平法皇ヲ申也朱雀院諡號之後ハ亭子院若ハ宇多院ナド奉レ書テ此院號不レ可レ書古今ハ延喜御時ナレバ如レ此書也」と尙二三〇參照。ならにおはしましける時　昌泰元年秋十月宇多上皇は貞數親王や菅原道眞などをお供に隨へ、手向山越に奈良に、奈良より高市郡の道眞の山莊へ、それから吉野の宮瀧を御覽になつて龍田の山を越えて河内に出て住吉神社に御參拜の上御歸京になつたその時のことをいふ。たむけ山　手向山、奈良市雜司町にある。こゝは以前東大寺境内に在つて寺務所のあつた處から町名にしたものだといふ。山城の京を立つて奈良に來る者は先づ奈良坂を越えてやがてこゝにかゝる處から、往昔道祖神を祭つて、旅人はこゝに幣を手向けたので自然手向山といふやうになつたのである。余は奈良そのものは度々往つて見たが、この手向山へはつひに參拜する機を得なかつた。唯春日神社の還向道の二月堂の近くに手向山と刻んだ石碑を見て「ハハアこの近くだな」と思つただけだ。物集高量氏の日本名所事彙に云ふ。

「手向山八幡宮、奈良市雜司町に鎭座す。天平勝寶二年の創建に係り、應仁天皇・姫神・仲哀天皇・神功皇后の四靈を祀り、別に仁德天皇を若宮に勸請せり。境内一萬四百廿一坪、現時の社殿は元祿四年の建立にして、社殿の岸に老楓多く、秋色方に闌なる頃に至れば、萬槍錦を織るが如し。」

と、萬葉六雜歌の一〇一七に

夏四月大伴坂上郎女奉レ拜二賀茂神社一之時、使二便歌一超二相坂山一望二見近江海一而喚頭還來作歌一首

ゆふだゝみ手向の山を今日越えて何れの野邊にいほりせん子等(子等一本「吾等」)

と、すれば古くから神社はあつたもので、そこが丁度奈良の邊堺の地點に當るので幣を手向けたものであらう。唯その規模が宏壯になつたのは近世のことと想はれる。此たびは　「今回は」「此旅は」との秀句　ぬさ　當時の風俗旅行く人が道祖神に手向けた幣帛、倘二九八參照。とりあへず　「取り堪へず」をとる。それを「取敢ず」にかけたもの。たむけ山　山の名にそなへるといふ意の「手向け」をかけたもの、前とつゞいて「取敢ず幣を手向けようといふ名の手向山」の意　紅葉の錦　紅葉を錦に暗喩して、こゝの紅葉が今眞盛りに美しいことを言外にほのめかした言ひ方　神のまに〳〵　神樣の思召のまに〳〵、神樣の御すきなやうにおとり下さい。

評　宇多天皇が奈良へ御幸の時に手向山で咏んだもの。今回のこの旅には(つまらない)幣もよう供へませぬ(といふのはこの山の紅葉が餘りに美事ですから、私どもはつまらない幣を捧げるだけの勇氣がありません。で)取敢ずこの山の紅葉の錦をぬさとして(お供へしませうからどうか)神樣は御隨意に(あの錦繡の美を御もてはやし下さい)

評　一首の主想は「手向山の紅葉今盛りにして、その美言語に絶す」といふのを美的に婉曲に表さうといふにある。實に奈良の晩秋十月の手向山は二月の花よりも紅なる錦繡の美で、主從一行等しく「あゝ」と見惚れた結果遂に公をしてこの秀咏をなさしめたものであらう　この歌の解に「急遽倉皇取るものも取敢ず出で立ちし旅なれば、手向けの幣も用意せず」と解いたり、「今回は上皇の御供に立つたこととて公けの幣はとにかく、私の幣はえ捧げずの意」と解いたりするのは例の字面に拘つて琴柱に膠する流儀である。よしや上皇忍びの御幸と謂つても、親王や右大臣をお供につれて前云つたやうな當時としては大旅行をなさるのに、いくら取急がれたからとて幣の御用意をなさる暇がない筈はないつまりこゝは幣は幣として型の如く手向けて、あまりの美しさに一行がそこで暫らく休んで、その紅葉を見はやした時菅公は「こゝの紅葉の美しいことは……とでもいひたい位だ」といつた氣持を、風雅に巧みに歌はれたものと見るのが妥當であらう。尤も公は高市郡に別莊を有つてゐる人だから、これ迄度々こゝに幣を手向けて越した筈だから初句「こ

のたびは」は「いつもとはちがつて」といふ餘情はある。あるにはあるが、このちがひは「上皇の御供だから私の幣は……」といつては拙い「紅葉がこの通り美しい盛りの道中だから」といふ爲めの斷り樣と解きたい。和魂漢才とまで博く推すことは出來ないまでも公が漢詩と和歌の兩方面共に傑出してゐたことは、彼の二七二と共にこゝにもしるきものがあつて眞に敬慕の至に堪へない。着想自然、措辭も亦自然而かも餘の歌人が一つを取り容れても得意の鼻を蠢かしさうな秀句や暗喩が平然としにうまく運用されてある。

四二一　手向にはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさん

素性法し

考　詞書　素性集「朱雀院の御ともに仕うまつりて手向の山にて」

三句　清「きるへきお」　筋「きりつべし」　相「きるべきを」

釋　つゞりの袖　僧衣の袂、衣の袂、漢字で納衣又は衲衣と書いて古代印度の僧侶は小巾（こぎれ）を貰ひ集めてそれを綾り合せて衣としたといふ、その起りを國語にしてつゞりの袖といふ。さてこの古代僧衣の名殘は卽ち袈裟といつて此に五條・七條衣・大衣の種別を分け、總稱しては三衣といふ。（大袈裟とはこの大衣の謂か？）阿含經が始めこの袈裟の功德を說いたものが多いが、要するに五色の正色を避けて他の色を選んで作り、諸惡煩惱の兆しを防ぐといふに歸する。

釋　（道祖神への）手向草には（幣がなければこの）衣の袖を切つてもお供へすべきだが（そんなことをしても、こんな美しい）紅葉を嫌といふ程見馴れて居る神樣は（そんなきたならしいつゞりの袖の）なんかは入らないといつて）お返しになることであらう。

評　作つたのは前の菅公のと同じ時である　菅公とは別の方面から手向山紅葉の美を歌つたもので、當時素性は石上の良因院在住であつたといふ、僧は僧らしくつゞりの袖を持出したところも宜しく、そしてそのつゞりの袖を切つて幣にしようといふ思ひつきも成程と肯づかれるが、若しこれを實行するとしては餘り醉狂過ぎることになる……と思つて居ると「紅葉にあける……」と下の句を出して結局そこの紅葉の稱讃に落した奇巧、凡手の企及すべかざらるものがある。唯一つ「きるべきを」がちと堅すぎる。何となく義務づけられる窮屈さがある、「きらましを——」きりたい位に迄私は思つてゐるのだがとしたいと思ふが、どんなものであらう。ともあれ菅公といひ素性といひ恐らくこの行歌人の錚たるものではあつたらうし、かうしたお供をつれて風流の旅をあさられた寬平法皇の御滿足もさこそとお察し申すことが出來る。さてこそこの法皇は後年非常に旅をお好みになつて熊野御參詣のお供が「うらみやすらん」（大鏡にある）とお諫め申すやうなことにもなつたかのやうに拜せられる。

第十　物名　序説

物名、「もののな」とよみ主として物の名を題にして、そを咏み込んで別の想を産み出すものをいふ。で題は大抵名詞だが時には名詞以外の條件を歌ひ込むこともある。その起源は何時頃とも定かには判らぬが、歌集に見えたのは此が始めてである。恐らく王朝斯道の勃興と共に始まつた一新體であらう。漢詩には早く離合詩といふのがあつて、或は仙を離して初めに「人」をおき終りに「山」とおき併せれば「仙」になるやうに工夫したり、又は「仙靈」と様の二字句を離して初めに「仙」をおき終に「靈」をおき併せれば「仙靈」になるやうにする。又黄絹幼婦を「絶妙」十八公を「松」、木母花を「梅」と様の字喩的句法もある。で、物名の源流の一つはこの漢文學の修辭から來て居ると想ふ。次に我邦人の秀句趣味もこの態を作る上に關係がある。一語兩義を極端に悦ぶ風が言靈の信仰となり、枕詞となり、序詞となり一般秀句とまでなつたが、猶もたの傾向を彌が上にも延長したものが物名であるとも見られる。今一つは當時の歌風も考慮の中に入れる必要がある。その階級は上流に限られ、その環境は山紫水明とはいへ狹い平安京に局限せられた王朝人の生活は小さく整つたものになるより外はなかつたのである。狹いといつてもこの美なる小平安京にも作者が詩眼を鋭尖にするならば、泣くべく笑ふべく怨むべく歎くべき題材は無盡藏にあつたらうが、彼等は傳統的聯想を重んじて、自然物も自然現象も人生の種々相に至るまでも、祖先か支那人かに暗示せられた部面のみを眺めて敎はつた通りの思惟形式にはめて鑑賞したものである。こんな調子でいくら歌を咏んでも、大した個性を發揮することが出來なくなつた。かうした着想に行詰つた彼等が何とか斯道の新型をと纖巧な工夫をめぐらして産まれたものの一つが、この物名であると見るのも不妥當ではなからう。それは庭球でも水泳でも三絃でも自轉車でも、乃至爾餘何種の遊藝雜技でも一通り定まつたことが遺れる

やうになれば、それで滿足といふのでは本當の愛好者ではない。更に所謂曲藝なるものを工夫して庭球ならば相手がグラウンドに書いたサークルのどこへでも球を打込むとか、水泳ならば宇治河の先陣の型をやつて見るとか、三絃ならば撥の代りに茶碗で彈くとか、白轉車ならば兩手を離してポケットからシガーと隣寸を出して一服吸ひつけながら方向變換をするとか、とにかく一般人のむつかしがることをして悦ぶのが藝道通有の心理である。で古今集の歌人は一般咏歌の程度では自家雕蟲の技を滿たすに足らずとして、こゝに物名なる曲咏みを始めたものである。と斯う觀ることは更に一層妥當であらう。

ではこの種の歌は從來斯道の先覺が批評した如き、單なる文字上の遊戯で純文學の見地から觀ては一顧にも値しないものであらうか？　余思ふに決してさうではない。抑も我邦人の藝術に表れた國民性としての一特徴は限られたる小範圍に無限の技巧を施すにある。築山を見よ、盆栽を見よ、洲濱を見よ、盆景を見よ、島臺を見よ、更に一寸六分の金の觀音像を見よ、五六分大の煙草入の根〆を見よ、豆粒大の腰下げの彫り物を見よ、更に〳〵一つの胡桃に百匹の猿を彫り、一枚の唐紙に千羽の鶴を書きわけた技術を見よ、拘束の自由化、有限の無限化、縮小の偉大化、小宇宙の大宇宙化これが日本人の創造した藝術である。だからこゝに物名といふ限定があれば、題材はそれだけ極限せられた譯で、丁度彫刻家が椰子の實に彫るところを胡桃にせられたのと同じわけである。この限られた狹い範圍をうまく利用して、出來るだけ自由に美しい世界を産み出すことは決して無意義ではない。短歌そのものが、三十一音に調へられねばならぬといふこと夫れ自身已に一つの窮屈な拘束ではないか、して見れば物の名はむしろ高次の拘束で和歌の成長した一つの現れとも謂ふべきものだ。余が前任地時代最終の假寓は大阪市西區鶴町三丁目の市營住宅で、數十個並んで居る住宅は敷地も間取も水道の設備も電燈の取付も皆一手で、室取りの如きもちつとも違つてゐない。門をくゞつて狹い路次、入つて玄關そこが二疊こゝが四通八達の衝で、直ぐ右の開きを開けると雨縁右に六坪の小庭があつて松一株、紅葉一株、南天數

株、葉蘭幾枚、縁の端に便所、便所の一方は共通の壁でお隣の便所につゞき、玄關の開きの奥まつた右に入ると六疊の座敷一間の床に一間の違ひ棚と袋棚その奥が四疊半の茶の間、その次は板間と漆喰でこゝが勝手口、玄關眞直に行けば一間半に半間の廊下を通つて直ぐそこの勝手元に通じ、その廊下の左には玄關から直ぐと二階に通じ、二疊の小間と六疊の座敷（こゝはやゝ念入の設備）分不相應の廣い長方形の物干兼バルコニーと大體こんな配置であつたが、偖て此に入る人は十人十色で醫師と、會社員と、教師と、隱居夫婦と人樣々なだけ中の調度やしつらひも個々別々で、矢張一軒々々その家毎の個性があつた。（酒に醉つて歸つて誤つてお隣の路次を入り玄關まで上つて、やうすが變なので一べんに醉がさめて散散詫言したなどいふ笑話もあつた）これが丁度この物名の方で同じ「かたの」を咏むにも忠岑のと兼輔のとはそれ〴〵別種の趣があるのとよく似て居ると思ふ。で、物名は少しも作者の個性を發揮し得ないものとは思はれない。

だが併し本當に優れた物名を咏み得るものは、餘程機智に富む老大家でなくては不可能である。この部作者の歌ひ振を見ると、流石に貫之のには凡手の企及すべからざるものがある。他の撰者の作が餘り出てないところから考へてこの「物名」は實に貫之が得意の壇上なので、亭主の好きな赤烏帽子においたものの樣な感じがする。八雲御抄には物名の難易巧拙の論が少しばかり出て居るが、今この古今集の物名のみについていへば　一概に物の名といふ中に

一、「うぐひす」と題して歌にも鶯をよむもの。

二、「すもゝのはな」と題しながら「鶯」をよむと樣に題と主想と別々のもの。

三、「やまがきのき」と題して歌句も「秋は來ぬ今やまがきのきりぎりす」と樣に題と全然同じもの。

四、「さうび」と題は濁つて居るのに「我はけさうびにぞ見つる」と樣に歌句では清んでゐるもの。

五、「かはたけ」と題は清んで居るのに「さよふけてなかばたけゆく」と歌句では濁つてゐるもの。

六、四三九や四六八のやうに他の技巧を雜へて本格的な物名でないもの。

などがあるが、愚考では二と三の技巧を以て題そつくりのかなをつかつて、題とはかけはなれた奇想を天外より落下させて、而かもその題に囚はれたあとのないサラ〳〵と自然の調をなしたものが一等望ましい。が、それはむつかしい要求であるだけによくこの格に合致した好咏はいくらもない。さうなると物名といふものは極めて退屈極まるもので、どうも讀みながらもうんざりする。まして一々之を解釋精評することは唯忍耐力の鍛練といふだけで、外に何の得る所もないやうにさへ思はれる。その上、よしや以上の要件に適つたとしても之を歌の第一義的なものとまで高揚することは到底出來ない。眞の歌、眞の詩といふものは己むに己まれぬ自己內心の情緒が辛うじて見つけた噴火口でなくてはならない。己むに己まれる王朝人が欠呻の代用位に心得て間の延びた歌ひ方をしたものはよし秀咏であつても、それは遺憾ながら第二次藝術即ち工藝美術品程度の美と謂ふに止まると思ふ。

第十　物名

うぐひす

藤原としゆきの朝臣

四二三　心から花のしづくにそぼちつゝうくひずとのみ鳥の鳴くらむ

考　詞書・作者　六帖一雫「貫之」
　元「驚　〇〇敏行〇〇」
　三句　清「そぼちては」
　敏行集・卅六　同。

語釋　心から　己が心より、自から求めて。そぼち　濡ち、ひどくぬれること。うくひず　「憂く干す（乾す）」と「鶯」とをかけていふ。乾ないのが苦しいと。鳴くらむ　「らむ」は上に「など」を補つて、なぜに……と鳴くのだらう。「鳴く」は「泣く」をかけて見る。

評釋　我と自ら求めて、花の雫にぬれそぼちながらなぜに乾かないのでつらいと（いつて）なくのであらう。

評　物名の題はなるべく假名書にした方が宜い。元永本のは宜くないと思ふ）、この歌は餘り詩味がない。

ほとゝぎす

四二三　くべきほどときすぎぬれや待佗て鳴なる聲の人をとよむる

考　詞書・作者　元「郭公　讀人不知」
　二句　筋「ときすぎぬれば」
　四句　相「なくなるとりの」
　五句　清「人をとゞむる」

語釋　くべきほど　時鳥の雄の心になつていふ。己が伴鳥のやつてくる時刻。ときすぎぬれや　時過ぎぬればにや「や」は疑問、時が過ぎて遲くなつたからか。待佗て　わびしく待つて、待ちあぐんで。鳴なる聲　「なる」は味歎アレあの樣に鳴いてゐるアノ聲が。とよむる　とよませるひどく動かす。

評釋　（時鳥の雄鳥は）己が妻鳥の來べき時刻が過ぎたからか、待ちあぐんで鳴くあの聲がひどく聞く人を感動せしめるよ。

評　詠み込みの箇處に理があるために拙い。隨てこの解には
　一、單に時鳥の戀なよんだもの。
　二、寄二時鳥一戀とも謂ふべく我待つ戀を下心にして味んだもの。
　三、イヤこれは戀歌ではなく、人が時鳥を待ちわびて持たせぶりに遲く來なくと、人は待ち焦れて居ることがひどいのでそれだけ仰山に騷ぐの意。
としたものとあつて、三種とも尤もでどれをも否定することは出來なからう。それは一にこの歌の表現の不明瞭なるが爲めで、その不明瞭は物名詠込に因はれたのが原因である。

うつせみ

四二四　浪のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかなからんや

在原（清の）しげはる

考　作者　元「〇〇遜春」

三句　清・爲・相「みだれたる」

六帖六　せみ　同

考　うつせみ　空蟬、唯「蟬」のこと、尙七三參照。　玉ぞみだれける　波のしぶきを直ぐ「玉と」暗喩したもの。はかなからんや「や」を反語ととれば

袖ではかなく消えようか消えはしない

咏歎とすれば

袖ではかなく消えてしまはうよ

疑問とすれば

袖ではかなく消えてしまはうか？

である。そして次の返しと對照すると一は拙いが二と三とは何れも聞えるからこの二つの中何れかであらう。

講　（今は暫らく三に從つておく）浪のうつ瀨を見ると（美しい水の）白玉が亂れて居る。（あれを若し）拾つて入れたらはかなく消えてしまはうか？

評　うつせみ咏込の上の句は自然にスラリといつて居るが下の句が拙い　晦澁でもあり詩趣も缺けて居る。忠岑の歌才をなぞらへほめたといふ說（契沖）は諾ひ難い。

返し　　壬生忠岑

四二五　たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなんそれとうつせみんかし

考　詞書・作者　元「反。　○○忠岑」

六帖六せみ　同。

考　たもとよりはなれて　袂を別にして、袂以外別に

講　（さうかといつて）袂以外別に玉を包むものがありませうか、（何もありますまい。で矢張あなたはあの玉を）袖に移して「これがあの玉である」とお見せ下さい、すれば私も拜見しませうよ。

評　物を包むは袖袂に限ると觀た在來の着想を同じ物名の「空蟬」で返したものである。

この次に元永本・筋切には左の一首が入つて居る。これは通常墨滅の歌一一〇一に位するものだ。で、解釋はそこへいつた時にする。

ひぐらし　　貫之

そまびとは宮木ひくらしあしびきのやまのやまびこ聲とよむなり

うめ　　よみびとしらず

四二六　あなうめに常なるべくもみえぬかな戀しかるべきかは匂ひつゝ

考　詞書　元「梅」

講　あなうめに　痛憂目に、嗚呼憂目に、「あなう」で切るあゝ悲しいことだ。めに常なるべくもみえぬ　目に常住見られさうもない、（今は美しく咲いて居てもやがて散つてしまひさうだ）戀しかるべき　「べき」は推量散つての後も戀しくあるであらう處のかは匂ひつゝ　香は現にプン〳〵と匂ひつ匂ひつして居る。

評　あゝ憂いことかな（この梅の花は）眼には常住見て居られさうもなく（やがて移ろひさうだ）ナ、（そのくせ散つての後いつ〳〵までも）戀しく思はれるであらう處の香は鼻に馥郁と薫つて（生憎に物思ひを增さしめることよ）

評　「うめ」を入れたが爲めに矢張初句に無理があつて、目と鼻の對照も鮮明でない。その上「べく」「べき」の重複も煩はしい。

かにはざくら

四二七　かづけども浪のなかにはさぐられで風ふくごとにうきしづむ玉

考　作者　清「きのつらゆき」三「三条流きのつらゆき」

三句　元「ざくられて」

六帖六かにはざくら　同。

かにはざくら　花の美しい樺櫻を云ふ　古今要覽四に「かばざくら三種あり、空穗物語源氏等に見えたるは、赤紫色の花なり又一種樺茶色の花をもいふ。又一種は筒にふく樺をいふ、空穗物語吹上の上云ふ『大なる松に藤かゝりて廿丈ばかり波だちたり、それにつきてかばざくらひとなみ〳〵たちたり……』按ずるに、こゝに櫻の花といへるは單瓣白花、かば櫻といへるは、重瓣赤紫色の花をいふなるべし。源氏物語野分云ふ『春のあけぼのゝかすみのまより、おもしろきかばざくらのさきみだれたるをみるこゝちす』按ずるに、こゝは紫のうへのけだかくきよらなるをよそへたれば、筒まくカバザクラにはあらず花を賞する櫻なる事論なし。」と、古註に朱櫻だとも櫻桃だともあるが、皆違つて居る。かづけども「潜く」とは水をくゞりわたること、今俗に「すりを抜く、抜手を切る」などいふに當る。水をくゞつても。

評　水をくゞつてみても波の中では探り當てられないで（ねて）風が吹くとそのたび毎に浮きつ沈みつするその玉はよ。

評　「蜑が水の玉を美しと見て、そをとらうとしてもとられない」といつた心ばへで、可なり巧く咏みこなせてをるが、尚詩味索莫の憾がある。

すもゝの花

四二八　今幾日春しなければうぐひすもものはながめて思ふべら也

考　三句　元「うぐひすの」

六帖六すもゝ　同。

すもも　李、桃に似て味が酸つぱいので酸桃といふ。

評　もういくらもこの愛すべき春がさ、ないからアレ鶯までもそれを惜しんで物思ひに沈んでゐるやうだわい。

評　同じ貫之の一二八の歌と同じ型で、寧ろこの方がなだらかな位だ、我が惜春の情を鶯によせて而かも餘り語調を破して居ない。思ふにこの物名が特に貫之得意の歌戯であつたことはこれにもしるきものがある。

からもゝの花

四二九　あふからももものはなほこそかなしけれわかれん事をかねておもへば

考　作者　三　清原ふかやふ（或無　別名抄無）」

帖六からもゝ　同。

からもも　杏、あんず）のこと、韓桃の義であらう。辛桃の義としたのもあるが杏の實は梅よりは甘い。

評　逢ひながらも、別れのつらさが早くも思はれて矢張物悲しく思はれることかな。

評　嬉しかるべき逢瀬の悲しきは別離の豫感によるといつたもので、在原滋春の三七二と同趣だが、二三の句物の名を入れたが爲めにたるんで見えるのが瑕だ。

たちばな　をののしげかげ

四三〇　足曳の山たちばなれ行雲のやどり定めぬ世にこそ有けれ

考　作者　元「小野滋蔭」

釋　をのの　しげかげ、小野滋蔭、仁和四年二月十日大藏小丞を振出しに從五位下・周防守・信濃介などの叙任を經て寛平五年四月廿九日掃　頭を拜命し同八年に亡くなつた。足曳の　山の枕詞。

講　あしびきの山をはなれて行く雲の（行く手定まらぬ如く）人の世といふものは落ちつきどころの定まらぬものだなあ。（上句は序詞）

評　萬葉の沙彌滿誓が「世の中を何に譬へん」と咏つた頃から、この種の人生觀はよく歌人の口に上つたが、この歌は物名に些の拘束も受けないで、スラ〳〵と咏み得て居る。一説にはこれは「山たちばな」（卽ち藪柑子）の隱し題であつた（上田秋成）と。それならば一層巧緻と評すべきであるが、そんなことをいふならこれは元「山」と「橘」と二つの物名を咏んだとも臆測されるから、今は矢張傳本の通りに「たちばな」だけを採つておく。

をかたまの木　ともの り

四三一　みよしのの吉野の瀧にうかびいづるあわをかたまのきゆとみつらん

考　三句　元「うかび〇づる」

五句一本「きゆとみゆらん」

釋　をかたまの木　今の廣心樹のこと。古今三木の一つとして古來所説區々

一、天皇御即位の時に使ふ三笠の山の松の枝をいふ（愚秘抄）。

二、交野の御狩に鳥をつけて奉る鳥柴をいふ（同上）。

三、薩摩がたの鬼界島・屋久島・兀了島の内に、をがたまの木といふもの有りとぞ、其の屋久島より得たるもの、津國灘吉田氏に秘藏す。花は紫瓣黄蕊、實は橘柚類となん、是れ往古よりある物かしられど聞くまゝに記す（閑田耕筆）。

四、招魂の護榊のこと（和訓栞）。

五　一説に門松の下に立つる木をいふと（同上）。

六、をがみたまの木、卽ち玉柏（茅窓漫錄）。

七、岡にある樣のこと　眞淵）。

八、廣心樹（安齋隨筆・古今要覽）。

古今要覽四の五九六に云ふ「をがたまの木は、日向國にある樹の名なり、葉のさまは榊などのやうにて、表青く、裏にみあり、實は數十顆房をなして、一顆宛殼われて赤き子のあらはるゝこと辛夷の實の如し。樹に香　あり。漢名いまだ詳ならず、今は諸國にもうつしうゑて、肥前・丹波等にも大樹あり、伊勢國にはもとよりありといふ」

安齋隨筆六の一九六に云ふ「……誠のをがたまの木は日向國高千穗峯に有り、神代の古跡なり、其の木　實赤くして、一所に多く集りて、鈴の形の如し、日向の人其の枝を折りて江戸の人のもとへ送りしを見たりとて我が友のかたりき、日向に此の木ある事を知らぬ人、三木の傳をば作りしなるべし……享保の頃にや日向の領主牧野氏をがたまの木の花も葉も實も畫圖にて公に奉りしをうつし傳へたり」

尙今の大日本國語辭典には植物學的に正確に記されてある。それを摘要すると

廣心樹…、黄心樹とも書き木蘭科をかたまの木屬の常綠木で

一、高さ　六丈内外に達し。

二、葉は　長楕圓形又は長倒卵形。

三、花は　微黄を帶びたる白色(小木蓮とも謂ふべき樣)。

四、實は　圓形又は楕圓形で簇り結ぶ。五、用途は暖地に自生して觀賞用建築用にする。

こゝ樹を咏んだもの外にこの集一一〇二に一首あるだけなので、自然歌人の間に難解とせられたらしい。(それは僻案抄などを見てもわかる)あはなか云々　「か」は疑問の倒置で泡がサ遠くからは玉のやうに見えよう。

講　みよしのの吉野の瀧に浮んでゐる泡が遠くからは玉のやうに見えて(しかも泡沫の常として直ぐ消えようのに、その消えた時も亦)玉が消えると樣に見えることであらうか。

評　結句「玉の消ゆと見ゆらん」としたものも惡くはないと思ふ。これは下の句の「泡結べば玉浮ぶと見え、泡消ゆれば玉消ゆと見えむ」といふ所を中間を省いて兩端をとつて「泡をば玉消ゆと見ゆらんか」となつて簡淨きはよろしいが、上句は移る句で、泡の浮ぶことが何も吉野川固有の特徴ではないのだから。

山城の音羽の瀧に浮び出づる

みちのくの最上の川に浮び出づる

どこでも五七五音に調べられる川ならば差支のない處だから宜くない。この次に傳爲家筆本には左の一首がある。此も臺消の歌で本書では一一〇二で解く

カケリテモナニヲカタマノキテモミムカラハホノホトナリニシ物ヲ　勝臣

やまがきの木

四三二　秋はきぬいまやまがきのきり〴〵す夜な〳〵なかん風の寒きに　よみびとしらず

考　初句　三・清・元・筋「秋立ちて」

結句　三・清「風のさむさに」

講　やまがき　山柿、和名鈔十七卷に鹿心柿(夜末加岐)柿之小而長也と、そこで横井千秋がこれは今信濃柿、又は吉野柿といふもので、その材は黑柿といつて細工に用ふると謂つた。處が大日本國語辭典には「柿樹科柿樹屬の落葉喬木、柿の一品種、果實は正圓形にして、大きさ金豆(コキンカン)の如く、枝上に簇りつき、熟すれば淡黄色を呈するもの、老木の心材は黑色にして、盆・箱などに作り、未熟の果實より渋汁を製す。まめがき。やましぶ　ぶだうがき」とある。念はこの種　ことには疎い者だが、關西地方で信濃柿といふのは今の甘納豆大の長楕圓の實で一所に簇りなつて、青い中は渋いが霜が降り出すと急に赤らんでそれを喰ふと種はなくて味はモチ〳〵と粘つて甚だ甘味である。嘗て余の幼時、丁度日清戰爭の時村に一人の風流人があつて

一日に足らぬ茶のこやしなゝがき

と「信濃柿」と「支那の餓鬼」とを洒落れて喝采を得たことも覺えて居る。これは實も美しいし葉も細長くて綺麗だが、その材が黑柿であるかどうかは知らぬ。…右の辭典の形正圓形渋汁をとるに使ふ云々と云はれるのは關西地方(と云つても余の鄕里附近だけかも知れぬが)で「せんごう」と云つてこゝの解說をつくり正圓形で赤くなつても渋いので、ちぎつて摺鉢に入れてうませて味を出すが、大抵は青い時にとつて渋汁を絞る。で余の想像では千秋の說が正しくて辭典の記事は余の知つてゐる。信濃柿とせんごうとが混線した解說のやうに思ふが、何分にも不確實であるから、この點大方の高敎を俟つ。(因に、當弘前地方で活花にする山柿といふのは又それ等ともちがつて、扁平な圓形の小粒で色は赤樺色である)。

講　秋が來たので今や籬のきり〴〵すは風が寒いので夜毎々々に鳴くことであらう。

評　山柿はなだらかに歌ひこめられて居るが、「今や」といふ語は現前當面の強い言ひ方なのに「夜なく」と長い現前しない連續時を「鳴かむ」と想像にかけたので、想の開展龍頭に始まつて蛇尾に終つて居る。隨て一首旨と秋そのものの風物を道理で説いたやうなものになつて居る。

あふひ　かつら

四三三　かくばかりあふひのまれになる人をいかかつらしと思はざるべき

考　詞書　清「かつら　あふひ」
五句　三・清・相「うらみざるべき」

類　あふひ　葵　これは「ふたばあふひ雙葉細辛」又は賀茂葵と謂つて心臓形の葉が二つ宛相並んで對生、(併し葉柄は長い)するもので小野に自生する馬兜鈴科の蔓草である。賀茂の神山にこれが多くあつて、明神の御託宣によつて賀茂祭には氏子は皆擬て神官から配られたこの草をかざす(紙葵をも「あふひ」といふがそれとは別である。かつら　一九四參照　此も賀茂祭に飾る。この桂と葵とを併せてかざすことを諸靈といふ。

語　これほど逢ふ日少く、離れがちになる)人をどうしてつれないと思はずに居られようぞ。

評　離れ方の對手を怨んだ繼歌だが、作つたやうな歌で、情熱の迸りとはとられない。結句は「うらみざるべき」の方がよく續く。

四三四　人めゆゑのちにあふひのはるけくばわがつらきにや思ひなされん

考　なし。

類　なし。

語　人目を憚るので　あれ)以後(再び)逢ふ日が遠のいたならば(先方では人の氣心も察せず)自分がつれない爲めと樣に(誤解して)怨めしく思ふことであらう。

評　「わがつらき」と思ふものを第三者の世間の人々と解いたのが大分あるが、これは前の歌に對して「返し」の作意を立てたもので「御身がお思ひになりませうが私は決してさる譯ではなく云々」と辯解したものと思ふ。作者も前と同一の人で、一人で怨み手になつたり怨まれ手になつたりして奇才を縱横に發揮したものであらう。

くたに

四三五　散ぬればのちはあくたになる花を思ひしらずもまどふてふかな

僧正遍昭

考　作者　元「〇〇遍照」
結句　六帖六くたに「惑ふ今日かな」

類　くたに　苦丹、これが又解説區々になつて居る。
一、萩の小さきやうなる花　教長卿注
二、この花比叡の山の無動寺と甲す所に多く侍る者也　顯註
三、木蘭(こだに)とあつて虫の名　或説
四、蔦の類　榮雅抄
五、苦膽と書いて龍膽の一種、藥草也　異名分類抄
六、酸漿(ほほづき)(苦耽)　前田夏蔭　屋代弘賢(古今要覽)

物　名　四三四・四三五・四三六

七、梔子　字書、打聽
八、芍藥　或說
九、牡丹　餘材抄

今は斷定を避けておくが、次の「さうび」との排列振から察し源氏物語乙女の卷の「北ひんがしは涼しげなるいつみありて、くたになどやうの花のくさ〳〵うゑて、春秋の木草その中にうちまぜたり」とある記事から察してどうも夏の觀賞植物で、花の咲くもの、餌ち牡丹、芍藥などが近からうとは想ふ。あくた　芥、ちりけがれ。

聞 散つてしまへば、後には芥になる花をば(それとは)知らずにまあ(あの樣に)蝶が(あこがれ)惑うて(飛んでゐる)ことかな。

評 色則是空の理りを狂蝶花に戯るゝ樣によそへたもの、而かも道歌じみたる嫌味もなく佛道と歌道の妙諦を悟得した歌體に綺羅を飾りて花見かな

やこれと同じでもつと露骨な上島鬼貫の

骸骨の上をよそうて花見かな

と相似た想でもあり、若し作者に寓意の深いものがあつたとすれば、當時在朝幾千の戀にうきみをやつしてゐる公達や宮女に向つて頂門の一針を刺したものとも想はれる。

さうび　つらゆき

四三六　我はけさうひにぞみつる花の色をあだなる物といふべかりけり

考 六帖六さうび　同。
さうび　薔薇、今云ふ「ばら」「ローズ」の類、もと支那から渡來したものらしく、それで音讀して「さうび」といつたものであらう。枕草子に「さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむづかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黑木のはしなどのつらに亂れ、さきたる夕ばえ」とあり當時已に女流が鑑賞の對象にまでなつてゐたことがわかる。うひにぞみつる　初めて見た、この「見た」といふのを「花」にかけるのと「花があだなものだといふことを」にかけるのと二色の解がある。一首を幾度も咏んで見ると、どうも後の方がよささうだ。遠鏡の解も同じである。

聞 わたしは今朝初めて見た花の色は(由來うつろひやすいと聞いたが)なるほどあたなものだといふことを。

評 若し花を初めて見たといふのなら、「私はけさ始めて花を見たが、それはどうも浮華なものといふべき有樣であつた」となる。するとそれは、今咲いたばかりの花になる。前のやうに解くとそれは散り方の花になる。が、前の「くたに」と類想を並べたものでもあり、下の句の思ひ入つたいひ方は花のあだな事實を眼のあたり見て言ひ定めたものと想ふ。何れにしても初二句の語が雅醇を缺いて居る「うひにぞみつる」などは當時にあつても普通の歌語ではない。餘材抄に催馬樂高砂に「けさひらけたる初花に」とあるのを引合せてあるが、それは唯「けさ」と「切」と「花」とが入つて居るだけの相似であつて、催馬樂の方の句は綺麗な形である。

をみなへし　とものり

四三七　白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にもいとをみなへし

考 友則集　同。

聞 玉にぬくとや　玉として貫かうとてか。さゝがにの　元は蜘蛛の枕詞、今はそれを質名詞として用ひたもの、語義は一笹に物名四三六・四三七・四三八・四三九

巣くふ蟹」とも「小やかな蟹」とも「笹の根の如く込み入つた巣を組む」ともいふ。いとをみなへし　絲を皆綜し、「綜る」は「延える」の約、絲を引かけること、（機絲を綜るなどいふ）それにをみなへしをかけたもの。

語釋　白露（が美しいのでそれを）玉として貫かうとてかアレあの様に蜘蛛が、花にも葉にも悉く網の絲を張つたことよ。

評　かくして玉が宿れば二二五のやうな美觀が生ずるから、それを餘情にした點はよろしいが、結句の口調がなだらかでない。

四三八　朝露を分そぼちつゝ花みんと今その山をみなへしりぬる

考　四五句　清「いまその山を」元「今ぞやまのをみなへしりぬる」
友則集　同。

異文　なし。

語釋　朝露を分けて衣物をびしよ濡れにしながら（あちらこちらを歩きまはつて）今日こそは野山といふ野山をみんな經めぐつて知つた。

評　元永本の「山野」でも聞えぬことはないが、矢張「野山」といふが普通である。抄に「今日其山を」と解いたのは誤であらう。

四三九　をぐら山みね立ならしなく鹿のへにけん秋をしる人ぞなき

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふ五もじを、くのかしらにおきてよめる
つらゆき

考　この一首筋切になし
詞書　清「……くのかしらに……」三「……くのかしらに……」
拾遺十七雜秋一一〇二「女郎花といふことを句のかみに置きて」
初句　顯「チクヤ山ニ」
四句　拾遺一一〇二「經にける秋を」
五句　拾遺一一〇二「知る人の無き」
六帖六女郎花　同。

異文　朱雀院のをみなへしあはせ　二三〇參照。くのかしらに云々　所謂「折句」の歌。折句のことは四一〇參照。たぐら山　三一二參照。立ならし　立馴らし、立ち舞ひに足を馴れさせ。へにけん秋　これまで經たであらう處の秋。

語釋　朱雀院の女郎花合の時に「をみなへし」といふ五文字を句の頭において（所謂「折句」といふものに仕立てて）よんだもの。小倉山（に永年）立ち馴らしつゝ鳴く鹿が、これまで幾らの秋を經たであらうか、それを知る人は誰もない。（が隨分久しいことになるであらう）

評　風物の印象深いものに遭ふ毎に、それが經過した年所に想到することは李太白の「把酒問月」の中の句に

青天有レ月來幾時　我今停レ盃一問レ之
人攀二明月一不レ可レ得　月行却與レ人相隨
……
今人不レ見二古時月一　今月曾經レ照二古人一
古人今人若二流水一　共看二明月一皆如レ此
……

とある通である。土佐日記の終によると貫之の舊宅はこの小倉山下が通過點だから、峰立ならし鳴く鹿は實感でもあつたらう。嵯峨上皇栖霞寺を設けて庭苑の泉石雅趣を極めさせられたけれども、西の京は次第にさびれて慶滋保胤の西京賦となつた。けれども殿上人の川遊遙や春秋の雅遊は、何處を措いても、先づこの嵯峨の方に足が向けられたかうした名所の運命を背景にして今鳴く鹿は去年、去々年、三年前の秋と幾世々に呦々の調べ哀れに秋を奏でたことであらうといふこれがこの一首の餘韻である。同じ貫之の家集にある

さを鹿のなのへにさける秋はぎをしがらみへぬる年そしられぬ

よりもこの方がすぐれて居る。

きちかうの花　とものり

四四〇　あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆく

考　友則集・六帖六きちかう　同。

釋　きちかう　桔梗とも苦梗とも書く。和名抄に「ありのひふき」とあつたがこの頃凡て「きちかう」又は「ききやう」と字音そのまにいふ。その方が口調が佳いからであらう。秋の草花中殊に艶麗を以て優ることは世々の歌句に多い。

講　野邊はもう秋近くなつたなあ(それで)白露おく草葉も(此迄夏草の青々とした風情はなくて段々秋らしい)色に變つて行く。

評　青草白露の對照もその一方の青草が早くも秋色に色變へて見えるといつたもので、これまで作者は夏の朝の野邊の景を日毎見馴れてゐたこともわかるし、風物推移のきざしに敏感なこともわかる。說をなすものあり上の句は初秋の形容だのに下の句は中晩秋の形容で矛盾して居ると、成程「色變りゆく」を必ず草葉の黃化し褐化し凋落し來つた色とすればそれは中晩秋でなくてはならぬが、こゝはさうした際だつた變色ではなく、鋭尖な感覺を有する野景の鑑賞者にのみ氣づかれる「けはひ」の變化ととれば何の無理もなく作意に沿ふことが出來る。

しを　よみびとしらず

四四一　ふりはへていざふるさとの花みんとこしをにほひぞうつろひにける

考　四句　元・筋「こしをにほひに」　六帖六しをに　同。

釋　しをに　紫苑、毎春舊根より新芽をふいて高さ五六尺(弘前のはもつと高くのびる)莖葉共にこまかな鉤刺を密生し、葉は長楕圓形又は廣披針形で一見蕪青の如く數個の粗大なる鋸齒を具へ、下程大きく、上程段々さ小くなつて居る。初秋の頃莖の頂に多くの淡紫色の頭狀花を開く。菊科植物の一種で和名「能之」といひ又「しこのしこぐさ」「鬼のしこ草」など歌句によまれて居る。ふりはへて態々、二二參照。ふる里　生れ故郷でもなじみある郷でも、歌枕として名高い里でも、舊都でも何れも差支ない。にほひ　香とは違つて花の色澤をいふ。

講　わざ〳〵、サア故郷の花を見ようと(大した意氣込でやつて來たのに、早や)花の色澤は褪せ衰へてしまつてゐることかな。

評　句調なだらかならず。拙作である。

りうたんの花　とものり

四四二　我やどの花ふみしだくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

物名　四四一・四四二・四四三

考　詞書　清「りうたむのはな」元・筋「りうたうのはな」
二句　元・筋・相・八帖・友則集「花ふみちらす」三「花ふみしだく」
四句　清・顯「野ハナケナルチ」
結句　友則集・爲・相「此處にしも鳴く」元・筋「こゝにしもすむ」清「こゝにしもなく」
釋　りうたん　龍膽、又りんどうともいふ。和名元やみぐさ又　苦草龍膽科に屬し、その葉笹に似てゐるので笹りんどうともいふ源氏の紋所は之を圖案化したものである。秋の暮に尺一寸許の紫碧色の筒狀花を開ききびやかである。昔から藥草の中に入れ今日でも日本藥局法で健胃劑の中に入れてある。ふみしだく　蹂躙する、ふみにじる。とりうたん　鳥をば打たう、打たうといつても棒切でなぐらうといふのでなく、礫などを投げつけよう位のところ、否礫を投げでもしてやりたいといふ憎しみの心持を表したに過ぎぬ語。のはなければや　鳥の遊ぶ野原が無いのかして。こゝにしもくる　「しも」は強調の助辭、行く處はいくらもあらうに意地わるくこゝにばかり來るよ。
譯　我宿の花をふみにじる鳥は礫でも投げつけてやりたい（程憎い、一體彼等の遊ぶ）野がないのかして、場處もあらうに（よりよつて意地わるく）こゝにサやつて來るよ。
評　意味はよく聞えるが、何の詩味もない平叙歌である。

をばな

四四三　ありとみてたのむぞかたきうつ蟬のよをばなしとや思なしてん　よみ人しらず

考　二句　元「たゞへぞ難き」
四句　筋「世をはなきとや」

釋　たばな　尾花、薄の穗のこと、薄（芒）は山野に自生して毎年舊根から新しい莖葉を出して高さ四五尺に達し、秋になると莖頂に花穗を出して小花を纏る。その形獸の尾に似て居るので尾花といふ。此亦秋の山野に一種の風情あらしめる景物である。ありと見て云々　一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電（金剛經）などいって、あらゆる實在の頼むに足らぬことをいふ佛教的な思惟である。世の中の事々物々凡て恒久不變なるものなく、有爲轉變頼みをかけることはむづかしい。うつ蟬の　「世」の枕詞、七三參照。よをばなしとや云々　此世は空だと觀じて居よう。
譯　有りと見て頼みをかけることはむつかしい（此世の凡てのものは而かくはかないものだから）うつせみの世は一切空と思ひあきらめてゐよう。
評　「尾花」はうまく姿をかくして咏み込まれて居るが、歌としては唯「色則是空」をことわり得た釋教歌といふに止まる。類咏六帖一かげろふに

ありとみてたのむそかたきかげろふのいつともしらぬ身とはしるゝ

けにごし

四四四　うちつけにこしとや花の色をみんおく白露のそむるばかりを

考　作者　元「矢部名實」筋「矢田名實」三・清・相「やたべのなざれ」清脚に「一首目云矢田部名實大内記昌泰三年率」
五句　顯「ソムルハカリソ」
釋　けにごし　牽牛子、これは槿だなどいふ説もあるが、今は通説に從ひ且つ和名抄によって「あさがほ」ととっておく　支那では花の時には牽牛花、實藥用の時には牽牛子又は牽牛子丸と書く。我邦ではどちらも牽牛花と書いて居る。うちつけに　卒爾に、だしぬけに、こゝは「輕卒にも」の意。こしとや云々　濃しとや（「來しとや」は誤）色が濃いなどと見るべきであらうか「や」は反語。

釋 花をばだしぬけに(何の分別もなく)色が濃いなどと見て宜いものであらうか、否あれは花の上に置く白露が(假に一時)染めたばかりであるものを。

評 露をまつまのはかない牽牛花の形貌が或程度までは描かれて居るが、矢張理窟に墮して居る。

二條后春宮のみやすむ所と申ける時にめどにけづりはなさせりけるをよませ給ひける　文屋やすひで

四四五 花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなる時もがな

考 詞書・作者　元・木・筋「二條の后のまだ春宮のみやすん所と申しける時に、かめにけづりばなさせりけるをよませたまひける」　○○康秀」

結句　元・筋「なるよしも哉」　爲「なる時もなく」

釋 二條后云々　八雲照。めどにけづりばな　蓍萩に造花、蓍萩又鐵掃帚」とも書き、苣科萩屬の多年生草木で、葉は三個の小葉より成る複葉が互生し、花は蝶形花にして白に紫のまだらがあるがあまり引きたたない。果實は短い莢に實のり、莖は高さ二三尺にまで成長し、篠竹が用ひられる以前はこの莖を用ひて之を箒といつた。(以上大日本國語辭典による)削り花とは木を削つてその削り屑に色をつけて花形に造つたものをいつたが後には木片でなくとも、紙や絹で拵へた造花をも削り花と謂つた。さてこの蓍の削り花即ち蓍萩の莖に造花をつけたものは、御佛名の飾りに用ひたことは代々の歌集に澤山その例があるが、少くともこの二條の后の頃には、一般裝飾として用ひられたといふことはこゝの詞書によつても察することが出來る。これを古今集三木の一として秘事扱ひしたのは例の因はれたる典型の弊である。中にも「めど」を「馬道」などしたのは非常な曲解である。めどとは「女戸」で「妻戸」のことだといふ說(愚秘抄など)も話けられない。中に稍道理ある考證は安齋隨筆一〇の三二二に

「貞丈按に、康秀か歌には、ケヅリバナにかゝはらずメドのみをよみ入れたり、メドにケヅリバナをさせりければとは、メドといふ草の形をけづり花にさせたりけると云ふ事なり、メドを妻戸として「させりける」と云ふをさしはさむこととするは誤りなり。」

といふのだが、これとても若しこの說の通りならば「けづり花をめどにつくりて」と樣に、もつとはつきりした詞書がある筈だ。よませの「せ」は使役私にお咏ませなされた。花の木にあらざらめども　(見はやすやうな花の咲く木ではなからうけれども、(めどは木ではなく草であるが、「めどき」などいつてトひにつかふ)ふりにし　年老いたる。このみ　此身即ちわれと、「木の實」とをかけたもの。なる　成り出づる、立身榮達する。木の實が枝になる、これも秀句。

釋 二條の后をまた東宮の御息所と申上げてゐた頃、蓍に削り花を挿したのを歌にお咏ませになつた時に咏進したもの。この蓍は花の木ではなからうけれども(珍らしくもこれこの通り花が)咲いたなあ、(これを見るにつけても)ふるい木にも木の實がなると樣に老いぼれの私にも成り出づる時あれかしと(切にその事を希望する)。

評 題は唯「めど」の二音を隱せば宜いので、物名としては、やさしい方だが、「枯木に花」といつた風の驚異から一轉して古木に木の實・此身に榮達と運んだ字練はなか〳〵の巧手である。唯その落想が自己中心の榮達欣求になつたのは氣品に於て野卑でもあり露骨でもある。八番の作と相對照すると、作者が東宮御息所に歌の寵を得てゐたこともわかる。花を哀訴の便箋位に心得て始終縋る心持を寄せてゐたこともわかる。

しのぶぐさ　きのとしさだ

四四六 山たかみつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞちりける

物名　四四五・四四六・四四七

考　作者　元「〇利貞」
　二句　六帖六しのぶ草「峰の嵐の」

釋　しのぶぐさ　瓦葦・事無草・やつめらんなどもいふ。羊齒類に屬し葉の長さ三四寸裏に主脈の如き中央葉脈の左右に黄褐色の子囊群があつて丁度八目鰻の鰓孔に似て居るので八目鬮といふ。通常、樹皮・岩面・古い屋根瓦などに生へる。一説にこれは古い軒や荒れた宿などに生える苔類の總稱だ　野々口隆正など）ともいふが、矢張前述べた方が確かだ。又今日軒などにさげる釣葱といふがあるがあれは全く別である。匂ひもあへず　美しく咲くや否や、「匂ひ」は美しく咲き映えること、「あへず」はあわたゞしい有樣

評　物名の體は得て居るが、これでは平談俗語とかはりはない。

やまし　平あつゆき

四四七　郭公みねの雲にやまじりにしありとはきけどみるよしもなき

考　清・相・顯　こゝに一一〇三の歌がある。
　二句　元「みねの雲もな」
　五句　爲「みるよしのなき」

釋　やまし　山羊蹄、和名鈔に知母とあるもので、後世「はなすげ」といふ草、百合科知母屬の多年生草本、根は根生で細長い。花莖は葉間から抽出でて高さ二尺許、上に穗狀花序を著け夏季に淡紫色の六瓣花を開く、我邦至る處で觀賞用として栽培せられ根莖は藥用に使ふ。からすすげ・からすのすゝき・やまとゝころなどもいふ。平あつゆき　篤行、從五位上與我王の二男で寛平五年文章生に補し、爾後伊勢權少掾・式部少丞・同大丞・參河守・從五位上・加賀守　筑前守兼小貳を歷任して延喜十年正月に卒した。ありとはきけど居るといふことは聲で聞いてわかるけれども、時鳥が鳴くことを「名のる」といつて己が名たてて鳴くからこの句は一層かなつて居るはわかるが姿はいくら見ようとしても）見られない。

評　「一聲は月が鳴いたか時鳥」の句のやうにこの句も「一聲は雲がないか」と大空を眺めつゝ時鳥のなく音に諦聽しつゝある作者の態度がありゝと見て、逸興ありよく時鳥の飛び方鳴き方を寫して居る。この部としては佳作の方である。

考　元・筋にはこゝに一一〇三の歌がある。

からはぎ

四四八　うつせみのからはぎごとにとゞむれど玉の行へをみぬぞかなしき　よみびとしらず

考　詞書　清「題唐萩」
　四句　元「魂のゆくゑを」

釋　からはぎ　韓萩と宛てて山萩卽ち木木の萩のこと。うつせみ　空蟬、單に蟬のこと。から　次の「たま」に對して骸なきがらの意にしたものだが、實際は殼卽ち脱け殼のことである。玉　魂のこと「玉」は宛字。

評　空蟬のからはどの木にも〳〵とゞめては居るものの、その魂は（どこへどうおちついたものか）その行くへが（一向にわからないとは實に、はかない）悲しい（次第ではあるわい）

評　三寸息絶えれば萬事休する人間のはかなさ亦此と同じだと樣の比照で、稍趣深く聞えるが蟬のぬけがらは唯「あれを出た蟬は今どこの梢にかしましき鳴聲を立ててるよう」との聯想を誘うて哀愁の氣を淺める嫌がある。

かはなぐさ　　ふかやぶ

四四九　ぬば玉の夢になにかはなぐさまんうつゝにだにもあかぬ心を

考　初句　元「むばたまの」

語　かばなぐさ　河菜草、淡水産の藻類をいふ。河苔・水苔なども書く。河菜で草の意味があるのを、更に草とつけたのは後世振の稱呼であつて、始めは唯河菜といつたものであらう。ぬば玉の　黒・夜等の枕詞。轉じて夜見る「夢」の枕詞にしたもの。「むばたまの」は古事記萬葉などに用ひたもので、それが父韻がとれて「うばたまの」となつたものであらう。夢に　夢に戀人を見たからとて。

評　うばたまの夢に戀人を見た(位のことで)どうして慰められよう？　現にその人に逢つてゐてさへ、飽かぬ思ひに(焦れてゐるものを)

評　戀歌にしては情熱が足りない。外面でばかり熱烈さを示して、內面的に燃ゆる思ひが出てはゐない。

さがりこけ　　たかむこのとしはる

四五〇　花の色はたゞひとさかりこけれども返々ぞ露はそめける

考　作者　元「〇〇〇〇〇としはる」

語　さがりごけ　蘿・松蘿・女蘿　猿麻持皆同じ物をいふ、地衣類の一種で深山幽谷の老樹大木に白髮のやうに垂れさがつてゐる。白髮とは云ひ條實は淡綠白色の長さ一尺餘で多くの細い枝が分れて居る。その髮の先に近い所に數個の胞子を藏してそれが生殖作用を營む。近頃これを採つてアルコホル浸出液を作り、金線草丁幾といつて販賣する藥品は癆癘や肺病に特效があるといふ。たかむこのとしはる　高向利春、寛平・延喜・延長にかけて朝仕し武藏少掾から同介に轉じ從五位下に叙し武藏守に任ぜられた。

語　花の色はたゞ花盛りの一時だけ濃く(て、あとは忽ち褪せたり散つたりする)けれども、(この一盛りをつくらうとて實は前々から)白露がくりかへし〳〵(丹念に)染めたものなのである。

評　花の色を白露の故にするといふ着想は宜しいが、「花の色のたゞひとさかりこけれとて返す〳〵もそむる白露」「……あはれその露」など、少しこの處に重心を置くと、暗示多い歌になる處をこの形では、露そのものの心づくしだけは詞面に出て、作者が露に寄せた同情は少しもあらはれてないのが物足りない。

にがたけ　　しげはる

四五一　命とて露をたのむにかたければ物わびしらに鳴のべの虫

考　なし。

語　にがたけ　「苦竹」とあてて「めだけ」のことだといふは諾け難い。この次に「かはたけ」がある處から推して矢張「苦竹」の方でくさびらの一種であらう。うつぼ物語嵯峨院の卷に「くさびらどもあつい物にさせ、にがたけなど調じて白かれのかなまりに入れつゝ參れば」命とて　露を命のよすがとして　わびしら　「ら」は音調上添へた接尾語、次の「に」と共に形容詞「わびし」を副詞化したもの。

語　露を命のよすがとして頼むには(あまりにはかなくて)頼み難い(かといつて外に何もたよる所がない)物佗びしさに野邊の蟲が泣いてゐるよ。

評　露しげく蟲の音しげき秋郊の一境、さして優れたといふではないが一通りは歌ひこなせてをる。

こゝに顯では一一〇四の歌がある。

かはたけ　かげのりのおほきみ

四五二　さよふけてなかばたけゆく久かたの月吹かへせ秋の山風

考　なし。

集　かげのりのおほきみ　景式王、四品惟條親王の後で寛平九年七月十三日從四位下に叙せられたといふ外不詳。かはたけ　茅蔣・顆擔子菌の一種で夏秋の交、陰濕の山野に生える。傘の大きさ徑三四寸柄の高さ約四五寸群れて生えて居る。之を乾かして食用にすると松茸のやうな香氣は無いが、又一種の風味がある。さよふけて　「さ」は接頭語、「ふけ」は夜の時間のたつこと、たけゆく　闌け行く、更けて行くといふも同じ「たけ」は「たけなは」と同一語系　久かたの　月の枕詞。

講　おい秋の嵐よ――、夜の更たけて半ばも過ぎて（段々と入方に近づいて）行く月影を（どうぞ）吹きかへしてくれよ。

評　良夜寢につくことも忘れて月に見惚れた人の狂激が一首の詩致となつて居る。下の句の思ひ入つた山風への至囑が古來賞美の句である。「妹が門見ん靡けこの山」と叫んだ人麻呂の放膽の脈を引いてやがては新古今時代の

雲は皆拂ひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな　攝政良經（慈圓）

秋ふかき淡路が島のありあけにかたぶく月をおくるうらかぜ

と伸びて行く一道標とも謂ふべき立意である。

わらび　眞せい法し

四五三　烟たちもゆともみえぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけん

考　三句　元・筋「草のなを」

六帖六わらび　同。

集　眞せい法し　眞靜法師、目錄に「御導師、河内國人」みえぬ　烟がたつとも見えぬ。燃えるとも見えぬと樣に上全體にかゝる「ぬ」である。わらび　藁火と蕨とかけたもの。

講　別に煙がたつて燃えて居るやうにも見えない草をばわらびとは（一體）誰が初めて名をつけたものであらう。（わらびの名はふさはしくない）

評　蕨を藁火にいひかけたものはこれよりも六帖わらびの

みよしのの山のかすみをけさみればわらびのもゆる煙なりけり

の方が優れて居る。一體こゝのは契沖の評した通り物の名の歌とは本質的に相違がある。契沖のも金子氏の評も、前に折句を入れた位だから嚴撰ではないが、先づは大目に見るべきだとある。その通りだがこれはむしろ俳諧歌に收めるべきものだ。後世日常の洒落によくいふ

「一羽の鳥をにはとりとは是れ如何？」（一枚でもせんべいといふが如し）

の等類である。

さゝまつ　びは　ばせをば　きのめのと

四五四　いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

考　初句　元「いさゝめの」筋「いさゝめの」

集　さゝ　篠。まつ　松。びは　枇杷　ばせをば　芭蕉葉。きのめのと　紀乳母、名は全子、源澄に嫁ぎ一男益をあげ陽成天皇の御乳母にあがり元慶六年正月八日從五位上に叙せられた。いさゝめ　率爾とあつて假初の意、萬葉七譬喩歌宿木一三五五に

まき柱造るそま人伊佐左目にかりほのためと造りけめやも

物名　四五一・四五四・四五五

心ばせ　心もち、語義は「心蹲せ」か？　それが轉じて「心ばへ」となるのでなからうか？　若くはその遊か？　人に　第三者の人ではなく相手の男をいふ。見えつゝ　見られつゝ。

講　假初に(君との逢ふ瀬を)待つまに(大分の日がたつた。たゞ徒に御身を戀ひ焦がれてゐる)わたしの心をあなたに見られて(ぢらされるだけ　のためにサ。

評　待つ戀の切なさを相手に訴へたもので、物名といつても四つまで咏み込むのは隨分難題なのを、ともかくも一通り咏みこなしえただけは手際と謂はねばならぬ。が、その爲めに表現が稀薄になつてをる。若しさうした制限がなくてこの情緒を歌にするのだつたら、恐らくは他にもつと思ひ入つた強い云ひ方があらう。

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

四五五　あぢきなしなげきなつめそうきことにあひくるみをばすてぬ物から

考　作者　清「兵衛たゆふさのもとには(ゐける(正本)」　元「忠房宅の兵衛」

五句　清「すてぬものかは」

語　なし　梨。なつめ　棗。くるみ　胡桃。以上三つのものは毎年十月信濃國から朝廷へ献上することに定められたといふ記事が三代實錄第五十卷にあるので契沖はその本文をあげて「これをもておもふに此例貢の物をもてきたる時、これよめとおほせなどの有ける時よめるにや」と推測して居る。兵衛　不詳、日錄には「藤原高經朝臣女。藤原忠房家人也」とある。あぢきなし　味氣無し　つまらない。(面白くもない苦々しいとしたのは少し違ふ)なげきなつめそ　歎き勿詰めそ、歎き詰めに歎いたりはするな。すてぬ物から　棄てもしないで居ながら。

講　あゝつまらない　さう)歎いてばかり居るものでない。(此迄數々の)物憂い目に逢つて來たその身をば(思ひきつて)棄てもしないで居てサ。

評　人の愚痴に對しての忠告とも、我身の煩惱に對する自省ともとられる。歌境は契沖のも一說だが、さうした定例の貢物なるが故に、つひ聯想上三つを物名として取材して工夫したとも想はれる。生活態度の觀照から見ては相當に趣がある。徹底と盲從とこの二つの間に喘ぐ人生の多くは皆この歌をつきつけられても一言もないものばかりで、世がつまらなければ思ひ切つて出家遁世すればよし、さもない以上何事も御無理御尤もで不平なしに服從して居ればよいものを服從もせず回避もせず、その中間に趦趄逡巡しながら不平たらく〳〵で居るといふのは賢いやうで、實は愚かな生活である。が併し作者はそれまでの自我に眼ざめて歌つたものではなからう。それに形式が拙くて音調が流麗でない。

からことといふ所にて春たちける日よめる　　安倍清行朝臣

四五六　浪のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべやあらたまるらん

考　詞書　元「唐琴といふ所にて春の立ちける日よめる　安部清行〇〇」

語　からこと　韓琴、備中の港であり名所でもあつた。安部清行　安仁の男八人の中貞行・宗行・清行・興行が最も名を知られてゐたといふ。承和三年文章生に補せられ、爾來從五位下・侍從・太宰小貳・錦錢長官・周防守・從五位上・左衞門權佐・右少辨・藏人・伊豫守・播磨守・左少辨・正五位下・右中辨・陸奥守・讃岐守・從四位上と閲歷して昌泰三年七十六歳を以て逝いた。けさからことに　今朝から異に、今朝から音色がかはつて、春のしらべ　春の音調、四季に五調を配して

春双調　夏　黃鐘　土用一越　秋平調　冬盤涉

などもいふ。

講　からことといふ所で立春になつた日咏んだもの。浪の音が今朝からかはつて聞えるのは(春が立つて)その調子が

あらたまつた故であらう。

評　「からことに」を琴の「韓琴に」と秀句にしたものと見て「浪の音が今朝はまるで韓琴のやうに聞えるのは」（韓琴は新羅琴をいふか？）としたのも一つの解釋だが、さうなつては物名の技巧が餘り働かないし、浪の音が琴のやうだなどいふのは、この韓琴の琴に興を覺えて作つたものや、すつと後樣の着想だと想ふ。何にしても旅の空で春がたつと思ひなし波の音まで樣かへて今日は春らしい調べをたてて居ると咏んだのは、趣向も云ひまはしもなだらかである尙「からこと」を歌つたものに九二一がある。

考　清こゝに一一〇四の「をきのゐみやこへしま」の歌がある。

いかゞさき

四五七　かぢにあたる波のしづくを春なればいかゞさきちる花と見ざらむ　かねみのおほきみ

考　二句抄「さをのしづくを」
　三句　清「いかゝさきくる」

補　いかゞさき　この地名三ケ處ある、一つは常陸國東茨城郡大貫町附近の伊加々崎（源氏物語常夏の卷の近江の君の弘徽殿に宛てた消息にあるもの）一つは河内國北河内郡枚方町大字伊加賀泥町の伊加賀崎だが、次の辛崎と並べた點から、又王朝人に親しみある點から見ては近江國伊香郡伊香貝村の伊香貝崎のことであらう。蜻蛉日記にも「石山にまゐりて舟にてかへるとて　いかゝさき　山ふるきのさきなどいふ所をみやりて、あしの中よりこきゆく」とある。かねみのおほきみ　兼覽王、二三七參照。かぢ　舟を漕ぐ櫂（梶・楫・櫂・棹なども書く）

補　春のこととてかぢに當る波の雫を（まあどうして）咲いては散り咲いては散りする花と見ないわけにゆかう。

評　春ならずとも楫の雫の綠波に見え隱れする趣は、丁度紫陽花の開落を見るやうである。まして春といふではないか地上に紅紫の絢爛あるに比べて「さきちる花」といふこと着想に於ては極めて妥當である。一說に「さきちる」の「さき」は語調上、物名咏込上そへたもので重點は唯「ちる」にあると。けれどもさう見ては舟の進航中絕えず見られる白花綠波の一開一落の動的な美を歌つたことにならないから、自分は前解に執しようと思ふ。唯併し「いかゞさき」の名からして理窟つぽいのだから下の句はそれがよしや誰かの問に答へた歌だとしても、あまりにぎごちない談理の調に墮ちて居る。

からさき

四五八　かのかたにいつからさきにわたりけんなみぢはあともものこらざりけり　あぼのつねみ

考　五句　元「ゐられざりけり」

補　からさき　辛崎とも唐崎とも書く。近江國滋賀郡下阪本村大字唐崎、こゝに松の名木があつて之を唐崎の一つ松といひ、唐崎の夜雨は近江八景の一つになつて居るなど已に周知の名所である。あぼのつねみ　阿保經覽、寬平五年七月廿三日主計權少屬を初任とし延喜十一年九月十六日主稅頭（此より前從五位下）となり翌十二年正月十七日に卒去。

補　（あの人は）向ふのかた（方とも潟ともいふ）にいつから先へわたつたのであらう。浪の路にはあともないので（さだかにいつとも見分けがつかぬ）

評　拙い作だ。同じ「からさき」を隱した次の伊勢のと比べては雲泥の相違がある。

四五九　浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらん

考　なし。

類　ちりくめり　散つて來ると見える。風やなるらん　風が鳴るであらう。何と云うて鳴るか？　水にも春が來たと鳴るとの意

釋　浪の花が沖の方からさきへ開いて散つて來ると見える、そこで海の面を吹く風も今やこの水鄕にも春が來たと鳴つて吹くことであらう。

評　前譯で一通り意味が聞えないではない――否これとても前の「かのかたに」などよりは遙にまさざまに作られて居るが、愚考これは語句を「風やなすらん」として一層引きたつものだと思ふ。浪の花を咲かすのは風のはたらきによるのだから

浪の花が沖からさきに咲いて散ると見えるこれは大方、あの沖吹く風が水の春を產み出したものであらう。といふ方が面白い。事實「なすらむ」としたのもある。何れかの原本に「成らん」とあつてそれを轉寫するのに、一方は「なすらん」とし一方は「なるらん」としたもので、原作はその「なすらん」の方であつたと見るのは誤つて居らうか？　「水の春」といふ詞は三〇二にある「水の秋」と共にこの期歌人が好んで用ひた句である。

元本・筋には一一〇四の歌がこゝにある。

かみやがは　つらゆき

四六〇　うば玉のわがくろかみやかはるらんかゞみのかげにふれる白雪

考　なし

類　かみやがは　紙屋川、洛北、平野と北野との間を流れて末は賀茂川に落ちる。細い流れではあるが水が綺麗で昔は宮廷の御料紙をこゝで漉いてゐた。所謂かうや紙・かんや紙などあるのがそれで、その爲め圖書寮の別所として紙屋院が野宮の東にあつた。うば玉の「わが」を隔てて下の「くろ」にかゝる枕詞。

釋　我が黑髮も(年のせいで白髮に)變つたらしい。鏡の影に(これこの通り)白雪がふつてゐることよ。

評　貫之こそは眞にこの部の名手だと思ふ。うまい處に隱し題を配して、一首何の滯る處もなく老來歎の好咏を仕立てて居る。想は李太白・張九齡始め多くの漢詩人や家持以下の歌人によつても歌はれたもので、後世かの檜桓の嫗が

としふれば我黑髮も白河のみづはぐむまで老いにけるかな

などとも通ふものだが、物名をこめてかうまで流麗に咏んだのは實に巧妙と評したい。拾遺卷十七雜の一一五八に同じ貫之の

師走のつごもりがたに年の老いぬることを歎きて

うば玉のわがくろがみに年くれてかゞみのかげにふれる白雪

とあるは後年作者自身詞書の歌境に合ふべく改作したもの歟。

よどがは

四六一　足引の山べにをれば白雪のいかにせよとかはるゝとさなき

考　作者　元・筋「貫之」

六帖一雲「よみびとしらず」　拾遺八雜上三八〇　同。

類　よどがは　淀河、賀茂川の下流、山城淀の邊の名だが又延長してなにはの海にそゝぐまでの稱となつた。歌に句に詩に咏吟多く今日も尙あの大大阪に水鄕の美を帶ばせて居る。山べにをれば　山べにおちついて居る。卽ち「山住をして居ると」の意　いかに

せよとか　この上まだどう物思ひをせよといふのでか。

語 （世の物思ひをすまいとて）足引の山べに住んで居ると（この上更に）どう物思ひをせよとてか、白雲が絶えずかゝつて晴れ間がない。

評 白雲のたなびくといふことは、その境已に端山外山の淺いものではなくて靜かに淋しい奥山であることを想はせる。偖は安住を欣求した回避の遁世者が、青天白日のすが〳〵しさに飢えて吝嗟したと觀られるが、作者體驗の歌ではなからう。それに白雲靉靆は寧ろさうした世捨人の悦ぶべきもので、「白雲ではあはない」といはれた藤村博士（作先生）の説も尤もだと思ふ。では「黑雲」にしてはとでも云はれようが露骨な語調が他の優美を傷ける。何とか外の一工夫がほしい。同じ淀河を題にして拾遺の三七九に在原元方の咏んだ

植ていにし人もみなくに秋萩の誰見よとかは花の咲く覽

の方が優れて居る。

かたの　たゞみね

四六二　夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなき我心かな

考 二句　六帖六夏の草「上にしげれる」

四句　六帖一行く方もなき」

語 かたの　交野、河内國交野郡交野、丘に櫻に鷹狩に古來有名の地。夏草のうへは「夏草の上葉」と解く、古人のさうした解はないが「上は」と唯體言助辭の「は」と看るのは作意に違ふと思ふ。ゆくかたのなき云々　慰める術のない我心との意、心ゆくとか心をやるといへば快適の感をいふのだが、今さうした快適は何を思つても得られないといつた心境を詫びたものである。

語 まるで夏草の上葉が茂つて居る沼の行く方もないやう我心も何一つ慰める方のない昨今の（心持は何とわびしいことかな）。

評 或は上句を四句の序詞と見たのもあつてこれも一説と看られる。沼といへば生の沈滯を想ふによせある天然の水溜りである。まして今は夏草の時期と云ふではないか。又ましてその夏草の葉茂く沼の上をおひかぶさつて居るといふではないか、そこに生命の八方塞りに遭うて喘ぐ死水を想像するには充分なものがあつて下の句では今我心はさながらこの死水同樣だと落したもので作意はよく聞えて居る。

或は上句を非境に沈淪して誰一人目をかけてくれるものなき譬喩とした解もあるがよくない、これは外的境遇を歌つたものでなく、主觀的心境を悲歌したものである。この歌は近代的憂鬱の情趣をも湛へて居るから、現代生活の基調から鑑賞しても面白い。

かつらのみや　源ほどこす

四六三　秋くれど月のかつらのみやはなる光は花とちらすばかりを

考 清・元・筋・顯　はこゝに左の一一〇五の歌がある。

あはた　凡山茂（清なけしのあやもう）

うきよなればよそめとのみぞ逃れゆく雲のあはたつ山のふもとに　（左註略す）

初句　元「あ○くれど」

三句　爲「みやはなほ」

語 源ほどこす　源惠、父を弱祖父を弘（大納言）といふ。彼は延喜四年二月廿六日主殿助に任ぜられ、從五位下・信濃守・從五位上

伊豆守・治部大輔・山城守・齋院長官・右衛門督佐・正五位下を經て延長六年正月廿五日丹波守に任じ同九年卒した。かつらのみや　桂宮　拾芥抄に「六條北西洞院西」今昔物語に一五條西洞院にかつらの宮と申す人おはします、その前に大なるかつらの木あり故に名づけまゐらせたるなり」そして顕註に「桂宮ハ宇多天皇ノ皇女孚子内親王也母仲野親王孫也」とあるから、恐らくはこの宮のすまゐであつたらう。秋くれど　秋が來ても、秋は凡ての草木の實のる時との通想を以ていふ。月のかつら　一九四參照。みやはなる　實やは結ぶ、實のるやうなことがあらうか？　決してない。光は　「光を」としてよささうだが、上の「實」と對照する爲め「は」とおいたものと見える。ちらすばかりを　散らすのみなるを、散らすだけのことだのにそれに（世間の人はなぜに無上にほめはやすことであらう）。

評　秋が來ても月の桂の實のなることがあらうか、決してありはしない。（なるほど）光は花かとばかり美しく散らすが――唯それだけなのに（世人が月をもてはやすのは異なものぢや）。

評　この歌本當に物名になつてゐる部分は「みや」だけであるからこの歌態としての上乘なるものではない。

百和香

四六四　花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ　よみびとしらず

考　詞　清「はくわかう」
　初句　清「はなかことに」

類　百和香　神仙に緣ある奇しき香の名、和名抄に神仙傳を引いて「淮南王張二錦繡之帳一燔二百和之香一燔也音繁」とあり。漢武内傳にも武帝が西王母を待ち迎へる處に「武帝張二靈錦帷一燃二九光微燈一焚二百和香一候之」とあり。唐詩紀、何遜が七夕の詩にも「月映三九微火一風吹三百和香一」とある。類聚名物考には孫眞人備急千金要方卷十七を引いてその調劑法を示して居る。

沈水香五兩、丁字香・鷄骨香・兜婁婆香・甲香各三兩、薰陸香・白檀香・熟捷香・炭末各二兩、零陵香・青桂皮・青木香・甘松香・白漸香（柴也）・藿香各一兩、雀頭香・蘇合香・安息香・麝香・燕香各半兩、右二十味爲レ末、酒漬輭再宿、酒氣歇以二白蜜一和、内磁器中、蠟紙封、勿令二氣洩一、冬月開取用大佳

とある。だから季吟や契沖が「百草を取つて合する香」と說いたのもひたぶるの强ひ言ではない。

評　風よ（其方は）どの花もこの花もまだ飽きもしないのに散らしたのだから、どれほど（ひどく）自分が（其方を）怨めしいと思つてゐるかよ、（「かは」は反語ではなく强調の咏歎である）。

評　「花を惜しみ風を恨む」といふ有りふれた着想だが、難題を巧く咏み込んだものだ。

すみながし　しげはる

四六五　春かすみながしかよひぢなかりせば秋くるかりはかへらざらまし

考　なし。

類　しげはる　滋春、三五五參照。すみながし　墨流、安齋隨筆九の三〇四に「水の上に硯墨を點じ、浮けてゆりめぐらして、其墨を紙に移して文をなすを墨流しと云ふ。是れ上古よりあるべし」と云つて之をするについての細い注意まであげて居る。好古日錄にも「墨流、後世ノ種々奇巧ヲナス如キハ古昔ナシ、淡墨ヲ用フ、一條ノ翠烟ノ風ニ順ヒテ飄ル如シ、四百年許リノ物ニ有リ甚ダ雅趣アリ」

評　春霞の中にサ通ひ路がなかつたならば秋來た雁は歸らなからうのに、（通路があるばつかりに雁が歸るよ）

評　四句「秋來し雁は」とあるべきだといふ如何にもその通りで、現に歸雁を眺めて春靄の彼方にうすれ行く姿を見つゝ名殘を惜しんだ歌としてはさうあるべき所だが、これはたゞ「すみながし」に即して立案したもので机上で捏

つちあげたものだから自然作爲のあとが見える。又隨つて唯一つの道理を冷たく述べたやうな拙い形になつてゐる。或は「秋くる」は雁の修飾句として輕くおいたものと見るのも一解であらうし、又二句を「汝がしかよひ路」とし、春霞を以て春の代表的景物とし

春霞よ汝のやつて來る通ひ路がなかつたならば、秋來る雁はいつまでも歸る時を知らないで止まつてゐようのにとも解き得る(而かもこの方適確に「すみながし」に合ふ)が、自分にも確信がないし、どう解かうとも「秋來る」の現在法は作者の位置を春秋二元に立たせる修辭として拙い。

おき火

四六六 ながれいづるかただに見えぬ涙川おきひん時やそこはしられん　　みやこのよしか

考 顯　この歌前のと順序顚倒

初句　元・筋「ながれくる」

四句　元「おきぬむときや」

五句　顯「ソコハシラシム」　三「そこはしちなん」(一本)

講 おき火　熾と書き盛におこつて居る火、おこし火　義。みやこのよしか　都良香一五〇四―一五三九、承和二―元慶三、王朝初期有名な漢學者にして漢詩人で知られて居る都氏文集(群一二九)といふがあり文德實錄十卷の主なる撰者でもある　ながれいづるかただに云々　流れ出る方卽ち源さへも見えない涙川、とめどなく流れる涙を川に譬へた。おき沖、通常は海の岸を離れて遠い深い處をいふが又河の中流の深い處をもいふ。「沖」は水と　との會意文字　ひん時　乾ん時、ひあがる時。

講 流れ出る源さへも見わかぬ涙川は川の眞中の沖が乾たならその時始めて川底だけはわかりもしよう。

評 萬斛の血涙猶我悲しみを盡さずといつた風の悲戀の哀訴にしたてたものだ。

ちまき

四六七 のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく　　大江千里

考 三句　相「たれなれど」　三「なへされば」

五句　相「たのみなりけり」

講 ちまき　粽とも稷とも書く、元は茅卷の義か？　茅の葉に飯を包み黃絲で括つた食品で延喜式に見えて居る。後世端午の節句に團子の棒を笹葉に包んで蒸したものを「ちまき」といふのはそれの變つたものであらう。のちまき　後蒔、苗の芽生えぬ處だけ後に蒔き直すこと。たのみ　「田の實」と「憑み」との秀句。

講 後蒔で後れ生えの苗だけれども、あだにはならず(秋になれば矢張)田の實を結ぶ憑みがあるときいて居る。(だからおくれたからとて自暴自棄することはない)。

評 晩學の徒に對する激勵の辭で教訓味はあるが趣味は乏しい。

はをはじめるをはてにて、ながめをかけて、時のうたよめと、人のいひければよめる

四六八 はなのなかめにあくやとて分ゆけば心ぞ共に散りぬべらなる。　　僧正聖寶

考 詞書　遍昭集「は文字をかみにてる文字をはてにてる文字をかくす」

元「はをはじめにてる〇〇〇にてながめをかけ〇〇〇の歌よめと、人のいひければ」

筋「はをはじめにて……」

作者　清「僧正遍昭サウホウ」

元・筋「遍昭」

顕「此歌作者甚以不審也通本ニハ書二僧正遍昭一院御本ニハ停レ遍改二聖寂一陽明門院御本ニハ聖寂也仲實目錄ニモ聖寂也哀傷部延僧都歌也通本ニハ遍昭也院御本並仲目六二ハ勝延也凡如レ此作者本々不審」

二句　八雲御抄「めにやあくとて」

四句　元「こゝろととも○」

倘元永本には此次に左の日附がある。この日附こそは最近の古今集研究上喧しく論議注目せられるものなのである

古今和歌集卷第上

元永三年七月廿四日

雜 ながめ　長雨、霖雨。時のうた　その時の景致をよんだ歌。僧正聖寶　春日親王の後、寛平より延喜にかけての高僧で大僧正、東大寺別當延喜九年七月六日入滅七十歳（一説に七十六歳）。

語 「は」を始め「る」を終り「ながめ」を秀句にそしてこの節の歌をよめといつたからよんだもの。

花の中をば（見る）目に飽く期もあらうかとて分けて行くと（どうして飽くどころかます〳〵花に心が惹かれて）心までも花と共に散り亂れさうである。

評 飽く期を知らぬ花の愛を歌つたもので、色即是空を説く僧正が時に桁を外して上品にくだけた痴想も面白く、その上四つまで條件づけられながら苦もなく歌つてのけてた手際も優れて居る。後に新勅撰二十雜歌の一三七六に

春のはじめに定家にあひて侍けるつゐでに、僧正聖寶はをはじめるなはてにてなかめをかけて春の歌讀て侍よしをかたり侍りければその心よまんと申てよみ侍ける

大僧正親厳

初子日つめるわかながめつらしと野への小松にならべてぞみる

とこれも此種の巧咏である。僧正の歌興よく大僧正の歌興を誘うたものか。

綜合古今和歌集新講　上卷終

昭和四年十二月十日印刷
昭和四年十二月十五日發行

古今和歌集新講上卷 奥付
【定價五圓八拾錢】

著者 三浦圭三

著作權所有

發行者 東京市本郷區元町二丁目六十六番地 生地龍太郎

印刷者 東京市牛込區山吹町百九十八番地 萩原芳雄

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地 啓文社書店
電話小石川五五二九番
振替東京三八七七六番

啓文社出版參考書目

弘前高等學校教授 三浦圭三先生著

綜合新文學概論

▼菊判總布製
▼九百頁國入 定價五圓九拾錢（送料廿四錢）

●●●本書は著者が廣く學界に問はんとする一大力作●●●

本書は三浦教授が『其の學究的生活の前半生に於ける總決算』として執筆せられたるもので實に著者近來の一大力作である。いま本書を既刊文學概論と比較する時は(1)在來諸名家の名論・卓說を批判的に綜合せること。(2)其が例證を主として吾々に最も親しみある國文學より採り夫に卑近なる鑑賞や評釋を加へて讀者の文學的高等常識の涵養に資せること就中(3)文學概論を儼然たる一個の科學として體系づけ以て作者並に讀者に對して創作の用意並に鑑賞批判の態度に於ける學的基準を示せること等を最大特色として誇ることが出來る。殊に著者の行文の輕妙にして雅致に富み諸者をして卷を描く能はざらしむる底の魅力あるは世既に定評ある所、眞に類書中の白眉である。文藝研究家・文藝愛好家の必備を望む。

三浦圭三著 ●綜合日本文法講話 定價四圓八拾錢（送料十八錢）

弘前高等學校教授 三浦圭三先生著

新刊

綜合日本文法講話

◆菊判布特製 定價四圓八拾錢
◆函入六百頁 送料十八錢

本書は著者獨得の體系の下に廣く古今東西の諸書より生々潑溂たる材料を自在に拔き來り輕妙にして雅致に富める筆致を以て日本文法の眞髓を綜合的に講述せるものである。規則慣例の說明は素より引例の末に至るまで乾燥無味なるを寧ろ當然とせる在來の日本否世界の文法書に新樣式を示し且つ文法研究上必然的に附隨するかの如く思惟せられつゝある苦感を全滅するの可能を示範する意味に於て本書は實にエポツクメーキング的大著たる名譽を擔ふものである。何人と雖一度本書を繙く時は津々たる興味を以て一氣呵成に讀破し得ることに驚嘆すると共に不知不識活殺自在の妙法を體得し應用自在の眞義を發見し得ることに驚喜するであらう。文檢・高檢受驗者、文法教授者の必讀を望む。

橘文七先生著

◆四六判布製
◆五百餘頁函入

定價貳圓五拾錢　送料十二錢

新刊

文檢參考 古事記選釋

古事記は文檢國語科の指定參考書で、受驗者の必讀書である。註釋としては宣長の古事記傳が絶對の權威であるが、頗る浩滑で全部の精讀は容易でなく、殊に同趣同樣の文が多いから受驗には全部を讀む必要はない。本書は選釋とは云へ神代の卷全部と他の重要箇所を悉く蒐集して、各節に適切な標題を附し原文・譯文・語釋・通釋の四段に別ち、譯文は記傳を標準として一字も苟くもせず、語釋は記傳の註釋を根據として精細に、通釋は清新な現代語によりて何人にも解り易く叙述してゐる。加ふるに最近十五ヶ年の文檢高敎檢定に出題された箇所を明示して受驗者の便を計るなど、現代に於ける唯一の小古事記傳である。文檢受驗者の必讀を乞ふ。

橘文七著　◆文檢參考　明治大正文學史要　新刊　定價貳圓參拾錢　送料十二錢

橘文七著　◆文檢參考　國語學史要　三版　定價壹圓八拾錢　送料十二錢

橘文七著　◆文檢參考　支那文學史要　新刊　定價貳圓四拾錢　送料十二錢

●橘文七先生著

◇四六判總布製
◇三百五十頁函入

定價貳圓參拾錢　送料十二錢

新刊

熱狂的歡迎
忽ち重版

明治大正文學史

本書は興國の氣運に乘じ、泰西思潮の影響を受けて文運靄然として興れる維新初頭より、紅白紫黃色とり〴〵の花を開き、眞に百花燎亂の大盛況を現出せる明治大正六十年間の文學略史である。著者は力めて穩健公平なる見地に立ちて比類なき迄に複雜多岐なる此の期の文學を歐化主義・浪曼主義・自然主義・新理想主義・新現實主義並に社會主義の六イズムに體系づけて其發達開展の迹を明示した。而して彼は各イズム文學につき先づ其背景を成す思潮一般を概說し、次で夫れに屬する代表的作家は勿論、苟くも何等かの特色ある作家ならば悉く之を俎上に拉致し來つて、彼等を評傳し、作品を解題し、進んで其傑作の一節を引證して文學的批判を試み、其思想傾向を明快に解剖した。さしも多岐多樣、其歸趨を知るに苦しむ現代文學も一度本書を繙く時は「たなごゝろ」を指すが如く、其正しき相を窺う事が出來る。叙述簡にして要を得而も其裡に汲めども盡きざる興趣を藏す。文檢受驗者、國文學研究者並に一般文藝愛好者は須く速に本書を繙いて現代文學の全相を正解し、且文學の鑑賞眼と批判眼とを開かるべきである。必讀を待つ。

三浦圭三著　◆綜合新文學概論　菊判上製　九百頁函入　定價五圓九拾錢　送料廿四錢

橘文七著　◆參考國語學史要　四六版　上製函入　定價壹圓八拾錢　送料十錢